
ポケットモンスター +

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター+

【Nコード】

N0006E

【作者名】

HERON

【あらすじ】

森の隠れ家で遊んでいたタキとショウ。しかし、二人は突然気分が悪くなり意識を失ってしまう。しばらくして目を覚ました二人だが、そこは見たことも無い場所であった。

第一回。こじはどじ？

「なんだよこの絵？」 「何って、僕が思い描くヒーロー像さ」

「こんな弱そうなのが？」 「勇氣と根性は何よりも強いんだ。
この炎はその表れだよ」

「シヨウが何て言おうが、これが僕のヒーロー像さ。僕のピンチを
救ってくれる唯一のヒーロー」

タキの思い描くヒーロー像。それは友達の新ヨウの言うように見
るからに弱そう。

でも、タキの中では最高のヒーロー像。いつか自分が思い描くヒ
ーローが現れないかなあと思っていた。

タキは時々こういう話を熱く語る。そんな話をシヨウは文句も言
わず聞くのだが、必ず否定し、馬鹿にするように笑う。

「そんなことよりあそこ行かないか？ 今日、物凄いなんだよ」

シヨウは、タキの話が一段落ついた後、そう問いかけた。

あそことは、タキとシヨウが小さい頃に家の近くの森の中に作っ
た隠れ家で、高校生の今までずっと使い続けている二人だけの秘密
の場所である。

タキも暇な日だったのでシヨウの問いかけを承諾した。

二人が向かった森の隠れ家は、人の気配が無く静かで、鳥のさえ
ずりや、虫の声しか聞こえない。そんな隠れ家で、二人は和やかに

雑談していた。

「やっぱりここは和むよなあ。疲れているときに最適だぜ」

シヨウは、ハハハツと笑いながらそう話していたのだが、急に様子がおかしくなった。

急に息が荒くなり始め、変な汗まで流れ始めた。そして、「苦しい……」と言いながらその場に倒れる。

「いきなりどうしたんだよシヨウ！」

タキは急に倒れたシヨウに驚き、大きな声で呼びかけていたのだが、タキも次第に気分が悪くなり始め、その場に倒れた。

そして二人は気を失い、意識は遠い世界へと消えた。

しばらくして二人は目を覚ました。しかし、そこは見たことも無い場所であった。

隠れ家があることはあるのだが、周りの風景がおかしい。明らかに地形が違うのだ。まるで、二人がいた隠れ家だけ別の森に移動したような感じになっている。

「ここはどこ……！ タキ……ゆっくりと俺が指差す方向を見てみる……」

シヨウが驚きながら指差している。これはただ事じゃないと思い、タキは素早くシヨウが指差す方向を振り向いた。

そこで二人が見たものは、鳩のようで鳩ではない形をした鳥の大群であった。

二人がしばらく啞然としていると、鳥の大群が二人の方へ向かってきたではないか。それに気づいた二人は、一目散に走り始めた。

「どういうことだタキ！ どうして俺達が追われなくちゃならないんだよ！？ それになんだよあの鳥！ 鳩に似てるけど違うよな！ 鳩じゃないよな！」

「そんなの僕に言われても知らないよ！ 僕だって今の状況が理解できないんだから！」

二人は愚痴を言い合いながら逃げ回った。何かに追われたときの耐久力は凄まじく、何分もの間全力で走り回り、ついには鳥の大群から逃げ切り森からも出ることができた。

森から出た先は見たことも無い場所ではあるが、家などが立ち並び、人もいることからみると町のようである。とりあえず二人は現状把握のため、町の人々に聞き込みをすることにした。

「すみません。この町の名前はなんていう町ですか？」

タキが町を歩いていたらおじさんにそう尋ねた。

「ここはトキワシティだよ。名前も知らずにトキワに来るなんて珍しいなあ」

二人は驚いた。トキワシティなんて行ったことは当たり前前の事、聞いた事すら無いのだ。

「なんだか不思議だな君達は……ちょっと聞きたいんだけど、これは持っているよね？」

おじさんは、大げさに驚いている二人を見て、首を傾げながらそう言っと、真ん中にスイッチのようなものがある、丸い形をした赤と白の色が混ざったボールを取りだした。

二人は目が点になりながら、二人口を合わせて「持ってません」と言葉を返した。

「えっ！？ 持っていないのかい！？ ということはポケモンを持っていないということだね？ 君達はどこから来たんだい！？」

おじさんは、さっきとは打って変わって、焦った口調で二人に問いかけた。

「信じてくれるかは分かんないけど、目を覚ましたらこの先の森にいたんだ。そこで、鳥の大群に襲われて逃げてきたってわけ。それとポケモンって？」

シヨウがそう言っと、タキも頷いた。

「うむむ……きつと、ポケモンに襲われて頭がおかしくなってるんだな……そうだ。まずは、オーキド博士の研究所へ行こう。きつと君達の助けになってくれるよ！」

おじさんは思いついたようにそう言った。

「それはちが……」

タキは、頭がおかしくなっていることを否定しようとしたが、シヨウに止められ、小声で「今はここで言い争いをするより、おっち

やんに従つとくほうが賢明だ。着いていけばなんか分かりそうだし」と言われると、タキも静かに口を閉じた。

「さあ。おじさんに着いてきて」

二人は「わざわざありがとうございます」と小さくお辞儀をしながらそう言つと、おじさんと共にオーキド博士の研究所へと足を進めるのであった。

第二回。ポケットモンスター。略してポケモンの世界

おじさんと共にオーキド博士の研究所へ向かっている途中、三人は新たな町に着いた。

そこは、マサラタウンという町らしく、ここにオーキド博士の研究所があるらしい。

二人は、おじさんに言われるがままにオーキド博士の研究所に足を踏み入れた。

研究所ということもあり、難しそうな本がズラツと並んでいる。まあ、ポケモンの研究所なので、難しい本は全てポケモンに関することなのだが……

研究所に入った後、おじさんが二人を連れて、オーキド博士の下へ連れていった。

「失礼します。オーキド博士……実は、困ったことがあります……」

おじさんがオーキド博士に二人に関する事情を説明した。

初めは笑顔でおじさんの悩みを聞いていたオーキド博士も、事情を聞く内に真剣な表情に変わった。

「何と！ それじゃあこの子達は、ポケモンを知らぬのはもちろんのこと、ここがどこかもわからないというのかな？」

オーキド博士も、今までにない出来事に頭を悩ませている。

「どうにかなりませんかオーキド博士？」

おじさんも、オーキド博士同様に頭を悩ませているようだ。

「そうじゃの……君達はポケモンはおるか、この世界のことすら知らないんじゃない？」

いきなり話を振られた二人はビクツとして「は、はい！」と答えた。

「なら、ポケモンの事について少しでも知識があったほうがよからう。理由はどうあれ、この世界ではポケモンについて知らないとうにもならないからのお」

そう言つと、オーキド博士は紙とペンを取り二人に渡した。

「よいか。今からワシが言うことをよくメモるんじゃぞ。とても大事な話じゃからの」

オーキド博士がポケモンに関する基本的な話を話し始めた。

「まず、ポケモンというのはポケットモンスターの略で、この世界にすむ生き物なんじゃ。ここまではいいかの？」

二人はメモを取りながら「はい」と頷いた。

「うむ。そのポケモンは、モンスターボールというボールで捕まえることができるのじゃ」

オーキド博士は、自分のポケットに入っているモンスターボール

を取り出し、二人に見せた。

「あつ！ これおじさんに見せてもらったボールと同じだ！」

タキがそう叫んでモンスターボールを指差した。

「ほう。それじゃ話は早いのお。このボールはポケモンを捕まえるためにある。その捕まえたポケモンを育てたり戦わせたりして、ポケモンマスターを目指す人たちをポケモントレーナーというのじゃ」

オーキド博士の話を二人は必死でメモする。いや、必死なのはタキだけで、シヨウはなんの焦りもみせずにマイペースにメモしている。そして「博士。質問いいですか？」と手を上げた。オーキド博士も「なんじゃ？」と質問を許可した。

「ポケモンマスターというのはつまり、最強のポケモントレーナーという解釈でよろしいでしょうか？ そして、この世界にはポケモンマスターになるための数々の試練があり、世界中のポケモントレーナーがポケモンマスターになるために日々努力している」

「おお！ 中々鋭いのお。簡単に言えばそういうことじゃな。ポケモンマスターになるためには、ポケモンリーグという大会で勝ち抜かねばならん。しかし、面白いことにポケモンリーグに参加するためにも条件があつてのお。八つある各地の公認ポケモンジムのジムリーダーに勝利して、八つのバッジを手に入れねばならんのじゃ」

この後も、ポケモンが入っている手持ちのモンスターボールは六個と決められていて、七個目以降は、あらかじめ決められてある場所へと転送されてしまうこと。

野生のポケモンを捕獲しても、トレーナーの力量が足りないと命

令に従わないこと e t c …… 色々な細かなことまで説明してもらった。

オーキド博士がここまで説明したということは……二人も薄々と感づいていた。

「ふう。これで説明は終わりじゃ。ちゃんとメモは取れたかの？」

二人はオーキド博士の説明を書き込んだ紙を見せた。タキは、言われたことをそのまま紙いっぱい書いた。

シヨウは、内容をまとめ、コンパクトに書かれている。

しっかりとメモを取っている二人に、オーキド博士も「ちゃんとメモを取れておるのお。感心感心」と上機嫌だ。

「うむ。二人とも立派じゃ。何かご褒美をあげないといかんのお……
… おお！ あれがいいわい」

オーキド博士は、ワザとらしくそう言うと、棚の中にしまわれてあった三個のモンスターボールを取り出し、二人の前にある机の上においた。

「この世界ではポケモンを持っていないと話にならん。この、三個のモンスターボールの中に入っている三匹のモンスターを、君達に一匹ずつあげようではないか。この世界でポケモントレーナーとして頑張っている間に君達の世界に帰れるかもしれんしのお」

ポケモンが入っているモンスターボールを見て、二人は「おお！
と、テンションがあがっている。

「ねえ。モンスターボールの中からポケモンをだしてみたいです

か!？」

「よいぞ。自分の気に入ったポケモンを選ぶには、実際に見てみるのが一番いいからのぉ」

「本当? やったぁ!!」

タキは、相当テンションがあがっているらしく、勢いよく三匹のポケモンをモンスターボールからだした。

しかし、三匹のポケモンをモンスターボールからだした途端、テンションがあがって笑顔だったタキの顔から笑顔が消えた。

「ねえ。オーキド博士。この一番左のポケモンってポケモンだよね?」

「そっじゃよ。このポケモンはヒトカゲというポケモンじゃ」

「僕、ヒトカゲに決めた。うん。絶対決めた。いいよねショウ?」

タキは、真剣な表情でショウに問いかける。

ショウも、タキの変化に驚いていたらしく「あっ……ああ……」と遠慮がちに言葉を返した。

タキが真剣になるのも無理はない。ヒトカゲは似ていたのだ。タキが思い浮かべるヒーロー像に。タキは感激したのだ。現れないかなあと思っていたヒーローが目の前に現れたことに。

タキがヒトカゲを見て感激している最中、ショウも真剣な表情で二匹のポケモンを見ていた。そして……

「俺はこいつに決めた。このポケモンの名前はなんていうんですか？」

シヨウは、真ん中のモンスターボールに入っていた亀のようなポケモンを選択した。

「ふむ。このポケモンはゼニガメというポケモンじゃ」

シヨウは、ゼニガメという名前を聞いて首を傾げる。

「なんだか、パツとしない名前だな。名前を自分の好きなように変更するのはよろしいので？」

「全然いいことじゃ。自分で名前をつけることにより愛着もわくつてもんじゃ」

「えつ。そうなの！　じゃあ僕はヒーロって名前にする！　だって僕のヒーローだからね！」

名前を変えていいという答えに、質問したシヨウよりも、なぜかタキのほうでテンションがあがっている。

「ヒーロー……？　なんのことなんじゃ？　タキ君はポケモンの事を知らないはずなんじゃなかったのかのお？」

ヒトカゲがタキの思い浮かべるヒーロー像と瓜二つだということを知らないオーキド博士にとってはチンプンカンプンな話である。

「あまり気にしないほうがいいですよ。一緒にいる俺でさえあまり理解ができないんですから」

さらっとそう言いかけたシヨウに、タキは、ムツとしながらシヨウに言葉をぶつける。

「じゃあ、シヨウはゼニガメになんて名前つけるのさ!？」

「亀といえばあれだろ。なんてつけると思う?」

怒り口調のタキの言葉を、シヨウは冷静に対処し、逆に質問を返した。

「ノコノコ?」

「違う。マリオから離れろ」

「パタパタ?」

「だから、マリオから離れろ」

タキは、さっきまでの怒りが嘘のように真剣に考え込み、しばらくして、思いついたように勢いよく言葉を発した。

「分かった。タートルズだ!」

「確かにミュータントには近いが違う。ほら、あれだよあれ。縄で縛る最もメジャーな技といえバ!？」

タキは、ようやく答えが分かったようだが、恥ずかしくてその名前がいえないらしく「答え分かつちゃったから自分で発表しなよ……」と、呆れたようにシヨウに言葉を発した。

「亀甲縛りって言葉恥ずかしいか……？ 亀といえばやつぱこの言葉に限る。そこから、名前を略してキッコって名前に決めた」

「忘れてたよ……シヨウって超がつくほどエロいもんね。時々、二重人格なんじゃないかって思っちゃうくらい……」

「うつせえ。がキッコを選んだ理由はそれだけじゃないんだよ。さっき説明で言ってただろ？ トレーナーの力量次第で、ポケモンは命令を聞かないって。だからよ……」

シヨウは、タキに耳打ちで内容を伝えた。

「うわ……それって僕達の世界じゃ犯罪じゃない？ よく思いつくねそんなこと……」

二人がこんな会話をしている間。何を話しているのかわからないオーキド博士は、会話に入ることが出来ず困っている。

それに気づいたシヨウが、咄嗟にフォローに入る。

「あつ、名前の由来については気にしないで下さい。こつちの問題ですから。それはともかく、ポケモンを手に入れた俺達はまずどうすればいいんでしょうか？」

いきなり話を振られたオーキド博士はビクツと驚きながらも言葉を発した。

「ごほん……君達にはいまからポケモントレーナーとして旅に出てもらう。そこでじゃ」

オーキド博士は、棚から赤い色をした機械を二つ取り出し、二人の前にある机の上に置いた。

「これはポケモン図鑑という図鑑じゃ。この図鑑は捕まえたポケモンのデータが自動的に登録されるハイテクな図鑑でのお。君達にはこの図鑑を完成させて欲しいのじゃ」

オーキド博士は、そう言う二人にポケモン図鑑を渡した。

ポケモン図鑑を渡された二人はというと、ポケモン図鑑にとっても興味をもったようで、快く引き受けた。

「そうじゃ。ポケモンと触れ合ういい機会にちよつとお使いを頼まれてくれんかのぉ？ トキワシテイの道具屋にこれを渡してくれるだけでいいんじゃない」

オーキド博士は、まるで計算したかのように、後ろにおいてあった袋を二人の前にある机の上に置いた。

「えゝ。それって、博士が行きたくないだけなんじゃ……」

タキが疑いの目でオーキド博士を見る。

「それはちがうぞタキ君。お使いの途中にポケモンに出会うこともあるじゃろう。そこで、手に入れたポケモンで戦うのじゃ。そうすることによって、ポケモンは技を磨き、精神を磨き、強くなっていくのじゃ。このお使いは、いわば修行じゃ！」

オーキド博士が力強くそう発した。

「むゝ。なんだか丸め込まれたような気がするなあ……」

なんだか納得いかないタキに、シヨウが話しかける。

「俺もそんな気がするんだよなあ。でも、オーキド博士の言うことも一理ある。だから、ジャンケンでどっちが行くか決めないか？ それなら納得がいくだろう？」

「確かに……それなら文句なしだもんね！　じゃあ、早速！」

「最初はグー！」と言おうとしたタキをシヨウが「ちょっと待てよ」と止める。

「ルールをおさらいしとこうぜ。ジャンケンってのは勝てばいいわけだ。勝てば行かない。負ければ行く。これでいいな？」

「なんだよ急に改まって……それでいいと思うよ。それじゃあ……最初はグー！　ジャンケンポン！」

タキはグーをだした。しかし、シヨウはその場では何もださず、タキがグーをだした後に、堂々と後だしジャンケンをしてパーをだした。

「なに堂々と後だししてるんだよシヨウ！　反則だぞ！」

タキがシヨウに不正を訴える。

「おいおい……ルールのおさらいはしたはずだぜ？　ジャンケンは勝てばいい。後だしが不正だとは一言も言っていない」

シヨウの理不尽な言い分に、とうとうタキもブチ切れた。

「もういいよ！ 僕が行けばいいんだろ？ 時々シヨウってそういう嫌なところあるよね！」

タキは、オーキド博士がトキワシティの道具屋に対するお届け物を怒りながら力強く持った。

「行つてきます！！」

タキは怒り声でそう言うと、オーキド博士の研究所から姿を消した。

「シヨウ君。ワシも今のはどうかと思うぞ。今からでも遅くない。一緒に行つてあげなさい」

オーキド博士は、呆れた口調でシヨウを叱った。

「いいえ。確かに俺はタキにひどい事をしました。もしかしたら嫌われたかもしれません。しかし、それだけのリスクを背負っても仕方ないくらい、あなたに聞かなければならないことがあるんですよ。当然。タキ抜きでね」

シヨウが不敵な笑みを浮かべながらそう言い、オーキド博士に何かを質問した。

そんなことを知る由もないタキは、シヨウの愚痴を言いながらトキワシティへと向かう。

第三回。お使いの帰り

タキは、偶然にもポケモンに出会うことなくトキワシティに着き、お使いを済ませた。

「ふう。終わった終わった。シヨウのせいで無駄に疲れたよ全く」

タキはまだシヨウに対して怒っており、愚痴をこぼしながらマサラタウンへ向けて歩いていった。

そのときだ。草陰からタキの前に見たこともない生物が現れた。タキは、その生物を見た途端に勘づいた。今、自分の目の前にいる生物はポケモンなんじゃないかと。

タキはすかさずポケモン図鑑を取り出し、その生物を調べた。

タキの勘は当たっていた。その生物はコラッタというねずみポケモンで、身長は0.3m。体重は3.5kgとのこと。

「ねずみポケモン……そのまんまだけどこの世界にもねずみって言葉があるんだなあ。不思議」

そんな言葉を思わず言ってしまったタキだが、コラッタが戦闘態勢に入っただのを見ると、ハッと我に返りこちらもポケモンをだす。

「そんなこと言ってる場合じゃないや！ ポケモンにはポケモンで勝負だったよね。いけ！ ヒーロ！」

タキはヒーロをだし、攻撃するよう命令した。しかし、ヒーロは戦おうとせず、タキの命令を無視している。

「どうしたヒーロ！ ひつかいて弱らせるんだ！」

しつこく命令するタキにイライラしたのか、ヒーロはコラッタではなく、タキの顔をひつかいた。

「痛たたた！ 何するんだよヒーロ！ 僕じゃなくてあっち！」

コラッタを指差すタキだが、ヒーロは知らんぷりをしてタキの指差す方向を見ようとしてもしない。

タキとヒーロがそんなやりとりをしていると、近くにある木の後ろから笑い声が響き渡った。

「誰だ！」

タキが笑い声がする方向を見る。

すると、木の後ろからヤンチャそうな男が現れた。

「おもしれえなあ。トレーナーの命令も聞けない馬鹿なポケモンと、そのポケモンをコントロールすることも出来ない駄目トレーナーのコンビとは。なあ。俺のコラッタにその馬鹿ポケモンを傷つけて欲しくなけりや、金を置いて今すぐ逃げな。駄目トレーナーでも、それくらいは出来るだろ？」

男のこの言葉に、タキが男を睨みつけた。

ヒーロの尻尾の先の炎が激しく燃え上がっている。きつと怒っているのだろつ。

「残念だね。僕は金はおるか、どんな通貨単位かも知らないんだ。

だから無理だと返答するね！」

「ふん。じゃあ、こらしめてやるしかないよなあ。コラッタ！あの馬鹿ポケモンをボッコボコにしてやれ！」

男がコラッタに命令を下す。

「ヒーロ！ 僕の命令を聞いてくれないなら、僕は命令なんてしない。ヒーロが抱いている怒りをそのままぶつけてくるんだ！」

タキがヒーロに声をかけると、ヒーロはタキの方を見て静かにコクリと頷き、コラッタに向かって突進していった。

突進してくるヒーロに向かってコラッタが飛び掛り、鋭い前歯から繰り出される噛みつきを仕掛ける。それをヒーロが振り払い、体当たりでコラッタを吹っ飛ばした。

体当たりで吹っ飛ばされたコラッタは体勢を立て直すも、衝撃でグラッとゆらつく。

そこを勝機と見たヒーロは、口の中にためた火の粉を吐き出し、コラッタにぶつけた。

これにはコラッタも耐えきれずその場に倒れた。勝負ありである。

「やった！ 強いぞヒーロ！」

タキが拍手しながら喜ぶ。

「ちつ……覚えてろよ！ コラッタが弱すぎたんだ。俺の負けじゃねえ！」

男はそう悪態をつくど、足早に逃げていった。

「あれが、駄目なトレーナーの見本だな。よく覚えとこつ……それにしてもよくやったよヒーロ！ お手柄お手柄！」

タキが笑顔でヒーロを迎える。ヒーロも「カゲエ」と元気よく鳴き、尻尾を揺らしながら笑顔でタキに近づいた。

しばらくの間、さっきまでのやりとりは嘘のように楽しそうにしていたタキとヒーロだが、ハツと我に返ったヒーロが、まだ認めたわけじゃないといった感じでムスツとする。

しかしタキは急に態度が変わったヒーロを見て、怒る様子も驚く様子もなく、ハハハと笑っている。

「いきなり仲良くなるうなんて都合よすぎるよね。でも、絶対に仲良くなってやるからな！ さっきのヒーロの笑い顔、もう一回見たいしさ！」

タキは、ニツコリとヒーロに微笑みながらモンスターボールを取り出し「お疲れ様。ゆつくりお休み」と言うと、ヒーロをモンスターボールの中に戻した。

タキはモンスターボールの中にヒーロを戻した後、ショウやさっきの男に対し怒っていた姿が嘘のように、ルンルン気分でマサラタウンへと足を進めた。

第四回。ポケモンバトル。タキとシヨウ

ルンルン気分でマサラタウンへ着いたタキは、お使いに行くときの怒った顔が嘘のような笑顔で、オーキド博士の研究所に入った。

「お使い終わったよ！」

タキがオーキド博士とシヨウの下へ行き、元氣よく話しかけた。すると、シヨウがタキの下に駆け寄り、勢いよく頭を下げた。

「怒らせるようなこととしてごめん！ 大人氣無いことしちゃったな……」

「いいよ。もう気にしてないし。だから顔をあげなよ。シヨウらしくないしさ！」

タキは笑いながらシヨウを許した。シヨウも「ありがとな」といい、共に笑った。

そして、いよいよ二人の旅立ちのとき。二人がオーキド博士に挨拶をして、トキワシティの先にあるトキワの森へ向かおうとしたそのときだ。

「なあタキ。俺達ポケモンバトルもしたことないだろ？ ここは練習と思って俺とポケモンバトルしないか？」

シヨウがタキへポケモンバトルを要求する。

「いいよ！ 僕も練習が必要かなと思ってたんだ！」

タキは快くシヨウの要求を承諾した。タキは、あえてお使いの帰りに一度ポケモンバトルをした事を言わなかった。一度シヨウをギヤフンと言わせてやろうと思ったのである。

早速モンスターボールを出し、ポケモンバトルを始めようとした二人をオーキド博士が止めた。

「ちょっと待つのだ。ポケモンバトルはいいことなのじゃが、ポケモンバトルに関する注意を少し話しておこう」

それは大事なことだと思った二人は、モンスターボールを一度しまい、オーキド博士の説明に耳を傾けた。

「基本的なことじゃが、ポケモンバトルに勝っても負けてもポケモンのせいにしないこと。勝った人も負けた人も、礼儀正しく最後は握手じゃ。決して人を不快にさせるような態度をしてはいかんぞ。それがマナーというやつじゃ」

小さな声で「確かに基本的なことだなあ」と呟くシヨウに対し、タキは大きく頷いていた。ついさっき、マナーを守れていないトレーナーと出会ったので、とても共感できるのだ。

「それが分かればよいのじゃ。ポケモンバトルは大事なことで、からドンドンバトルして経験を積むのじゃぞ」

オーキド博士はそう言うのと後ろに下がり、ポケモンバトルを観戦する姿勢に入った。

二人は仕切りなおしてモンスターボールを出し、勢いよくポケモ

ンをだした。

「行けヒーロ！ 最強の勇氣と根性を見せてやるんだ！」

「その年で、よくそんな言葉が言えるよな……」

二人の掛け声に合わせて、ヒーロとキッコーがモンスターボールから飛び出す。

「ヒーロ！ ひっかくだ！」

タキは勢いよく命令したが、やはりヒーロに命令を聞く気は無く、命令を無視する。

「もう！ 本当にわがままだなヒーロは！」

タキが困惑しているところを、ショウが逃すはずが無かった。

「なんか知らねえけど、向こうは仲間割れしてるみたいだな。チャンスだぜキッコー。探りの体当たりだ」

ヒーロが命令を聞かないわがままな性格なのに対し、キッコーはトレーナーの命令にキチンと従い、ヒーロに体当たりを仕掛ける。

言い合いになっているタキとヒーロは、キッコーの体当たりに気づかず、モロに体当たりが直撃し、吹っ飛んだ。

しかし、すぐに立ち上がったヒーロは、尻尾の先の炎が激しく燃え上がらせ、キッコーを睨んだ。

そして、キッコの下へ突進し、キッコにひつかくを仕掛ける。

「無駄だ！ キッコ。相手に背を向ける！」

ヒーロのひつかくは見事にヒットした。しかしそれはキッコの背中。つまり、亀の甲羅にヒットし、ダメージは無い。

「普通。相手に背を向けるって行為は負けを意味する行為。しかし、キッコの背中には強力な防具がついてる。こりゃ、有利なポイントだ。そして、この甲羅に身を隠したならどう対応する？」

ショウがそう言うと、キッコは甲羅の中に身を隠し、ヒーロに向けて突っ込んだ。

ヒーロは、キッコの甲羅体当たりをギリギリでかわすが、ダメージを与える術がないヒーロは反撃することが出来ない。

しばらくの間、ヒーロは、キッコの甲羅体当たりを避け続けていた。

しかし、次第にスタミナは奪われ、動きにも疲れが見えてきたそのとき。

「ヒーロ！ 避けるなんて考えちゃ駄目だ！ このまま避け続けても勝ち生まれえない！ 受け止めるんだ。流れを変えなきゃ。無理だなんて考えないで。ヒーロなら出来る！」

タキがヒーロに向けて言葉をかける。いつものヒーロならタキのこの言葉を見殺しにしていたらう。しかしヒーロは、甲羅体当たりを受け止める体制に入る。タキの言葉がヒーロに伝わった瞬間である。

「ちょっと無茶だぜタキ。これで決まりだ。突っ込めキツコー！」

キツコーがヒーロに向かって甲羅体当たりで突っ込む。

「確かに無茶だ。でも、そんな無茶だってヒーロは根性で乗り越えてくれる！」

ヒーロが突っ込んできたキツコーを受け止める。しかし、甲羅体当たりの勢いは止まらず、ズルズルと後ろに押されてゆく。ヒーロは、歯を食いしばりながら根性で我慢する。

「うそだろ……これは予想外だ」

ショウが驚くのも無理は無い。ヒーロは甲羅体当たりを受け止めたのだ。

「よし！ そのまま地面に叩きつけるんだ！」

タキは思いつきりガッツポーズをしてヒーロに命令した。

「キツコー！ 高速回転だ。摩擦を作れ！」

ヒーロがキツコーを地面に叩きつけようと手を振り上げた瞬間を狙い、キツコーが高速で甲羅を回転させ摩擦を作ったことでヒーロが突然の痛みに驚き、手を離れた。

「惜しい！ もう少しだったぞヒーロ！ でも、流れが変わった。押し切れるかもしれない！」

意気込んでいるタキサイドに比べ、ショウサイドは少し暗い雰囲気

気になっていた。

「ふう。このまま押し切れると思ってたけど、そりゃ甘かったか…
…もうやるぜ俺は。奥の手使用だ」

「まだ奥の手が……やっぱり凄いやシヨウは。でも、それもヒーロ
は根性で乗り越えてくれると信じる。僕達の奥の手は根性だ！」

この瞬間。余裕が見えていたシヨウが消えた。

二匹のポケモンのスタミナも少なくなってきた今、決着の時は近い。

第五回。決着！ タキVSショウ！

「キッコー。水鉄砲」

「ヒーロ！ 火の粉で応戦だ！」

キッコーの放った水鉄砲に対し、ヒーロは火の粉で応戦する。

激しくぶつかり合う水鉄砲と火の粉。しかし、徐々に火の粉が押され、火が消えた。

火の粉に打ち勝った水鉄砲は、勢いが弱まることなくヒーロ目掛けて飛んでいき、クリティカルヒット。

「ヒーロ！」

タキが心配そうに呼びかける。その呼びかけのおかげなのか、水鉄砲がクリティカルヒットして倒れたヒーロが、フラフラになりながら立ち上がった。

「決めるキッコー。相手に水鉄砲を打ち破る手段なんて無い！」

キッコーがヒーロに向けて、渾身の水鉄砲を放つ。

ヒーロに向けて真っ直ぐ飛んでいく水鉄砲。フラフラのヒーロにそれをかわす体力はもう無かった。

しかし、水鉄砲はヒーロに命中することは無かった。タキがヒーロをかばったのだ……

「なっ……大丈夫かタキ！」

水鉄砲を食らって吹っ飛び、立ち上がらないタキの下にシヨウが駆け寄る。

「タキ……お前……」

シヨウがタキの下に駆け寄り、声をかけようと顔を見ると、涙を流しているタキの顔があった。

「どうしたタキ。そんなに水鉄砲が痛かったか？　とりあえず涙拭け」

シヨウがタキにハンカチを渡す。

タキは、ハンカチを受け取り涙を拭く。

「ありがとう。僕、最後にヒーロを信じることが出来なかった。火の粉が水鉄砲に負けたとき、もう駄目だと思っちゃったんだ。でもヒーロは立ち上がった。その光景に呆氣にとられて命令することも出来なかった僕は最低だ……」

ハンカチで涙を拭いても吹いても、タキの涙は止まることは無かった。

そんなタキを見たヒーロが、タキに近づいてきた。

「カゲエ！」

ヒーロは、明るい鳴き声でタキを励ました。タキの肩をポンツと触ったりしている。

「ほら。ヒーロも気にしてないから元気だせて励ましてくれてん

ぜ。トレーナーがポケモンにマジ心配されてどうすんよ」

シヨウがタキに向けて手を差し出す。

「うん。ありがとう！」

タキもこのままじゃいけないと思ったのか、必死で無理な笑顔を
作って、シヨウが差し出した手をギュツと握り、立ち上がった。

「そうだ。それでこそタキだ。それに、どっちかという俺のほう
が最悪な男だ。俺は、勝つ確信があってタキにポケモン勝負を挑ん
だんだからな」

シヨウのこの発言に、タキが疑問をもった。

「えっ？ 勝つ確信があつたってどういうこと？」

「まあ、実際は有利なだけで絶対勝つわけじゃないんだけど、現段
階なら勝てるって確信があつた。まっ、これはタキが博士のお使い
に行ったところから確信に変わったんだけどな」

時間は、タキがイライラしながらお使いに行き、シヨウがオーキ
ド博士に質問するところまでさかのぼる。

「ある質問？ なんじゃ？ それは、タキ君を怒らせる必要がある
質問なのかね？」

オーキド博士が少し怒り口調でシヨウに言葉をぶつける。

「ええ。やはりライバルには、あまり情報を提供したくないでしょ

う？」

シヨウが、少しニヤツとしながら言葉を返す。
オーキド博士は、ライバルという言葉に反応する。

「ライバル？ タキ君とシヨウ君は友達じゃなかったのかね？」

「ええ。友達です。むしろ親友だ。だから余計にタキと競いたくなつたんですよ。俺のストーリーでは、タキと俺がポケモンマスターになり、最後の最後で俺が勝って、真のポケモンマスターになるってストーリーですから。やっぱり最後は親友と本気の戦いをやりたいんですよ」

シヨウは、オーキド博士の答えを待つことなく、言葉を進める。

「だから、俺が抱いている疑問をタキに悟られるわけにはいかなかった。だから、無理やりタキと俺を離れたんです。こんなにうまくいくとは思わなかったけど。それですね。質問というのは属性の関係のことなんですよ」

「属性の関係……！ もしやシヨウ君！」

オーキド博士が驚く。そう。オーキド博士は、属性の関係を話していなかったのだ。

属性に関しては、後々知っていてもらうのが一番身にしてみるとオーキド博士は考えていたからだ。それをこんなところで質問されるとは思っていなかった。

「やっぱり関係ありますか。いやあ。見た目が見た目だったもんで気になっていたんですよ。タキは、多分気になっていないと思います

す。自分のヒーロー像に似たポケモンが現れたわけですからね。だから、これはチャンスだと思ったんです」

実は、シヨウがゼニガメを選択したのは、亀という言葉に反応したわけではなく、ちゃんとした理由があった。

シヨウは、ポケモンの特徴を見ていたのだ。

ヒトカゲには、尻尾に炎がある。つまり炎属性。

ゼニガメは、亀ということもあるし、水を吐きそうな雰囲気がある。つまり水属性。

フシギダネには、体の上に植物のようなものが生えている。つまり自然属性。

一般的に炎は自然を燃やす。水は炎を消す。自然は、水から力を与えてもらえる。

それは、タキとシヨウがいた世界では当たり前のことである。しかし、それが自分達の全く知らない世界だとどうだろうか。

いきなり知らない世界に飛ばされた生物は、環境の違いからか、一般的な考えが麻痺してしまう。そうなると厄介なもので、知らない生物が炎を吐け水を吐け、植物を飛ばせるとしても、所詮は知らない世界の知らない生物の話。属性の一般的理論なんて考えやすい。

しかし、タキがヒトカゲを選んだとき、シヨウは色々とわざとらしい理由をつけて、炎属性に強い、水属性のゼニガメを選んだ。全て推測ではあったが、一般的理論を考えながら行動していたのだ。

「オーキド博士。こんなところで間違いは無いですよね？」

「う、うむ。属性の考え方はそれで間違いはないのお」

「それはよかった。俺もリスクを負った甲斐がありましたよ。後はタキの帰りを待つのみ。ちゃんと謝らないと。やりすぎちゃいましたからね。俺が自分でしたことですけど、やっぱり自分のせいで怒った親友の顔を見るのは嫌ですからね」

そして、今に至るというわけだ。

「それじゃ、あの名前のくだりは……」

「そういうわけ。全部、疑問隠しのためのくだり。まあ、そんなことしなくてもタキはヒーロを選んでただろうな。知り合って間もないポケモンのために涙流せるんだからよ」

シヨウが、微笑みながらタキの頭を軽く小突く。

「痛いなあ……もう言わなくていいでしょ泣いたことは！ それよ、僕と競い合いたいって、本気で言ってるの？」

「ああ。マジで言ってる。一度、何かでタキと競い合いたかったんだ。勉強じゃタキが勝つし、スポーツじゃ俺が勝つだろ？ まともに正々堂々競い合える何かが無かったんだ俺達は。だから、ポケモンでタキと競い合いたい。これなら一から正々堂々競い合えるだろ？ まあ、属性は俺が有利だけどな。タキは俺と競うのは嫌か？」

「嫌じゃないよ。僕もシヨウと競い合いたい」

シヨウは「えっ」という顔をした。シヨウの予想では、タキがしつこく「嫌だ」と言ってくると思っていた。だから、それに対する返しの言葉も用意していたのだ。

「今日。シヨウと戦って思ったんだ。シヨウに勝ちたいって。もつとポケモンバトルしたいって。もうやめられないよ。僕はポケモンマスターになる。そのためには、僕はシヨウと仲良く冒険しなきゃいけない。僕は、シヨウのライバルでいなければならない」

力強くそう言うタキ。

そんなタキを見て、軽く微笑むシヨウ。

「うっし。じゃあ決まりだな。今から俺とタキはライバル同士だ。絶対、タキには負けないからな！」

「望むところだよ！」

タキとシヨウはガツチリと握手を交わした。
そして、いよいよ旅立ちのとき……

第六回。旅立ち

いよいよマサラタウンからの旅立ち。

タキとシヨウが、オーキド博士に旅立ちの言葉を発する。

「オーキド博士。絶対ポケモンマスターになってもう一度会いに来るからね！」

「本当に色々とお世話になりました。あなたがいなければ俺達どうなっていたことが」

オーキド博士も、二人に言葉を返す。

「うむ。二人とも立派なポケモントレーナーを目指すのじゃぞ。わしは、タキ君とシヨウ君なら、きっとポケモンマスターになると信じておる」

そして、ガツチリと握手をした三人。旅立ちの瞬間だ。

二人はオーキド博士と別れた。

そして二人も別々の道を進む。

タキは、トキワシティに少しの間滞在し、野生のポケモンと戦いヒーロの特訓。

シヨウは、トキワシティの奥の森。トキワの森を抜けた所にある、ニビシティを目指す。

「シヨウ。一度お別れだ。また、何処かで会ったらポケモンバトルしようね。俺。絶対に強くなるからさ」

「ああ。結局頂点は二人とも同じところにあるんだ。絶対にまた再開する。そんなときはまた倒してやるから覚悟しとけよ。じゃあ、俺は先に進むからそろそろ行くわ。じゃあな。我がライバル。再開を楽しみにしてるぜ」

二人は、出会ったときから一緒だった。一緒に遊び、勉強し、喧嘩し、笑いあった。

そんな二人が、初めて別々の道を歩もうとしている。目標は同じだが、歩む道は違うのだ。

今、この瞬間から、タキの旅。ショウの旅。二つの違った旅が始まった。

第七回。特訓

シヨウと別れた後、特訓のために早速草むらでポケモンを探していたタキ。

するとそこに、一匹のポケモンが現れる。

「あつ、こいつは！」

タキが驚くのも無理はない。そのポケモンは、トキワの森で遭遇したあの鳥と同じ姿だったのだ。

あの追いかけられた出来事を思い出しながら、鳩みたいな形をしたポケモンをポケモン図鑑で調べる。

そのポケモンはポップということりポケモンで、身長は0.3m、体重は1.8kgのこと。

「ことりポケモン……鳩ポケモンじゃなくて？」

思わずツツコミを入れるタキ。

だが、そんなことを言っている場合ではない。これは特訓のチャンスなのである。

タキは、ワクワクした顔つきでモンスターボールを取り出し、ヒール口をだす。

それに気づいたポップは、威嚇し、警戒しながら戦闘態勢に入る。

「よし勝負の基本は先手必勝だ！ ヒール口。ガンガンいくんだ！」

しかし、ヒーロは戦いにいこうとしない。タキのほうをジッと睨んでいる。

焦ったタキは「どうしたんだヒーロ！ ガンガンいくんだ！」と、何回も同じ言葉を繰り返した。

ヒーロは少しイライラしてきたのか「カゲエ！」と大きく鳴くと、タキの足をツンツンと突付き、自分のほうを指差す。

「ヒーロ。もしかして……」

このときタキは感じた。ヒーロは、自分に命令しろと言っているのだと。

「カゲツ」

ヒーロは、その通りだとも言うように、静かに頷きながら鳴いてみせる。

「ヒーロ！ 君の心が命令しろと言っているように感じた。だから命令するよ。体当たりだ！」

嬉しそうにそう叫ぶタキを見たヒーロは、少し微笑みながらコクンと頷き、クルツとポツポの方を振り向き、体当たりを仕掛けようとした。

「力……カゲエ？」

タキとヒーロは目を疑った。ヒーロが振り向いた先には、ポツポの姿がなかったのだ。

焦りと情熱で目の前が見えていなかったタキ。タキの方を向いていたので、当然、ポツポの姿が視界に入っていなかったヒーロ。

そんなタキとヒーロに取り残されたポツポは、呆れたのか威嚇するのをやめ、どこかへ飛び去ってしまったのだ。

あれだけ情熱パルスが共振していたタキとヒーロ。しかし、この出来事に少しの間、呆然としていた。

しばらくして、タキが不意に「アハハ」と笑う。

「結局、こんな結果になっちゃったけど僕達が得たものは大きかったよね！ 行こうよトキワの森に！ 僕達の友情パワーがあれば絶対大丈夫だよ！ うん。絶対！」

タキは、ヒーロが命令を聞いてくれるようになった。すなわち、パートナーになれたと思っているのだ。

そんなタキの熱い思いと裏腹に、ヒーロは、やれやれと思いながら、小さく「カゲエ」と冷めたように鳴いた。

「そんなに照れなくていいんだよヒーロ。鳴きたいときは思いっきり鳴くものさ！ じゃあ、モンスターボールに戻すよ。ゆっくり休んでてね！」

タキは、ヒーロが照れているので小さく鳴いたのだと思い、満面の笑みでヒーロにそう言う。タキは、とても上機嫌のようだ。

そして、ヒーロの反論も待たぬままモンスターボールに戻し、トキワの森へと足を進める。

第八回。レッツゴー。トキワの森

トキワの森の中へ入ったタキ。

しかし、タキはトキワの森からニビシティまでの道のりを知っているわけでも、描かれた地図を持っているわけでもない。

ヒーロと友情パワーを分かち合えたと思っているタキは、嬉しさのあまり、勢いでトキワの森へと入ってしまったのだ。

これでは手探りでニビシティまで辿り着くしかない。この方法よりは、もう一度トキワシティに戻り、町の人にもニビシティまでの道順を聞いた方が早いだろう。

しかし、今のタキはそんなこと頭に入っちゃいない。原動力は勢いなのだ。何も考えずにトキワの森を手探りで突き進む。

その結果。現在、タキは道に迷っている。我に返った頃には時すでに遅し、帰り道なんて分かりやしない。

「完全に迷っちゃったよ……もしかして僕はここで一生を終えるのかなあ。餓死……そんな苦しい死に方嫌だあ！ トキワの森で白骨死体発見なんてニュースになったらもつと嫌だあ！」

泣き言を言いながら歩き続けるタキ。

しかし、ここで一発逆転の大チャンス。タキに神様からのプレゼントが。

「人だ。人がいる！ これで助かるぞ」

なんと、泣き言を言いながら歩いている途中、虫取り網を持った

一人の少年を発見したのだ。

これはニビシティまでの道を聞くチャンスだと思ったタキ。すぐに少年の下に駆け寄り、ニビシティまでの道を尋ねた。すると、思わぬ答えが返ってきた。

「えっ。うーん。じゃあ、僕とポケモンバトルしようよ！ それに勝てば教えてあげる」

「そっそんな。ポケモンバトルはいいけど、先に道を教えてくれないじゃない。それからなら、僕はいくらでもポケモンバトルをするよ！」

少年の言い分にタキは猛反論。しかし、少年が言う。それがポケモンバトルのルールなのだと。

そう。普通、ポケモンバトルとは、何かを賭けて戦うものなのだ。勝てば相手から賭けた物をもらえるし、負ければ賭けた物をあげなければならぬ。これはルール。

まあ、誰が見ているとかいうわけでもないの、ルールを守らない無法者も多いらしいのだが、もし誰かに見つかって通報されるとお縄頂戴になるらしいので注意が必要である。

なので、少年が負ければタキにニビシティまでの道案内を。タキが負ければお金を。

しかし、タキはこの世界のお金を持っていない。というか通貨単位すら知らない。

「うーん。それじゃ仕方ないね。何か持っている物はない？」

「持っているものと言われても……」

タキはズボンのポケットなどを手当たり次第探す。そして見つけたものが……

「うわぁ。これいいじゃん。キラキラしててなんだか綺麗」

ビー玉である。この世界ではキラキラしたものは結構珍しいもののように、好かれる傾向にあるようだ。

これで条件は成立。タキが勝てばニビシティまでの道のりを、少年が勝てばビー玉を。生い茂った森の中、ポケモンバトルスタートだ。

「行け。ヒーロ！」

タキがヒーロをだす。

ポップとの試合で肩透かしを食らったためか、やる気は十分。いつでもOKという感じである。

「行け。キャッピー！ お前に決めた！」

少年がだしたポケモンは、キャッピーというキャッチーな名前とは裏腹に、アゲハチョウの幼虫を大きくしたような外見をしている。これはマニアック受けしそうな感じた。

「このポケモン。僕がいた世界にも似たような虫がいたような気が……」

そんなことを呟きながら、ポケモン図鑑でキャッピーを調べる。

そのポケモンはキャタピーといういもむしポケモンで、身長0.3m。体重2.9kgとのこと。

「いもむしポケモン……今まで見てきたポケモン。みんな見た目そのまんまだよね……」

なぜかテンションが下がるタキ。しかし、そんなことでテンションを落としている場合ではない。今は、ポケモンバトルの真っ最中なのだ。

「でも、これはチャンスかも。身長だって体重だってヒーロのほうが高いし重い。力的には有利なはずだ。先手必勝。体当たりだ！」

タキがヒーロに命令する。ヒーロもタキの命令を聞き、キャッピーに体当たりを仕掛ける。

「確かに体格的には不利かもしれない。でも、戦い方によっては勝ち目もある！ キャッピー。糸を吐く！」

少年がそう言うと、キャッピーがヒーロに向けて糸を吐いた。すると、体当たりを仕掛けるヒーロを嘲笑うかのように糸が体に絡みつき、身動きが取れない状況になった。

「これで君のポケモンは行動が出来ない。さあ、キャッピー。見せてやれ。虫の恐ろしさを！」

キャッピーが糸が絡まって身動きが取れないヒーロに近づき、カブツと噛み付いた。

致命傷ではないが、地味にジワジワくる痛みに、ヒーロも苦しそうな表情をしている。

「ふふふ。見たか。これがキャツピーの攻撃力の低さを克服するために編み出した拷問地獄だ！ 身動きが取れないまま地道に体力が奪われるよ！」

少年が自慢気に、そして自信気にそう語る。

タキも、必死で今の状況を打開する方法を考える。

「そ……そうだ」

タキはショウが話していた属性の話思い出した。

そして考えた。基本、昆虫が吐く糸は炎で燃える。なので、キャツピーが吐いた糸も燃えるんじゃないかと。しかし、そうなる通りスクも生じる。糸は体に巻きついていてるのだ。糸を燃やすことによりヒーロ自身の体も燃えることになる。いくら自分が炎属性といえども熱いものは熱い。多量のダメージは覚悟しないといけない。

バトル経験が浅いタキにとって、自分の攻撃を自分で食らうダメージなんて未知数。もしかしたら、それが原因で敗北してしまうかもしれない。

しかし、今はそんなことを言っている場合ではないのは確か。実行するしかない。そんな状況。タキは覚悟を決めた。

「ヒーロ。火の粉を糸に吐くんだ。熱いと思うけど、ヒーロなら大丈夫さ！」

「そんな力技……気が狂ってる！ ダメージを負うのはヒーロなんだぞ。君じゃないんだ！」

「分かってるよ。でも、僕は信じてる。ヒーロの根性は凄まじいん

だ。ヒーロなら乗り越えてくれる！」

「これはマジだ！ キャッピー。噛み付くのをやめてその場から離れる！」

その途端。ヒーロはなんの躊躇もなく火の粉を糸に向けて吐く。キャッピーも急いでその場から離れた。

炎が糸にドンドン燃え移る。次第に燃え上がる糸。燃え上がる炎がヒーロを包み、いつのまにかヒーロの姿は見えなくなった。

この光景に少年とキャッピーは慌てて行動することが出来ない。

「聞こえてるかいヒーロ。動けるかいヒーロ。聞こえるなら聞いてくれ。動けるなら動いてくれ。ヒーロ。体当たりだ！」

慌てて行動できないキャッピーを攻撃するチャンスだと思ったタキ。すかさずヒーロに命令を下す。

「カゲエー！」

包まれる炎の中から叫ばれるヒーロの鳴き声。そして、炎に包まれた状態でキャッピーに体当たりを仕掛ける。これでは、いくら糸を吐いても体に絡ませることなんて出来ない。

打つ手のないキャッピーは、ヒーロの体当たりをもろに食らう。炎に包まれた体当たりなので、ダメージは普通の体当たりより大しかも、体格の小さなキャッピーがダメージを受けたのだから、これ以上は動けない。試合終了である。それと同時に、包まれていた炎も消えた。

試合が終わった途端。タキはヒーロの下に、少年はキャップーの下へ駆け寄った。

「大丈夫かヒーロ！ 熱い！？ 痛い！？ 苦しい！？」

あんな命令を下したのはタキなのに、物凄く潤んだ瞳になりながらヒーロに語り掛ける。

ヒーロは、心配されなくても大丈夫だよ。といった態度でタキを見る。しかし、実際はかなり苦しそうである。ようするに、強がっているのだ。

「よかったあ。あんな命令出してごめんね。じゃあ、ゆっくりとモンスターボールの中で休んでね」

タキがヒーロをモンスターボールに戻す。
少年の方もキャップーをモンスターボールに戻したようだ。

「負けたあ。まさか、あんな方法で打ち破られるなんて……あんな作戦が実行できるほど、君とヒーロの信頼関係は厚いんだね」

「いやあ。それ程でも。でも、技にも色々な使い方があるんだね。攻撃が強いから強いってわけじゃないんだなあ」

二人がハハハと笑いながら談笑している。

さっきまで初対面だった二人。でも、ポケモンバトルを通じてあれだけ打ち解けている。これはいい光景だ。

そして、話は本題に戻りニビシティまでの道の話。
なんと、少年がニビシティまでタキを案内してくれるというのだ。

タキは大いに喜び、少年にニビシティまで案内してもらった。
すると、案外、ニビシティまでの道のりは短く、タキがトキワシ
ティで迷っていた時間の方が長いくらいであった。

「ありがとう。助かったよ！」

タキが少年にお礼を言う。

「いえいえ。それにしても、ニビシティに行くって事はやっぱりあ
れかい。ジムリーダーと戦いに行くのかい？」

「うん。僕の目標はポケモンマスターだからね。ジムリーダーと戦
わないとなれないみたいだし」

「そつかあ。でも、気をつけなよ。ニビシティのジムリーダー。タ
ケシはかなり強いよ。ポケモンマスターを目指す人は星の数ほどこ
いけど、ジムリーダーに勝てなくて挫折する人も星の数ほどこい
るんだ。タケシに勝てなくて諦める人も多いんだよ実際」

少年は真剣に語る。そして、最後に「僕もそうだしね……」と小
さく呟いた。

タキはそこに触れようとはしなかった。人には触れていい場所と
いけない場所があることくらいはタキだって心得ている。

「そんなことまで教えてくれてありがとう。本当に君と出会えてよ
かった。迷ってよかったあ！　って感じ！」

タキが、少年に向けてスツと手を差し出し、握手のポーズをとる。

「僕も。君とのポケモンバトルすっごい熱かった。絶対。ポケモン

マスターになつてね」

少年もタキに向けて手を差し出し、ギュツと熱い握手を交わした。

そして、タキと少年が別れる。

タキはニビシティのジムリーダー。タケシの下へと。少年は、またトキワの森へ、ポケモンを探しに戻った。

タケシというジムリーダー。

ジムリーダー戦なんて始めてのタキにとって、どれだけ強いものなんてわかりやしない。タキは、そう考えると次第にワクワクしてきたのであった。

第九回。早くも再会

「ここがニビシティのジム……」

タキがいるそこはニビシティのジムの前。見た目はなんともないただの建物だが、そこから流れ出る雰囲気は何か異様なものを感じ、中々、ジムの中に足を踏み入れることが出来ない。

そんな事を感じながらジムの周りをうろろろしているタキ。すると、ジムの中から見覚えのある人物が現れた。

「おっ！ タキじゃないか。何してんだよ。ていうかいいもんゲットしたんだぜ」

そう。ショウである。

ショウはタキを見るや否や、どこかで買ったであろう鞆の中からグレー色をしたバッチを取り出し、タキに見せびらかした。

「何って……！？ それはバッチじゃないか。もしかしてショウは……」

タキがショウの持っているバッチを指差してそう言う。

「いいだろ？ ジムリーダーを倒した証だからな。グレーバッチっていうらしい」

「へえ……いいなあ。でも、僕も今からタケシに挑戦しに行くんだ！ 僕も、グレーバッチ手に入れるもんねえ！」

「俺は予言者じゃないから断言はしない。でも、多分無理だ。タキがどれだけ強くなったか知らないけどな」

シヨウがバッチを手にしたことで闘志が燃え上がっていたタキ。しかし、シヨウの余計な一言で、その思いも一気に冷めた。

「なっ……そんな言い方ないだろ！ どうしてそんなこと言えるんだよ！」

今の言葉に相当イライラしたのか、タキがシヨウの胸倉を思いつきり掴む。

「そりゃあ、戦ってみれば分かるさ。そんなことよりよお、このジムリーダーは俺が倒したばっかで戦える状態じゃないんだ。今日のところはヒーロだっけ？ とにかく、お前の大事なポケモンを休ませてやったらどうだ？ どうせ、ポケモンセンターっていう施設も知らないんだろ？」

タキは掴んでいた胸倉をそつと離れた。こんなところで怒っても意味はないと思ったからである。どうせなら、スパッとタケシを倒して、シヨウをぎゃふんといわせてやろうと思ったのだ。

それに、ポケモンセンターという施設もタキは知らない。ここはおとなしく話を聞くのが得策なのだ。

シヨウがポケモンセンターについてタキに説明する。

シヨウの説明によると、ポケモンセンターとは、ポケモンの疲れを、謎の機械によって癒してくれる施設らしく、しかもそこは無償で、職員の人も綺麗らしい。

「とまあ、こんなとこだな。タキのことだから、野生のポケモンとか、ポケモントレーナーとかと戦いまくってんだろ？ 絶対、ヒーロもお疲れだろうから、休ませてやりな。案外疲れてるんだろうぜポケモンも」

「やっぱりヒーロも疲れてるのかな。さっきも接戦のポケモンバトルしたところだし……そうと決まれば早速行かなきゃ！ 教えてくれてありがとう！」

タキは、精一杯の笑顔でシヨウにそう言い、手を振ってポケモンセンターに向けて走り出そうとした。さっきまで胸倉を掴むほど怒っていたのが嘘のようだ……

「おい！ ちょっと待て！」

シヨウが慌ててタキを止める。何か渡したいものがあるようだ。

「ほら。ポケモンセンターまでの地図。どうせ、何処かも分からずに探し回るんだろ？ これ持ってけよ。便利だろ？」

「あ……ありがとう！ やっぱシヨウはいい奴だ！」

タキはシヨウの手をギュッと握り、ブンブン振りながらそう言う。

シヨウは、タキが自分の手を思いつき握るせいで、ポケモンセンターまでの道のりを書いた紙がクシャクシャになっているのに気づき、バツとタキの手を振り払い、クシャクシャになった紙を渡した。

「せっかく俺が書いた紙がクシャクシャになっちゃったでしょうが！……まあいいや。それと、もう一つ言いたい事がある」

そう言うのと、恥ずかしそうにタキから目を逸らしたシヨウ。そして、ボソツと言葉を発し始めた。

「さっき、俺がタキにジムリーダーに勝てないって言ったけどよ、別に一生勝てないって言うてるわけじゃないんだぜ。俺はタキの諦めない心と努力する心は認めてるんだ。最終的には勝つだろうと思う。そこんところは誤解しないでくれな……」

シヨウが恥ずかしそうに言った台詞に対し、タキは元気よく「うん！」と返す。

「うん！」という言葉だけで気持ちは伝わるものだ。シヨウには、この「うん！」だけで、許してくれたんだなと感じた。

そして、シヨウもニビシティを離れ、次の町へと移動するようだ。

「じゃあ、そろそろ行くわ。俺の後を見失わず追ってこいよ。 sonunda、最終的には二人でポケモンマスター決定戦やろうな」

「絶対見失ったりしないよ。それどころか追い抜いてやるんだもんね！　じゃあ、また何処かで会おうね」

こうして二人は別れた。

二人の再会は早く、そして短かった。

また、どこかで出会えるといいなとしみじみと思いながら、シヨウに貰ったポケモンセンターへの道のりのが書かれた紙を頼りに、ポケモンセンターへ向けて足を進める。

第十回。初めてのジム戦

シヨウから貰った地図を頼りに進むと、あっという間にポケモンセンターに着いたタキ。

中に入ったそこは、タキのいた世界という病院のようなところ。そこに看護服を着た女性が一人受け付けにいた。早速、ヒーロを休ませるため、看護婦の下へ向かう。

これは余談であるが、確かに綺麗な人だなあとタキは心の中で思った。

タキは、ヒーロを休ませるため看護婦に話しかける。

すると、モンスターボールを出してくださいと言われたので、言われたとおりにモンスターボールを出し、看護婦に渡した。

モンスターボールを受け取った看護婦が、モンスターボールを謎の機械の中に入れ、どこかへ持っていく。

少しの間、待っていて下さいと言われたタキであるが、特にすることがないので、自分が元々いた世界の事を考える。

親は心配していないだろうか。もしかしたら探し回っているんじゃないだろうか。色々考える。

さらにエスカレーターしてきて、もしかしたらここは死後の世界なんじゃないだろうか。そうじゃなかったら夢？ 色々な説が頭に浮かぶ。

だが、こんなことをどれだけ考えても埒が明かない。そう思ったタキは、自分の大切な人たちに自分の声が届けばいいなと思った。

僕は大丈夫だから心配しないでね。って……

考え事をしていると瞬く間に時は流れる。ふと気づくと、タキは看護婦に名前を呼ばれていた。ヒーロの疲れがとれたのだ。

タキは、看護婦からモンスターボールを受け取り、ポケモンセンタ―を出る。

当然、向かう先はニビシティのジム。タケシの下だ。

シヨウに言われた事を思いだし、気合を入れながらニビシティのジムのドアを開ける。

ジムに入ったそこは真っ暗で何も見えない。

しばらく何をしていいかわからずキョロキョロしていると、中から人の声が聞こえ、明かりがついた。

そこにいたのは、自分と同じくらいの年であろう男で、石段の上に座った状態でこちらを見ている。

ニビシティの見た感じと同じで、ここも石が多いなとタキは思った。

「誰だ」

石段の上に座っている男がタキに話しかける。

「誰だって……挑戦しに来たトレーナーに決まっているじゃない！そんなことより、人に誰だと聞くより先にやることあるんじゃない？」

タキはツッコんだ後、挑発するように言葉を投げかけた。

「確かに……それは失礼した。俺はタケシ。ここ、ニビジムのジムリーダーだ。こんなところで話すのもなんだろ。早速、始めようか」

タケシはそう言うと、ジムバトル用の特別バトルフィールドへ移動する。

特別フィールドは、ジムにあわせてなのか、地形が岩でゴツゴツしている。

タキも後ろを着いていき、いよいよ、初めてのジムリーダー戦が始まろうとしている。

「それではジム戦を始める。使用ポケモンは二体。ポケモン交代は可だ。いいな」

「あ……あのぉ。僕、手持ちポケモン一体しかないんだけど、駄目……？ アハハ……アハッ……」

タキは笑ってごまかそうとする。

「……よくそれで戦おうという気になったな……仕方ない。今回は一体で認めよう。使用ポケモンは一体だ」

「ありがとう。いい人だね！」

タキは、ホッと胸を撫で下ろし、元気よくそう言った。

「お世辞はいい。では行くぞ……行け。イワーク！」

「緊張するなあ……でも、頑張るぞ！ 行くんた。ヒーロー！」

二人ともポケモンを出した。この瞬間。タキの初めてのジムリーダー戦が始まる。

しかし……

「な……何この大きさ。大きいなんてもんじゃない。無差別級過ぎるよこれ……」

そう。イワークは大きかった。いや、大きすぎた。ポケモン図鑑で調べたところ、体長8.8m。体重210kg。それに比べ、ヒーロは0.6m。8.5kg。

イワークの目には、ヒーロはミクロマンくらいの大きさに見えていることだろう。ヒーロの目には、どこまでも続いているかのような大きな壁に見えていることだろう。それくらいの体格差があるのだ。

バトルの方も呆気ないものであった。

イワークの圧倒的な体格に恐怖してしまったタキとヒーロは、イワークの尻尾を振り回す攻撃をもろに受け、一撃でダウンしてしまったのだ。

タキはバトルに負けた。そう実感したときには膝が地に落ちていた。

「ま……負けちゃった……」

言葉に出すと、更に実感してしまうもので、自然と涙が瞳からこぼれ落ちる。

「気にすることはない。負けて成長する事だってある。自分が成長

したと感じたらまたいつでもこい。俺は逃げ出したりなんかしない」

タケシは、膝を落として涙を流しているタキの肩にポンと手を置きそう言った。

タキはコクツと頷き、黙って二ビジムを出た。

そして、ヒーロを休ませるために、またポケモンセンターへ行き、看護婦さんにヒーロを預けた。

「僕、浮かれてたのかな。ヒーロとの友情パワー。そして、ヒーロの勇気と根性があれば絶対負けないって思ってた。そうだよ。浮かれてたんだよ僕。この世界にはまだまだ凄いポケモンがたくさんいる。あんな規格外のポケモンだって存在するんだ。特訓しないと、もう、負けないように、ヒーロを傷つかせないために」

タキは、ポケモンセンターにいる人達に変な目で見られているのも気にせず、独り言にしては少し大きな声で、そう言葉を発した。

タキが次に行く行動は決まった。

そう思ったときの行動は早いもので、ヒーロが回復した途端、二ビシテイの外にある草むらでポケモンを探し、特訓を始めたのであった。

第十一回。特訓の末に

特訓を始めるために草むらでポケモンを探すタキであるが、ただ無差別にポケモンを探すわけではない。目標は打倒イワーク。硬そうで大きなポケモンを探す。

しかし、中々お目当てのポケモンは見つからない。

もうどれくらい草むらを歩き回っただろう。タキの体力も次第に奪われてへとへとに。

なので、一度休もうと思い、近くにあった石の上に座った。

石の上で一息ついているタキ。

しかし、突然、風景が揺れたような感じがして慌てる。

その感じは何度も何度も繰り返された。タキは何度も繰り返されている間に気がつく。自分が座っている石が揺れているのだと。

タキは素早く立ち上がり、石をジッと見つめる。すると、タキが座っていた石が突然浮いた。浮いた石が地面深くに沈んでいたときは気がつかなかったが、浮いた石には手も生えているし目もある。

タキは直感した。こいつはポケモンだと。すかさずポケモン図鑑を開き調べる。

そのポケモンはイシツブテというがんせきポケモン。身長0.4m。重さ20.0kgとのこと。

「がんせきポケモンにしては小粒だよねえ……でも、こいつはとても硬そうだぞ！」

これは神様からの贈り物だろうか。偶然にも見つけたイシツブテ。

これはタキにとつてとても好都合なポケモンだった。
体格は大きくはないがとても硬そうなポケモン。これは特訓相手に丁度いい。

これを逃す手はないと思ったタキが急いでヒーロをだす。

「ヒーロ！ 全力でイシツブテをひっかくんだ！」

先手必勝とでもいわないばかりに、全力でイシツブテに向かってひっかくを繰り返す。

「力……カゲエ!?」

しかし、ひっかくがイシツブテにまともにヒットしたはずなのに痛がっているのはヒーロ。

イシツブテはそんなヒーロを目をパチパチさせながら見ている。

だが、それから五秒ほど。イシツブテは気がついた。自分は攻撃されたのだと。

そう思うとなんだかイライラしてきたイシツブテは、右手をグルグル振り回しながら、自滅して痛がっているヒーロに向かって突進する。

「やっぱりひっかくは効かないか……ヒーロ。イシツブテの攻撃はかわしちや駄目だ。苦しいかもしれないけど、これもイワークの攻撃を受けきるための修行だと思って全部受け止めて！」

ヒーロは、少し無茶だなと思いつつ「力……カゲエ……」と無理やり自分の中で納得させて了解する。

その瞬間だ。イシツブテが、グルグル振り回していた勢いで、右

ストレートをヒーロに繰り出した。

当然、ヒーロはかわさない。だが、もろに受けるのはまずいので手でガードはした。それでもヒーロは地に倒れこんだ。それほどイシツブテのパンチは強烈。

イシツブテも倒れこんだヒーロを見て「ツゝブテゝ」と得意げに鳴いている。

「立て。立つんだヒーロ！ これで倒れてたら僕は一生イワークに勝つことは出来ない。厳しいかもしれない。苦しいかもしれないでも、立ち上がらないことには何も始まらないんだ！」

タキも必死に声をかける。

その声に触発されてか、分かってるよといった感じで立ち上がる。

その後も二発三発とイシツブテのパンチを受け続ける。でも立ちあがる。

もう、体力も尽きるくらいのダメージは受けているはずだ。でもヒーロはギブアップすることはなかった。

これはもう、根性という大きな力に支えられているとしか言いようがない。

それと同時にイシツブテの怒りボルテージもMAXまで上がっていた。

このイシツブテは自分のパンチに相当自信があるらしく、ヒーロが立ち続けることに不満があるらしい。

そのせいなのか、イシツブテはこのパンチを最後のパンチにしようと考えてる。自分が持てる最高のパンチをお見舞いしてやろうと思ったのだ。

つまり、イシツブテはヒーロを一体の強敵として認めた。
自分の右手を最高速で回転させ「ツীবテー！」と叫ぶ。

イシツブテの行動とフラフラしているヒーロを見て、もう為す術はないのかと思ったタキ。しかし、イシツブテが「ツীবテー！」と叫んだのを聴いた瞬間。タキは閃いた。

「ヒーロ！ 叫んでいる口の中に手を突っ込んで投げぬける！」

タキの声が届いたヒーロは、フラフラな手で「ツীবテー！」と叫んでいるイシツブテの口の中に手を突っ込み、口の間をギュッと掴んだ。

これにはイシツブテも驚いた。しかし、そんなことはもはや関係なかった。

イシツブテが行う行動は、ただ自分が持つ最高のパンチをヒーロにお見舞いするだけなのだ。

イシツブテはヒーロに掴まれた口の間なんて気にせずに、右ストレートをヒーロの腹にぶち込む。

右ストレートが当たった瞬間。イシツブテは勝利を確信した。だがおかしい。自分の見ている世界が回っていることに気づく。

そして、気づいたそのときには、イシツブテの頭は既に地面に打ち付けられていた。

そう。ヒーロは、イシツブテの最高のパンチを受けきり、更に20kgもあるイシツブテを投げぬいたのだ。

もう、立てるはずなんてない。動くことすら出来ない。ヒーロは根性だけで絶対不利な状況を切り抜けたのだ。

きつと、イワーク戦のときは、あの威圧感と体格に心の底から怯えていたから尻尾攻撃一撃で葬り去られたのだろう。この戦いを見ているとそんな感じがする。

地に倒れこんだヒーロに近づくタキ。

しかし、ヒーロは気絶していた。あれだけの攻撃を受けたのだから仕方ない。体力は既に限界を超えていたのだから。

「無理な命令してごめんね。今からポケモンセンターで疲れを癒してもらおうからね。それまで痛み……我慢してね」

タキがそう言ってヒーロをモンスターボールに戻す。

そして、ヒーロとギリギリの勝負をしたイシツブテの下にも近づく。

「ありがとうイシツブテ。本当に強かった。イシツブテのお陰でイワーク戦の案がうかんだんだ。本当、イシツブテと戦えてよかったよ。いきなり攻撃しちゃってごめんね。だからといっちゃなんだけどイシツブテも一緒にポケモンセンターに行こう！それが僕に出来る最大のお礼だよ！」

タキがイシツブテにそう言うと、イシツブテのほうを向いて、イシツブテを持ち上げようとした。

だがそのとき、タキはなんだかズボンの裾に違和感を感じた。何かに掴まれているような感じがしたのだ。なので、ズボンの裾を見ていると、なんとイシツブテがタキのズボンの裾を掴んでいるではないか。

「ツ……ツブテェ……」

「えっ！　なんでイシツブテが僕のズボンの裾を！　いきなり攻撃なんてしちゃったもんね……　やっぱり僕達恨まれてるのかなあなんて……　アハッ。アハハッ……」

タキが苦笑いでイシツブテの方を見る。

そんなタキを見たイシツブテは、裾を掴んでいる手を離し、違うとでもいう様に手を振る。

そして、タキに手をパーにして差し出した。どうやら握手を求めているようである。

この行動でタキは全てを理解した。

そう。イシツブテは……

「も……　もしかして仲間になってくれるの！？」

「ツブテ！」

そうだともいうようにイシツブテが鳴く。

「やったあ！　イシツブテみたいな心強いポケモンを仲間に出来て嬉しいな！　そうだ。まずは名前を決めないと。うんっとねえ……」

タキは名前を考えた。

すると即座に浮かんだのが某RPGゲームの、あの厄介な岩であった。

そして、あの厄介な岩を仲間にしたときの名前はロッキー。もうこれで決まりである。

「ロッキー！　イシツブテの名前はロッキー！　それでこの後は確

かモンスターボールでゲットするんだよね。ちょっと待っててね！
……あつ、そうだ。僕はモンスターボールを持ってないんだ」

タキにはモンスターボールはない。

「でも、モンスターボールはお店で買えるんだよね。それじゃ早速買ってくるからここで……そうだ。お金も持ってないんだ……」

そう。タキにはお金もない。

「ごめんロッキー。僕、無一文でモンスターボールを買うお金もないんだ。だから仲間になってくれるなら、しばらく僕の後ろを着いてきてくれないかな……疲れるだろうけどごめんね」

タキが手を合わせて謝る。

それを見たロッキーは、精一杯右手を前に突き出し、カ一杯親指を立ててOKポーズをする。

ロッキーはかなり熱い性格のようだ。タキといいヒーロとロッキーといい、なんとも暑苦しいメンバーが揃ったものである。

「ありがとう！ よろしくねロッキー！ ロッキーもすぐポケモンセンターで疲れを癒してもらわないと。さあ。僕の腕に乗っかって！」

ロッキーの方に両手を差し出すタキ。

しかし、ロッキーは人差し指をチツチツと揺らし、自分で草むらの周りを元気良く動き回った。

自分で動けるから心配ないと言いたいように見える。

「アハハッ！ 元気一杯だねロッキーは！ じゃあ、後ろから着いてきてね。それじゃポケモンセンターに向けて出発だあ！」

初めて仲間ポケモンが出来て心の底から嬉しく思うタキ。

初めての仲間。名前はロッキー。

嬉しさの余り鼻歌を歌いながらポケモンセンターに着いたタキ。タキはポケモンセンターでポケモンを癒し、ニビジムのジムリーダー。タケシに再挑戦するため、ニビジムへ向かう。

第十二回。リベンジ。タキVSタケシ！

タキが改めてニビジムの扉を開ける。

「再戦に来ました！ どうぞよろしくお願いします！」

タキが相変わらず真つ暗なニビジムの中でそう叫ぶ。
すると、前と同じようにタケシの声が聞こえ明かりがついた。

そこには、やはり石段の上に座るタケシが。石段の上がそんなに
落ちてくのだろうか……

「昨日の今日でもう再戦に来たのか…… たった一日で強くなったとは思えんが、こちらもジムリーダーの身として相手しないわけには
いかない。それに、新たなポケモンも捕まえてきたようだしな」

そのポケモンとは当然、ロッキーのことである。未だにモンスター
ボールを買えないため、モンスターボールの中に入ることは出来
ず、タキと共に行動をしている。

そして、あの地形がゴツゴツしているバトルフィールドに移動し
た。

今回は、正式にタキが二体のポケモンを所持しているため、二対
二。ポケモン交代ありの正式なニビジムバトルが行われる。

「それでは始めようか。行け。イシツブテ！」

「行くんだロッキー！」

両者の一体目。それはどちらも同じポケモン。こうなれば話は早い。どちらのイシツブテの方が強いのか。これしかない。同じポケモン同士のバトルは、トレーナーとしての質を見極めるのに最適なのもかもしれない。

「ほう。そちらもイシツブテか。それはいい。イシツブテ同士の格の違いを見せつけてやろう！ イシツブテ。殴る攻撃！」

タケシのイシツブテがゆっくりとロッキーに近づき、思いつきり振りかぶって殴ろうとする。

しかし、ロッキーは右腕をグルグル振り回しているだけで一步も動こうとはしない。

これに対し、タキは一つも避けろという命令をしようとはしない。逆に、ワクワクした顔つきでロッキーを見守っているくらいだ。

「俺のイシツブテの打撃を避けようとしてもしいとはいいい根性だ！ イシツブテ。お前の打撃力の怖さ。思い知らせてやれ」

タケシのイシツブテがロッキーに渾身の右ストレートを決める。しかし、ロッキーは効いていないのか、相変わらず右腕をグルグル振り回している。

「効いていない……？ そんなはずはない。もう一発だ。倒れるまで殴ってやれ！」

一発。二発。タケシのイシツブテは、ロッキーに右ストレートを入れ続ける。

しかし、ロッキーは相変わらず右腕を振り回すのをやめようとは

しない。

そして四発目。ここで状況が変わった。ロッキーがタケシのイシツブテの右ストレートをかわしたのだ。

タケシのイシツブテは、ロッキーが自分のパンチで倒れないことにムキになっていた。

恐らく、ムキになってパンチが大振りになってしまったので、ロッキーにかわされたのだろう。

かわしたロッキーが、逆にタケシのイシツブテに右ストレートをお見舞いする。

あれだけ腕をグルグル振り回していたのだ。かなりの右ストレートだろう。

その証拠に、タケシのイシツブテはもう意識がない。タケシのイシツブテの右ストレート三発を一発で、いや、それ以上の力でお返ししたのだ。

「イ……イシツブテ……よくやった。戻れ……なんてことだ。俺のイシツブテが一撃で……一つ聞きたい。それだけのイシツブテをどこで捕まえたんだ？」

「草むらで偶然見つけたんだ。そして、ヒーロとの死闘の末、仲間になってくれたんだ。どう？ 最高でしょ。僕のロッキー」

笑顔でそう言うタキに対し、タケシが初めて笑顔を見せた。

「ああ。最高のイシツブテだ。さっき、強くなったとは思えんなどといってすまなかった。認めよう。君は俺のジム戦の相手として十分なトレーナーだ。俺も全力を尽くす。行け。イワーク！ 全力で

行くぞ！」

元気良くモンスターボールからイワークを出すタケシ。

「おつと言い忘れていた。ポケモンを交代するか!？」

「このままでいいよ。ロッキーはまだ完全燃焼してないからね！」

タケシはロッキーをかえようとはしなかった。

この行動に、ロッキーも両方の手で親指を立てて、最高の選択だとしてもいような感じで張り切っている。

「では、行くぞイワーク。まずは、イシツブテに思いっきり殴られる。気合を入れないとな」

この言葉に、親指を立てて張り切っていたロッキーがピクツとなりイワークの方を振り向いた。どうやら、殴られるという言葉にイラッときたようである。

「ツープテー！」

ロッキーが全速力で右腕を振り回す。

そして、イワークに近づき右ストレートを思いっきり打ち噛ました。

右ストレートを当てるまでは、自分よりも何倍も体格が大きなイワークに恐れることなく立ち向かっていたロッキー。

しかし、右ストレートを当てたとき、ロッキーは力の差を感じた。自分のパンチじゃイワークを打ち砕くことは出来ないと感じたのだ。

だが、そう感じたときにはもう、イワークの尻尾がロッキーにヒツトしていた。

ロッキーの意識はもう、遠い世界へと……

「ロ……ロッキー！」

「いいぞ。最高のパンチだった。気合も最高まで高まったぞ。そのイシツブテは最高だ！ 反射的にイワークが攻撃をしてしまうほどのパンチなどそうない。大事に育てればまだまだ伸びる。本当に楽しい戦いだ！ さあ、二体目。かかって来い！」

タケシは、自分の中にある興奮を抑えきれないといった感じでそう叫んだ。

タキもロッキーをフィールド外に運んだ後、興奮を抑えきれない感じで「行け。ヒーロー！」と叫んだ。

ヒーローもモンスターボールの中から、戦いを見ていたかのようにテンションが熱い。

早く戦いたいという声が聞こえてきそうくらいである。

「やはりヒトカゲか。だが、どうしたものか、前のようにイワークに対する恐怖がないようだ。ヒトカゲも一日の内に成長したものだな！」

そう言葉を受けたタキは、無邪気な笑顔をタケシにぶつけた。

「うん！ もう前みたいに体格の差なんかで怖がったりはしない。僕達にはどれだけ大きな相手でもぶつかっていくしか勝つ道はないんだ！ そうじゃなきゃ、相手にも悪いしね。だから安心して。こ

のテンションを削ぐような真似はしない。それどころか、もっとも
っと最高のテンションになるよ。それは、この空気が物語ってる！」

「それは楽しみだ。イワーク。絶対にこの戦いに勝つぞ。これはジ
ムリーダーとしてではない。一人のトレーナーとしてだ！」

「それは僕だって同じ。ヒーロ。勝つのは僕達だ！」

こうして、異様に熱いテンションの中、イワーク対ヒーロの試合
が始まるうとしている。

第十三回。小さな巨人達

「イワーク！　まずは小手調べに石を吐く」

イワークの口から多量の石が飛び出し、ヒーロを襲う。

それをヒーロが軽快にかわす。前のような怖さはもうない。これくらいの攻撃をかわすことなんて楽勝である。

「ヒーロ！　こっちも様子を見よう。イワークに向けて火の粉！」

お返しといわんばかりにヒーロがイワークの体に火の粉をぶつける。

しかし、イワークは平然としており、ダメージを受けた様子はない。

「どうした！　その程度の攻撃。俺のイワークには全く受け付けんぞ！」

「だろうなあって思ってたよ。こうでなくっちゃ……面白くない！」

「そうだ。そうでなくっちゃ面白くない。これからもっと面白くしてやろう。イワーク。尻尾攻撃だ！」

この尻尾攻撃。名前は安易で弱そうな技に思えるが、実際はかなり手強い攻撃だ。

身長8.8m。体重210kg。から繰り出される尻尾攻撃。ビツクリするほど長い尻尾、そして体格に似合わない早さがある尻尾

攻撃をかわすのは容易ではない。高いジャンプ力がない限り不可能に近いものがある。なら答えは一つ。受けきるしかない。だが、これも容易ではない。体重210kgの攻撃の重さは言葉では言い表せないほど強烈に違いない。だが、受けきるしかない。受けきらないと勝つ道は開けない。

ヒーロがイワークの尻尾攻撃を受ける。

その威力は予想以上に強烈だった。攻撃を受けたヒーロは10mほど離れた岩に激突し、地に倒れた。

「どうした。結局、イワークの尻尾攻撃一発で沈むのか！ 立て。立ってもつと俺を熱くさせろ。君達の熱さはこんなもんじゃないはずだろ？」

こんな台詞はジムリーダーが言うべき台詞ではない。ジムリーダーは挑戦してくるトレーナーを倒すのが役目であり、決して熱いバトルをすることが役目ではない。

しかし、タケシは立てと言った。トレーナーを倒すのが役目のジムリーダーが、倒れているポケモンに対し立てと言ったのだ。

もう、タケシはジムリーダーとしてのタケシではない。一人のトレーナーとしてのタケシ……タケシ本来の姿でタキと戦っている。

この感覚はタキにも十分に伝わっていた。だからこそここで負けるわけにはいかないと心の底から思う。

「立つんだヒーロ！ 立たないと熱い時間が相手の手によって終わっちゃう。時間に終わりがあることは分かっているよ。でも、それを終わらせるのはタケシじゃない。僕達だ！」

「カ……カゲエー……!!」

精一杯の大声で鳴き、気合を入れるヒーロ。そしてフラフラながら立ち上がって見せた。

この瞬間。ヒーロの体は210kgから繰り出される尻尾攻撃を越えた。

「そうだ。それでこそ君達だ。ではもう一発いくぞ」

イワークがまた尻尾を振る体勢をとる。

そして、ヒーロに向けて尻尾攻撃を繰り出す。

だが、尻尾を振る途中。体に激痛が走る。

そう。今になってあのロッキーのパンチが効いてきたのだ。そのせいで動きが少し鈍る。

その瞬間をヒーロは見逃さない。

フラフラながらも力を振り絞り、イワークの尻尾に飛び乗る。そして、長い長いイワークの体を駆け抜け、頭の上に到達。そのまま、イワークと目を合わせたいんじゃないかというような角度で思いつき飛び降りる。

「何をしようと思っているのか知らんが、飛び降りて試合が決着するのはつまらん。最後はイワークの技で試合を締めくくってやろう！ イワーク。石を吐く！」

イワークは口を大きく開け、石を吐く体勢をとる。

「それを……それを待ってた！ ヒーロ。イワークの口目掛けて火の粉！」

「カゲエー!!」

ヒーロの口からイワークの口の中目掛けて火の粉が放たれる。
その火の粉はイワークの口の中に入り込み、内から燃やす。

これにはイワークも苦しむ。いくら石だからといってイワークだ
って一体のポケモン。一体の生物。外は頑丈な石の壁に守られてい
たといっても、中も同じように壁に守られているとは限らない。

しかし、8、8mの高さから落ちたヒーロだって無事ではない。
ただでさえ、210kgの尻尾攻撃を受けてフラフラだったのだ。
もうピクリとも動かない。

その間も、イワークの体では火の粉が駆け巡る。

しばらくの間、もがき苦しんだイワーク。だが、体力だって限界
がある。体の中を駆け巡る痛みに耐え切れず、大きな体が地に沈む。

「イワーク……」

「ヒーロ……」

タキとタケシが、ピクリとも動かないヒーロとイワークを見つめ
る。

すると、タケシが何か気づいたように「あっ」と声を上げる。

「一つ聞こう。君にはイワークの大きさはどう映る？ 別に深い意
味はいらない。大きさの印象だけを言ってみてくれ」

いきなり、変といっては失礼だが、変な質問をされたタキは、少

し遠慮気味に「大きい……ポケモン」と答える。

「じゃあ、ヒーロはどう映る？」

「小さいポケモン。というかこれ何の質問？」

流星に疑問を口にするタキ。

「よく見てみれば分かる。君の大事なヒーロをね」

そう言われたタキはヒーロに近づきジッと見つめる。
すると、ある事に気がついた。

「手を……手を上げてる……」

そう。ヒーロは手を上げていた。0.6mという小さな体長なので遠くから見れば気づかないだろう。

ヒーロはもう立つ気力はなかった。しかし、負けたくはない。これは一種の抵抗だ。自分はまだ戦える。意識があるというささやかな抵抗。

「そうだ。どうやら俺の負けのようだな。俺のイワークにはもう立つ力も体を動かす力もない。つまり意識はない。でも、ヒーロには立つ力はなくても体を動かし戦う意識はある。この差はとても大きいことだ。俺には君のヒーロがとても大きく見えるよ。どうやら小さな巨人は俺のイワークよりも大きな存在になってしまったようだ」

タケシが満足気にそう言う。どうやら完全燃焼したようだ。

「もう一体忘れてるよ。この戦いはヒーロだけの戦いじゃなかった」

タキが、勢いよく指差した先は倒れているロッキー。

そう。ロッキーのパンチがなければイワークの動きは鈍っていなかったかもしれない。

これは、ヒーロの勝利ではない。ヒーロとロッキーの勝利なのだ。

「そうだな。訂正しよう。小さな巨人達だ」

タケシは少し笑いながら即座に訂正した。

そして、ポケットから見覚えのあるグレイ色をしたバッヂを取り出した。

「俺に勝った証のグレイバッヂだ。本当。今日のバトルは熱かったぞ。そして最高だった。それもこれも小さな巨人達。そして、君のおかげだな」

タケシがタキにグレイバッヂを渡し、握手をするために手を差し出す。

「僕も最高だったよ。最初のジム戦の相手がタケシでよかった。だって、ジム戦がこんなに熱く最高なものだと思うと、もう次のジム戦が待ち遠しい！」

タキも勢いよく喜んで手を差し出し握手を交わした。

「それはいい傾向だ。では、次のジムがある場所を教えておこう。そこはハナダシティという。水ポケモンを操るジムリーダーだから君には相性が悪いだろうな。そこまでの道のりも教えておいてやる。ちょっと待っている」

そう言つと、紙とペンを持つてきたタケシが、ハナダシティまでの道のりを描き、それをタキに渡した。

「相性が悪くても君ならきつと乗り越えていくだろう。俺にはそんな気がしてならない。これから頑張つていくんだぞ！」

「うん。ありがとう。タケシもジムリーダーとして色々なトレーナーと熱いバトルを繰り広げてね！」

二人はもう一度握手を交わし、タキがニビジムを去ろうとする。すると、タケシが慌てたようにタキを呼び止めた。

「あまりのバトルに忘れていた。戦利品だ持つていけ！」

タケシがタキに向かって、キラキラと光る何かを投げた。タキが受け取ったそれには、大きく500と書いてある丸い物だった。これには見覚えがある。

「これ……何？」

薄々感づいているものの、一応、質問する。

「何を言っている。500円だ。知らないわけないだろう？」

「ハハハ……いきなりだからと忘れしてたよ。それでなんで500円を僕に？」

タキは心の中で、通貨単位も自分達の住んでいる場所と同じなのかとツツコんだ。これでは動物とポケモンが入れ替わっただけで、それ以外は何も変わっただころがないことになる。

タキの中で、更にこの世界に対する謎が深まった瞬間であった。

「だから戦利品だ。ジムリーダーに打ち勝ったんだ。それくらいのご褒美も必要だろう？」

「確かに欲しいかも！　ありがとう。ありがたく受け取るとききます！」

それは欲しいだろう。この世界で初めてお金を手に入れられるチャンスなのだから。

こうしてタケシとの戦いを終えたタキ。

タキは、ポケモンセンターでポケモンの傷を癒し、ショップでモンスターボールを購入し、ロッキーをモンスターボールの中に入れた。

そうしていると時間はもう夜。どこか休めるところはないかと歩いていると宿屋を発見。

早速、宿屋の中に入りスヤスヤと眠りについた。

そのときにはもう残金は200円。後、宿屋一回分の金しかないことに気づかずスヤスヤ眠るタキの夢は、当然、ポケモンの夢であった。

第十四回。真っ暗暗闇オツキミ山

楽しいポケモンの夢を見てぐっすりと眠れたタキ。

当然、気分も快調で、早速、タケシにハナダシティまでの道のりを書いてもらった紙を頼りに出発しようと考えてる。

タケシの書いた紙を見たところ、ハナダシティに行くには、3番道路を抜け、オツキミ山という場所を越えないとハナダシティまで行けないようだ。

だが、タキはワクワクしていた。オツキミ山はどんなポケモンが出るのだろうかと興味津々なのだ。

タキは宿屋を出て、オツキミ山へ向けて出発する。

タキは軽快なステップで3番道路を抜け、オツキミ山に到着。中に入ると、とても真っ暗。とても行動できるような状態ではない。

タキは、真っ暗なオツキミ山の中。何か策はないかと考える。すると名案が。

そう。ヒーロの尻尾の炎である。あの炎を明かりがわりにすれば、きつとオツキミ山の中も見えることだろう。

それは見事成功。ヒーロの明かりがあるのですいすいと進むことが出来た。

途中、ズバットというポケモンも発見したが、こっちが攻撃しない限り襲ってくることはないらしく、比較的安全にオツキミ山を抜けられそうだ。

そんなこよもあつて楽々ムードのタキは、ハナダシティへ早く行きたい一心からか、急いでオツキミ山を抜けようとしていた。急いでいたので、前も見ず走りながら進んでいたこともあったのであろう。人と勢いよくぶつかってしまった。

「い……痛てて……あつ、ごめんなさい大丈夫ですか!？」

タキはすぐに、自分の不注意のせいでぶつかってしまった人のところに向かい、謝った。

「大丈夫。気にしないで。どこも怪我とかしてないから」

タキがぶつかった人はどうやら女性のようだ。見たところタキよりも少し年上の女性に見える。

「よかったあ……ごめんね。ちょっと急いでたんだ」

「不注意なんて誰にでもあるもの。全然気にしてない。それより、いいポケモン持ってるね。その炎があれば確かにはしゃぎなくなる気持ちも分かるわ。私なんてここまで手探りで来て、もうくたくた。もう二回もここに来てるけど、全然慣れない」

女性がウフフと笑いながらそう言う。

女性がそう言った後、タキが何かを思いついたように「あっ!」と叫ぶ。

「そうだ! オツキミ山の出口まで一緒に行かない!? 僕のヒーロがいれば手探りでくたくたになる心配もないと思うんだ!」

タキが、ぶつかったお詫びにと女性を誘う。

女性は、いきなりの誘いに少し考えながらも答えをだしたようだ。

「そう言ってくれるなら、お言葉に甘えてそうさせてもらおうかな」

「じゃあ、早速行こう！ あっ、一応自己紹介しとくね。タキって言うんだ。よろしく！」

タキが女性に向けて手を差し出す。

「私はユリカ。こちらこそよろしく」

ユリカが握手しながらそう言う。

こうして、ポケモンの世界で初めて、少しの間であるが共に行動する仲間が出来た。

タキは、初めての仲間であるユリカと共に、オツキミ山の出口へと向かう。

第十五回。早くハナダシティに行きたいのに……

尻尾の明かりに照らされながらオツキミ山の出口を目指す二人。その途中、オツキミ山とは思えないほど明るい、そして人だかりが出来ているほど活気付いている通路を発見した。

そこへ向かった二人は、なぜ明るく、人だかりが出来るほど活気付いている理由がすぐに分かった。

なんと、松明を両手に持った男と、男の手持ちポケモンらしきポケモンが、オツキミ山の通路を遮るように座っているのだ。

何事かと、近くににいる人に聞いてみると、遮るように座っている男が、意味不明なことを口走り、通らせてくれないらしい。

無理やり通ろうとしても、男の持つポケモンが強く、通り抜ける事が出来ないそうなのだ。

この話を聞き、人一倍行動力があるタキは、男をどかさうと、話し合いを試みる。

すると、男は静かにタキを睨み、面倒くさそうに口を開いた。

「お前はなんだ？ お前の連れらしき女にかっこいいところを見せに来たのかい？ それならただうざいだけだ。この場から立ち去った方がいい」

淡々とそう語る男に少しイライラきたタキ。

自然と口調も激しくなってくる。

「なっ……そんなわけないだろ！ みんながここを通れなくて困ってるからどこかに来たんだよ。普通分かるでしょ……そういうこと

だから、ここをどいてよ。通行の邪魔だからさ」

少し怒り口調のタキに対し、男は、見下したような笑いを漏らす。

「邪魔？ これは親切だ。ここから先はレベルが違う。お前達の自信を失わせたくないから俺が審査してやってるのさ。俺に勝てないようじゃこの先は到底越えられる壁じゃない。一度、ここを通った俺が言ってるんだ。間違いない。もう一度言おう。これは親切」

ついにカチンときたタキ。そんなことを言うなら自分とポケモンバトルをやるうと持ちかける。男もやる気のようにで空気はもうバトル寸前である。

しかし、それをユリカが止める。

そして、自分が戦うといって、自分の手持ちポケモンを場に出した。

「駄目。タキは怒りに身を任せて戦いを挑んでいるわ。それじゃ、誰も救われない。ここは冷静に分からせてやるのが一番。自分が無力だってこと。でも、発展途上の存在だってこと」

「ふっ……人の努力も知らないでよく言うよ。まあいい。そっちな男に味あわせてやりたかったが、ウォーミングアップも大切だからな。やってやるよ。それで嘆くんだ。自分の方が無力だということ。そして見上げるんだ。ここから先の壁の高さをね」

いつのまにか、ユリカと男の言い争いになっており話しに入ることが出来ないタキ。ここはバトルを観戦することに決め、出そうとしていたヒーロをポケットに戻す。

そして、ポケモン図鑑を取り出し、見たこともない双方のポケモ

ンを調べる。

ユリカが出したポケモンは、ウツドンという名のハエとりポケモン。体長、1.0 m。体重、6.4 kg。

男のポケモンは、ドガースという名のどくガスポケモン。体長、0.6 m。体重、1.0 kg。

「なんだかどっちも恐ろしく毒っぽいなあ……ドガースは見た目から毒っぽいけど、ウツドンなんて雰囲気……」

タキが客観的な目線でツツコミを入れる。その直後、バトルがスタートした。

先手を取ったのはドガース。

「ドガース。いつものようにいくぞ。そこをどけトレーナー共。ドガースの毒ガスに巻き込まれる前にな」

男がそう言うと、ドガースが勢いよく毒ガスを噴射し始めた。

「よくある戦い方ね。ウツドン。この汚いガスを吸い込んでしまいなさい」

ユリカの命令を受けたウツドンが、先程、ドガースが噴射した毒ガスを勢いよく吸い込んだ。どうやらウツドンには毒の耐性があるらしく、吸い込んでもダメージはないらしい。

「さあ。もういつもの戦い方はできないわね。次はどうする?」

「くっ……どうやら俺の天敵のタイプのようだな。まあいい。なら

力押ししていくまでだ。ドガース。体当たり」

ドガースがウツドンに体当たりを仕掛ける。しかし、ウツドンは体の向きを変え、葉っぱの部分で体当たりをガードする。

ウツドンの葉っぱはとても鋭く、体当たりを仕掛けたドガースが逆にダメージを負ってしまった。

「本当。それでよくあんな大きな口が叩けたものね。自分の戦い方が出来なかったらすぐに力任せの行動で切り抜けようとする。そんなことだから負けてしまう」

ユリカは余裕といった口調で男を挑発する。

「うるさい……これは相性が悪い。もしお前のポケモンが毒に耐性のあるポケモンじゃなかったら俺はこんな無様な姿を晒さずに勝っていたんだ！」

男が初めて取り乱し、そう叫んだ。

「相性の問題？ ふざけないで。相性の壁を越えようと頑張るのもトレーナーの仕事。苦手なタイプ用の戦略を考え、苦手な攻撃を受けるポケモンを励まし続ける。それがトレーナー。あなたは相性から逃げているだけ。自分の苦手なタイプじゃなかったら勝てるなんてありえない。その思想の時点で、あなたはもう負けている」

ユリカは、そう言った後、小さな声でウツドンにハッパカッターと命令した。

ウツドンから繰り出される鋭い葉っぱがドガースを切り刻む。

そして、この時点でバトルは終了した。

この試合にタキは圧倒されていた。まさか、ユリカがここまで強いとは思いもしなかったのだ。

そして、タケシとの試合により成長したのであろう。自分とユリカのトレーナーとしての差を肌で感じる事が出来た。タキは心の中でユリカを越えられるように自分自身も、もっと努力していこうと決意した。

「さあ、どうだった？ 自分の無力差を感じることが出来たかしら？」

ユリカがゆっくりと男に近づく。
すると、どうしたことであろう。男はボロボロと涙を流しているではないか。

そして、初めてタキと話した、あの冷静さが嘘のように取り乱した表情でユリカに言葉を投げかけた。

「お前に言われなくても分かってたさ！ 俺が無力だってことも。駄目トレーナーだってことも。相性から逃げていたことも。全部分かってた。でも、それを認めることなんてできんのかよ！ 認めちゃったら……惨めな姿で全てを失うだろうがよ……」

「認めなさい。全てを失う？ 結構なこと。そこからまた土台を作り直せばいい。トレーナーなんて挫折と復活の繰り返し。挫折を恐れていて強くなれるトレーナーなんていないわ。全てを失うことで越えられる壁だってある。だから、また一からスタートすればいい。トレーナーだってポケモンだって成長することが出来るんだから」

男はもう言葉を返すことは出来なかった。

ただ、ユリカの言葉に頷くことしか出来なかった。

「か…… かつこいい！ かつこいいよユリカ！」

タキがユリカに向かってそう叫ぶ。

すると、タキの周りに居た人達も、自然とユリカに向かって拍手を送った。

なんだか、異様なテンションに包まれているオツキミ山。

男に足止めされて通ることが出来なかった人達も、これでは男とユリカのショーを見に来た客のように見える。

「あ…… いや…… その……」

ユリカがいきなりの拍手に対し、アタフタしながら照れているそのときだ。

「うるさいー！！」

男のこの一声で、みんなの拍手が止む。

そして、この場にいる全員が男を睨みつけた。

「せっかく俺がリセットしたってのに、俺を無視して盛り上がってるんじゃない。というか、全てを失うってこんな感じなのか。なんだか、逆にすっきりしたっていうか、モヤモヤが消し飛んだっていうか…… どちらにしても、久しぶりだ。こんな気持ちは」

どうやら、久しぶりに感じる開放感に感激している様子だ。

「そつだ。中々悪いものではないだろ？」

「ああ。それより、みんな悪かったな。俺の身勝手な判断で道を塞いでしまつて。これからはもうここは自由だ。そして、その女。ありがとう。色々と吹っ切れた。俺はまた沢山経験を積んで壁を越えてやる。どうせ一からのスタートだ。負けまくつてでも昇り続けてやるさ」

男がそう言い、その場を立ち去ろうとしたその時、ユリカが「私の名前は女ではない。ユリカだ！」と叫ぶ。タキも流れに身を任せようと判断したのか「僕はタキだ！」と叫ぶ。

「ユリカってのはさつき、その男が言つてたのを聞いてたから知つてる。ただ、人の名前を呼ぶのを好まないだけだ。ちなみに、俺の名前はカケオ。まあ、頭の隅のほうにでも置いといてくれ。じゃあな」

カケオは、そういいオツキミ山の入り口方面へと消えていった。

タキとユリカは、カケオという名を頭の隅のほうに刻んだ。

そして、二人とも同じ事を思った。カケオは、これからトレーナーとして大きく成長するだろうと。出会ったときのカケオと去ったときのカケオを見ていると、そういう気がしてならなかったのだ。

そして二人は、オツキミ山を出る。

久しぶりに洞窟を出て広がる光、青い空、白い雲。そして、二つ目のバッヂを持つジムリーダーがいる町。ハナダシティ。

第十六回。相性の壁

オツキミ山を抜け、ハナダシティに着いた二人。

本来ならここで別れのはずなのだが、ユリカの目的地はタمامシティという場所らしく、そこにもジムリーダーはいるらしい。

つまり、そこはタキも通らなくてはならない道。目的地ではないとはいえ、ユリカと行く先が一致している。別れる必要はないということだ。

かなり自分の言いたいことは遠回しにタキに話を切り出したユリカであるが、言っていることをまとめてみると、ここで別れるのではなくて、自分の目的地までタキと一緒に旅をしたいということだ。

そう解釈したタキは、喜んでタمامシティまで一緒に旅を続けることにした。

タمامシティまで一緒に旅を続けることとなった二人は、ハナダシティを見て回る。

ハナダシティは、とても水に溢れた町で、水の流れる音が心地良い。岩に溢れていたニビシティとは、また違った雰囲気がある。

ハナダシティを見て回っている途中。タキはハナダジムを見つける。

ジムリーダーとのポケモンバトルを楽しみにしているタキのことだから当然だろう。ジムを見つけた途端に足がジムへと傾き、ジムの中に足を踏み入れようとする。

しかし、それをユリカが止めた。

「タキ。まだ駄目。今のままじゃハナダジムのジムリーダーには絶対に勝てない」

いきなり、ジムに入るのを止められたタキ。当然「なぜ？」と反論する。

「ハナダシティを見て分かるように、ハナダシティのジムリーダーは水タイプのポケモンを得意としている。対して、タキのヒーロは炎タイプのポケモン。相性が合わない」

「ちょっと待つてよ。さっきユリカは、オツキミ山で相性の壁は越えられると言ったじゃない。ユリカは僕には相性の壁は越えられるなんて言うの!？」

タキが少し怒り口調でユリカに反論する。

それもそうだ。さっきユリカは相性の壁は越えられるといったばかり、これでは話が合わない。

「タキは苦手なタイプのポケモンに対し、何か対策を考えたことはある？ 耐性をつけようと努力したことはある？ 相性の壁は、口だけで越えられるほど甘いものではない。努力しないで越えられる壁なんてないわ」

バツサリとユリカがそう言う。この言葉は、少し怒り気味だったタキにも届いたようだった。

「ない……ごめんねユリカ。相性の壁なんてまったく越えられてないのに、越えられるって聞いただけで越えられた気になって……でも僕達は越えるよ！ こんな駄目な僕だけどさ。努力は一つの得意技なんだ。当然、ヒーロもロッキーも僕より凄い努力家だし、根

性だつてある。絶対に越えられる。いや、越える！」

「当然。私は壁を越えられないと感じるトレーナーにわざわざこんなことを言ったりしない」

タキの意気込みを聞いたユリカは、軽く微笑みながらボソツとそう言った。

その後、タキは考えた。炎タイプが水タイプに対抗するのにはどうすればいいか。しかし、思いつかない。タキには経験が足りないのだ。苦手なタイプのポケモンと戦うイメージが中々掴めない。そんな状態で、いくら対抗策を考えようと見つかるはずはない。時間だけが刻々と過ぎていく。

「どう？ 何かいい策は思いついた？」

ずっと、黙って頭を悩ませながら考えているタキを心配してか、ユリカが声をかける。

「うっん。どうも掴めないんだ。こういう難しいこと考えたことないから、どうも慣れなくて」

「そんなに難しく考えることはない。タキが思うようにやってみればいい。何事にもまずは挑戦が大切。壁は少しずつ越えていけばいいの」

ユリカに助言を受けたからなのか、その後、少し考えたかと思うと、何かを思いついたように立ち上がった。

「そうだ！ あったよ。僕達でも今すぐ出来る対策法。対策法って

程のものでもないかもしれないけど……でも、とにかく挑戦が大切なんだよね！ 対策法を思いつけたのもユリカのお陰だよ。ありがとうユリカ！」

タキが精一杯の笑顔でユリカにお礼を言う。

「べ、別に私は礼を言われるようなことはしていない。挑戦するのは、た、タキなのだから」

ユリカは照れているらしく、上手く言葉を喋れていない。そんな姿を見て、タキがまた笑う。

「アハハ！ そうだね！ じゃあ、早速、行動に移さないと。時間は待っててくれないもんね！」

そう言くと、タキはユリカを誘導しながらハナダシティに広がる大きな湖へと走った。

どうやら、ここが対策法を実行する場所らしい。

この場所でタキの水タイプ対策が始まるうとしている。

第十七回。水タイプ対策

湖に来たタキはヒーロとロッキーを場に出した。

戦いだろうと思っただけに出されたヒーロとロッキーは、目の前に広がる大きな湖に目をパチパチさせている。

さらにヒーロとロッキーは驚く。なんと、タキから湖の中に入るように命令されたのだ。

これには、ヒーロとロッキーも嫌がる。水はどちらにとっても弱点。弱点の中に自ら飛び込むなんて自殺行為だ。

ヒーロとロッキーは精一杯に首を横に振り、嫌だという気持ちを示す。

それは、タキにも伝わったようだ。しかし、タキは首を縦には振ろうとしない。

「お願い。僕はヒーロとロッキーに苦手な水を克服してほしいんだ。こんな無茶言うトレーナーでめんど」

タキが両手を合わせてお願いする。

しかし、それでもヒーロは気が乗らない。いくら、タキの命令といえど、こんなこと無意味に感じたのだ。

そんなヒーロに対し、ロッキーは動く。ロッキーは挑戦したかったのだ。どれくらい自分が水に耐えることが出来るのか。限界への挑戦である。

勢いよく湖に入るロッキーであるが、十秒も持たずに陸に上がる。

やはり水は苦手。

だが、このロッキーの行動により状況は一気に変わる。さっきまで気が乗らなかったヒーロが動き出したのだ。

ヒーロはとつても我慢した。十秒、二十秒と記録を伸ばしてゆく。そして、三十秒を過ぎた時点でヒーロが陸に上がる。

陸に上がったヒーロは青ざめた顔で、同じく青ざめた顔のロッキーを勝ち誇ったような顔で見た。

これに力チンときたロッキー。少しの休憩の後、湖の中に入り、我慢する。

ロッキーも二十秒、三十秒と我慢し、三十五秒まで記録を伸ばした。

そして、同じように青ざめた顔で陸に上がった後、ヒーロに勝ち誇ったような顔を見せた。

それから、同じことの繰り返しである。

体力回復のために少し休憩し、湖に入り、タキが記録を計る。

それが続くごとにヒーロとロッキーは、負けるわけにはいかないと記録を伸ばしていく。

ついには、一分という大台を超えるほどの持久力対決となっていた。記録を計るタキも大変である。

だが、持久力にも限界というものはある。一分三十秒を過ぎた辺りから、めっきり記録は伸びなくなり、ヒーロとロッキーの体力的にも限界だろうと、タキもヒーロとロッキーを止めた。

「ヒーロ。ロッキー。ごめんね！ 真剣に我慢してるヒーロとロッキーを見てると止めるタイミング分からなくなっちゃった……」

タキが止めた途端に、地に倒れこんだヒーロとロッキーを見て、焦りながらそう言う。

「でもこれでよかったのかも。タキのポケモン達。凄く満足そうな顔をしてる」

ユリカが静かにタキに囁いた。

「でも……やっぱりこんな対策法は無茶だったかなあ……結果的にヒーロとロッキーの我慢大会になっちゃったし」

「私はそれでいいと思う。我慢大会でも、確実に水に対する抵抗力は上がっている。それに、ヒーロとロッキーの絆も。これは、ヒーロとロッキーだから成功した対策法ね」

「だよな！ これもヒーロとロッキーが頑張ってくれたお陰だよ。あつ、頑張りすぎて疲れたよね！ 今から急いでポケモンセンターに行くからゆっくり休んでね！」

タキはそう言うともンスターボールにヒーロとロッキーを戻し、ポケモンセンターにモンスターボールを預けた。

こうして、タキのハナダジム対策は終わった。後は、実戦で対策法の成果があらわれるかどうか。それは明日のジム戦で明らかになる。

第十八回。激突！ ハナダジム！

次の日。ポケモンの体力も十分に回復。迷わずハナダジムへと足を踏み入れる。

ハナダジムの中はニビジムとは全く違い、ポケモンセンター並みの綺麗な施設だ。

きちんと受付もあり、ジム戦が混雑するようなこともない。ジムごとにこれほど設備の違いがあるのが驚きである。

タキは早速、受付でジム戦の予約を済ませる。

通常なら、先客のポケモントレーナーの予約が入っていれば、タキのジム戦は何日後かになっていたはずなのだが、運よく今から試合が出来るみたいだ。しかし、ジムリーダーの下へむかえるのは挑戦者だけなので、ユリカはジム内で待っていてもらうことになる。

いよいよジム戦という雰囲気を感じ、ますます気合の入ったタキは、やる気十分な顔つきでジムリーダーの下へ向かう。

タキの向かった先には、周りが水で囲まれたフィールドがあつた。フィールドの先にはタキと同一年くらいの女性が腕を組みながらタキの方を見ている。

「あんたが今日の挑戦者ね。あたしはカスミ。別名。ハナダジムのおてんば人魚よ！」

タキがくるやいなや、いきなり勢いよく自己紹介を始めたジムリーダーのカスミにポカーンとするタキ。

同じジムリーダーであるタケシとのテンションの違いについてい

けないようだ。

「もー！！　せっかく人が自己紹介してんだから、あんたも自己紹介しなさいよ！　それが礼儀ってもんでしょ！」

「タキです……別名はありません」

いつもは元気一杯なタキもカスミのテンションにはついていけないようだ。気持ちでは完璧に押されている。

「なんか調子狂うわね……まあいいわ。ポケモンバトルを始めましょ。使用ポケモン二体。ポケモン交代可。いいわね？」

「うん！　よろしく！」

そう言い終わると一斉にポケモンを出す。

タキはロッキーを、カスミはヒトデのようなポケモンを出した。

新たなポケモンを見たタキはいつものようにポケモン図鑑を出しカスミのポケモンを調べる。

名はヒトデマン。体長0.8m。体重34.5kg。体長の割りに体重が重いポケモンである。体の中心にコアみたいなものがついているのが特徴だ。

「行くわよヒトデ……えっ!？」

カスミが驚くのも無理はない。カスミがヒトデマンに命令しようとしたその時には既にロッキーの拳がヒトデマンに振り下ろされようとしていたのだ。

当然、タキはロッキーに何も命令していない。完全にロッキーの単独行動だ。

しかし、この行動が功を奏す。完璧な先制攻撃となったロッキーの行動が相手の出端を挫き、相手に行動させる隙を与えなかったのだ。

そして、当然のようにロッキーのパンチはヒトデマンを捉えた。無防備な状態で攻撃を受けたヒトデマンは大きく吹っ飛び壁に激突。中心のコアが点滅したかと思うと、静かに水に倒れこんだところをカスミがモンスターボールに戻した。

「やるわね……ポケモンがトレーナーの命令無しに攻撃してくるなんて。ポケモンに相当信頼されてるか嫌われてるかのどっちかね」

自己紹介の時とは打って変わったテンションで、そう言う。

「ロッキーが僕を信頼してくれてるかは分からない。でも、僕はロッキーを信頼してる！」

タキがカスミの言葉に対し、自信満々にそう返す。

「……本当、調子狂うわ。完全に油断してた。でも、もうこんな失態はないと思いなさい！ 行くのよアズマオウ！」

カスミが勢いよくアズマオウを水面に出す。

アズマオウ。体長1.3m。体重。39.0kg。黒い斑点が多い金魚のような形をしているが額から大きなツノが生えているのが特徴だ。

水面に出されたアズマオウは、水に囲まれたフィールドの中に潜り、姿をくらしながら移動する。これで、ロッキーにはアズマオウの行動は読めないというわけだ。フィールドを活かした戦い方である。

「これじゃ、アズマオウの動きが分からないよ。ロッキー。今はジツとアズマオウが現れるのを待つんだ！」

タキの命令を受けたロッキーはピタツと立ち止まり、アズマオウが現れるのを待つ。

「へえ」。命令もきっちり聞くじゃない。タキはいいトレーナーだね。ポケモンを縛りも放しもしない……。これって結構難しいことなのよ。今ので一つ分かった。タキはポケモンから信頼されてる。タキのポケモンが物語ってるわ。でも、それだけじゃ私には勝てない。私はハナダジムのジムリーダー……。別名。ハナダジムのおてんば人魚。タキみたいなトレーナーを沢山相手にしてきた……。そして、倒してきた！」

カスミの言葉と同時にアズマオウが水の中から跳ね上がり、ロッキー目掛けて飛び掛る。

「アズマオウ！ 飛び掛った勢いでツノで突く！」

「ロッキー！ 君の得意のパンチで応戦するんだ！」

二人の命令とともに動く二体のポケモン。

命令通り、ツノとパンチが激しくぶつかり合う。しかし、どちらも何もアクションがない。どうやら威力は互角。相殺したようだ。

「よし！ 食い止めた！」

アズマオウの渾身の一撃を食い止めて一安心のタキ。

「甘いわ。アズマオウ！ 今、相手のポケモンは無防備よ。そのまま水鉄砲を食らわせるのよ！」

アズマオウがツノとパンチが相殺しあっているその状態から水鉄砲を放つ。ガードできないロッキーは、相性の悪い水タイプの技をモロに食らう。

「ロッキー！ 今の君なら耐えられるはずだよ！ 今度はこっちの番だ！」

「何言ってるのよ。私のアズマオウの攻撃を……そんな……」

ロッキーは耐えた。これも、あの特訓があつてこそその事だろう。アズマオウが攻撃をし終わった直後の事だ。体制が整わない今は、さっきとは打って変わってアズマオウが無防備。遠慮なくロッキーのパンチを打ち込める。

「行けロッキー！ さっきの痛みを何倍にもして返してやるんだ！」

「ツープテーーー！！」

タキの言葉に反応するように大きく叫ぶロッキー。そして、アズマオウに渾身の一撃をぶち込んだ。

無防備のアズマオウにロッキーの渾身の一撃をかわす術はない。

ロッキーの一撃は見事にクリティカルヒットし、ヒトデマンと同じようにアズマオウも静かに水へと倒れこんだ。

カスミのポケモンは二体とも戦闘不能。この瞬間。タキの勝利が決定した。

「あゝあ。完敗ね。ブルーバッチ。これはもうタキのものよ」

カスミがタキにブルーバッチを渡す。

「ありがとう。楽しいバトルだったよ！ カスミとポケモンバトル出来てよかった！」

「そりやそうよ。ポケモンバトルで熱くならないわけないじゃない！ これからもどんどんポケモンバトルしなさいよ！」

「うん！ どんどんポケモンバトルしていくよ！ だって楽しいもん！」

二人は笑顔で握手を交わす。バトル前の二人ではありえない光景だろう。

そして、タキはハナダジムを後にした。

その後、ユリカと合流したタキが元気良くユリカに言葉を発する。

「本当、ユリカの言う通りだったよ！」

「何のことだ？」

急にそう言うタキの発言に意味が分からず、ユリカが言葉を返す。

「ジムのことだよ。ユリカがいなかったら僕、絶対に相性なんて考えずにカスミに挑戦してた。それじゃ、絶対あんないいバトルは出来なかったし負けてた。それに気づいて止めてくれたユリカには何でもお見通しなんだなあって思っで。やっぱりユリカは凄いや！」

「それは違う。私は理論的にそう言っただけ。ハナダジムのジムリーダー。カスミと戦い勝利したのはタキ。別に私が凄いわけじゃない。それよりも、ブルーバッチを手に入れたんだ。クチバシティを目指そう」

「なんだか話をすりかえられたような気がするなあ……まあいいや！ 次はクチバジム！ また楽しいポケモンバトルが出来たらいいなあ！」

こうしてカスミを倒し、ブルーバッチを手に入れたタキ。次に目指すはクチバジムのあるクチバシティ！

第十九回。喋るポケモン！？

事件とは突然起こるものだ。

なんと、二人がクチバシティに向かう途中。一つのこじんまりとした研究所から「助けてくれえ〜！」という叫び声が聞こえたのだ。

これを見過ごすわけにはいかない。そう直感で感じたタキは、大急ぎで研究所のドアを開けた。

大急ぎ、そして、真剣に研究所に足を踏み入れたタキは、研究所の中の現状に思わず口がポカーンとなった。

「これは……どういうこと？ ポケモンしかない」

少し遅れて中に入ったユリカも、意味が分からないようだ。

するとその時……

「そんなポカーンとした顔で見てんと助けて〜な！ 困ってんねんでわい！」

「ポ……ポケモンが喋った！？」

「嘘……こんなことって」

二人は何が起こっているか分からないほど驚いた。

それもそうだ。ポケモンが喋っているのである。こんなこと、タキに色々とポケモンについてアドバイスしているユリカでさえ体験したことのない出来事だ。驚かないほうがどうかしてる。

「タキ！　ここはとりあえず落ち着こう……そうだ。ポケモン図鑑で調べてみてはどうだ？　何か分かるかもしれない」

「流石ユリカ！　その手があった！」

ユリカの提案を採用したタキ、早速ポケモン図鑑を取り出し、喋るポケモンを調べた。

しかし、ポケモン図鑑にはなんの反応もない。

この図鑑はとても高性能なのだ。ポケモンに対して反応しないわけがない。

「ポケモン図鑑にも反応がない……ということはまさか……」

「そうや姉ちゃん。ええとここに気づいたで。あんたらの絡みが結構おもしろかったから言いださんかったけど、わいはポケモンちゃう。人間や。まあ、半分人間で半分ポケモンなんやけどな」

それなら話は通じる。人間なら言葉は話せるし、ポケモン図鑑が反応するわけがない。しかし、重要なことはもう一つある。なぜ、人間がポケモンの姿になっているかということだ。

「とにかくや。ちょっと助けてもらいたいねん。わいの後ろにある大きい機械のボタンを押して、わいを人間の姿に戻して欲しいんや。わいは左側の機械の中に入るから、どちらさんでもいいんで右側のボタンをポチッと押してくれるだけでかまへんから。頼みますわ」

必死に頼むポケモン人間。二人も、こんな姿で頼まれたからには断るわけにもいかない。というか、助けるために研究所へ入ったんだから断る理由もない。

頼まれた二人はせっせと機械の前に移動する。

そして、ポケモン人間が左側の機械に入ったのを確認すると、ポチッとボタンを押した。

ボタンを押した途端、機械が勢いよく振動する。どうやら作動したようだ。

その後、しばらくして機械の振動が止まり、左側・右側、両方の機械のドアが開いた。

なんと右側から男が、左側からポケモンが。それぞれ出てきたのである。

「いやあ。助かったわ。ほんまに助かった。お二人さんおおきにな」

「うん。それはいいけど、なんでこんなことになっちゃったの？」

タキはお礼などどうでもよかった。ただ、なんでこんなことになったのか。それに興味が集中していた。

「これなあ。結構、話が長くなんねんけど……」

まとめるところだ。

この男はマサキというポケモン研究家及び開発者。タキは知らないが、世界的に有名な、転送システムの開発者の一人である。

マサキは、マサキの現在の相棒ポケモンであるイーブイと新しい転送装置の実験を試みたのだが、見事に失敗し、例のような事態になってしまったのだ。

ちなみに、どんな機械なのかは見ての通りなのだが、完成段階で

はないので秘密らしい。

マサキいわく、この転送装置実験が成功し、完成すると、ポケモントレーナーが喜ぶこと間違いなしらしい。

「僕には分からないけど、とても凄い人なんだね。なんだか有名人と出会った気分だよ！」

「せやから有名人やねんて。わいの知名度もまだまだだな……」

「いや、ほとんどの人が知っていると思う。それ程、転送装置は役にたってる」

先程説明したとおり、マサキは転送システムで有名になった。すなわち、現在開発している転送装置よりも前に一つ転送装置を開発しているのだ。

「へえ。ユリカがそこまで言うんだから相当、凄い人なんだね！」

「そうや。ようやく分かったか！」

マサキが高らかに声を上げる。

「なんだかマサキって関西人みたい。喋り方も自信に満ち溢れた態度も！」

タキが冗談交じりにそう言う。

「関西人？ なんやそれ……なんか誤解しとるみたいやからとりあえず言うとかと、この喋り方はグレンタウン独特の喋り方なんや。まあ、珍しいからな。勘違いしてまうのも無理ないわ」

マサキが冗談交じりにそう言うと、急にニツコリと笑顔になり、もう一度、口を開いた。

「それとや、わいが自信に満ち溢れてんのは自分に酔いしれとるか
らとちゃうで。ただ、嬉しいねん。わいはポケモンとポケモントレ
ーナーの環境を良くしたいから研究しとる。ということはや、わい
が有名になるほどいい方向に進んでるってことやろ？ わいはポケ
モンが大好きや。そんな自分がポケモンの環境をよくしてると思う
と、いやでも自信に満ち溢れるわ。わいの自信はポケモンの環境を
よくする原動力なんや！」

「ごめん。確かにちよつと誤解してた。マサキはただのポケモン好
きじゃないんだね。ポケモンに人生を預けたポケモン好きなんだね
！」

「そついうこつちゃ！」

その後、少し雑談をし、出発の準備を始めたタキとユリカ。
すると、マサキが何かを取りに奥に行き、間もなく何かを手を持
ち戻ってきた。

「これやるわ。助けてもらつた礼や！」

マサキが何やらチケットのような物をタキとユリカに渡した。

「これは、サント・アンヌ号のチケットや。クチバシティにある港から乗れるわ。快く使い」

「いいの？　ありがとう！」

「気にすんな！　一ヶ月に数枚支給されるからなあ。わいくらいに有名になると。普通に買うと結構すんねんでそれ。今月は特に使う予定もないし丁度よかったわ」

マサキがまた、高らかに声を上げ、笑う。

「ありがとう！　じゃあ、そろそろ行くよ！」

「おう。達者でなあ。最後に一つ注意や。絶対にポケモンを苦しませるようなことしたらあかんで！　まあ、あんたらに限ってそんなことは無さそうやけどな！」

「うん。その注意についてははっきりと約束できるよ。苦しませないって！」

こうして、喋るポケモン事件を解決した二人は、改めてクチバシティを目指す。

第十九回。喋るポケモン！？（後書き）

実際のマサキの設定とは大きく異なることをここで報告しておきます（汗）

第二十回。クチバジムはなんだか奇妙

サンサンと照りつける太陽。それに合わせる様にザザーッと鳴る海の波。

そう。ここは港町クチバシテイ。タキにとって三つ目のジムのある、クチバジムがある町だ。

クチバシテイに着いた途端、いつものように町を回る二人。そして、クチバジムの発見。

しかし、ハナダジムのような例もある。今回もしっかりと相性対策を整えて挑戦しようと思ったタキは、戦いたい気持ちを抑えてジムの前を通り過ぎようとした。

しかし、それをユリカが止めた。

「ここは大丈夫。今のタキなら十分に勝てるわ。中に入りましょう」

なんと、ハナダジムのときは打って変わって、ユリカのほうから今すぐジムに挑戦したほうがいいと提案する。

「確かに僕も戦いたいのは山々だけど……なんだか他のジムと比べて外面が大きいし、やっぱり準備を整えた方が……」

「大丈夫。ここなら絶対に」

そう言うと、ユリカが半場強制的にクチバジムへとタキに足を踏み入れさせる。

「な……何するんだよ。入っちゃったじゃない！ ああ、もう戻れないだろうなあ……もう、向こうは僕達を呼びかけてるみたいだし

……」

タキの言うとおり、かなり遠くではあるが、三人の男が二人を呼ぶ声が聞こえる。

クチバジムは外面こそ大きいものの、中は何も置いておらず、視界・聴覚を遮る障害物のようなものも置かれていないので周りがよく見えるし聞こえるのだ。これでは大きいジムの無駄遣いである。横も縦もニビジムの1・5倍くらい広いというのに……

もう、こうなっては仕方ない。タキも覚悟を決めて三人の男の下へ向かった。

「ウェルカムクチバジムへ。ミーに挑戦しに来たのですネ？」

三人のうちのリーダー格と思われる男がタキに話しかける。

「はい。なんだかそうなっちゃったみたいです」

なんだか外人みたいな喋り方だなと思いつつも、もう突っ込むのはやめようと決心したタキは、そこには触れずに普通に言葉を返した。

「なんだか曖昧ネ…… オー。OKOK。ボーイがなぜ曖昧が分かりました。横のガールが前にクチバジムに挑戦しに来たのを覚えています。そして、いとも簡単にバッチをゲットしました。だから、このジムは楽勝ということで無理やりボーイをジムに連れ込んだ。違いますか？」

思った以上の推理力にタキは驚く。しかし、ユリカもジムバッチを持っていることは初耳だ。

「ええ。四つ持ってるわ。死闘と言える試合をしてのバッヂよ。クチバジムのマチスから貰ったバッヂ以外はね……」

どうやら、ユリカはマチスのことを良く思っていないらしく、少し睨みつけるような表情でそう言った。

「オー。怖い怖いネ。まあ、恨まれるのもよくあること。今は、リアルバトルの時間じゃないネ。ポケモンバトルの時間。さあ、ボーイ。バトルするネ」

マチスはそう言い、モンスターボールを取り出すのかと思えば、ポケモンを出す気など更々ないようだ。ポケモンバトルをしようというのに、ポケモンを出さないというのはどういうことだろうか。

そう疑問に思ったタキに気づいたのか、マチスがヘラヘラとした顔で言葉を発する。

「オー。言い忘れてました。ボーイには今からミーの横にいる二人と戦ってもらうネ。使用ポケモンは一体。一発勝負ネ」

マチスがそう言うと、横で黙っていた二人が静かに動き出し、慣れた手つきでモンスターボールを取り出した。

そして、なんだか煮え切らないままタキは二人とバトルする。結果は楽勝だった。ニビジムとハナダジムの勝ち抜いたタキにとって弱すぎる相手だったのだ。

二人に勝利した後、マチスが笑顔で拍手しながらタキの下へ歩いてきた。

「凄い凄いネ！　これだけの力があれば十分。オレンジバッヂ。これは君のものネ」

そう言つてオレンジバッヂをタキに渡そうとするマチス。

このマチスの行動に、ユリカが珍しく感情をぶつけるように激しく言葉を発する。

「早く受け取るのよタキ！　分かつたでしょ。マチスはこういう男なめてる。ポケモントレーナーである私達をなめてる！」

「結構、うるさいガールネ……ミィはジムリーダー。そのミィが認めたんだから別にいいでしょう。さあ、ボーイ。受け取るネ」

マチスがうんざりした顔でユリカの言い分を軽く流す。

「受け取らない……いや、受け取れないよ」

タキがオレンジバッヂを受け取るのを拒否する。

この行動にマチスが不思議に思う。

「なぜだボーイ。バッヂは欲しいんだらう？　なら、貰うべきネ。ボーイは十分強いネ」

マチスがもう一度、オレンジバッヂを貰うようにタキにすすめる。しかし、タキは受け取るうとはしない。

「受け取れないよ。だって、ジムリーダーのマチスと戦つてない。バッヂは欲しいよ。でも、僕はバッヂのためにジムに挑戦してるんじゃない。戦いたいんだ。ワクワクする戦いがしたい。ジムには間

違いなくワクワクするような戦いが出来るジムリーダーがいる。だから挑戦したい……ポケモントレーナーならポケモンバトルがしたい。マチスはそうじゃないの!？」

タキが自分の思う気持ちをマチスにぶつける。

タキの真剣な気持ちがマチスに届くかどうか。それは、マチスの行動次第……

「ブラボー……ブラボーボー!」

急に、マチスが子どものように騒ぎ出した。

そして、ギュッとタキの手を握り締める。

「その気持ちよ! ポケモントレーナーならポケモンバトルをしたい。最近のトレーナーにはそれが欠けてるネ。ガールはボーイを見習うべきネ。ガールはミーの人間性で質を判断し、あの時、おとなしくバツチを受け取ったネ」

マチスは、ワクワクを押さえきれないといった表情で活き活きとそう語る。

そして、また言葉を発し始めた。

「もちろん、ボーイもミーの人間性にうんざりしてたはずネ。でも、ポケモンバトルを挑んできた。これが大事。そこにポケモントレーナーがいるからバトルをしたい。これは当たり前のことネ。でも、最近のトレーナーは人間性や立場を気にする。自分の気に入った相手としかバトルしようとしなない。これじゃ駄目ネ」

意気揚々と語るマチス。しかし、その説明には引っかかるところがあるように感じたタキは、思い切ってマチスに質問する。

「じゃあ、なんでマチスはわざわざポケモンバトルを避けるような態度を取るの？ ジムリーダーなんだから戦える機会なんて凄く多いのに」

タキの質問に、マチスは照れるように頭を掻いた後、少し照れ笑顔になりながら口を開く。

「気づいて欲しいからネ。ミーも本当なら快くジムリーダーとしてバトルしたいネ。でも、それじゃ誰も気づいてくれない。だからミーはヒールを演じるネ。これをきっかけに色んなところでバトルが増えたら、ミーもハッピーハッピー！」

その言葉を聞いたタキはいい意味で笑みがこぼれた。

さっきまで睨みつけるような眼でマチスを見ていたユリカにも笑みがこぼれた。

それを見たマチスにも笑みがこぼれた。

そして、しばらく笑った。ハッピーな瞬間である。

すると、さっきまでバトル以外で一言も喋っていなかったマチスの横にいた二人が、何やらマチスに耳打ちした。

「そうネそうネ。はしやぎ合ってる場合じゃない。ミーはジムリーダー。さあ、ボーイ。バトルするネ……と、その前にやることあるネ」

そう言うつと、マチスが二人に外へ出るように言葉を発した。

マチスの言うとおりにジムの外に出る二人。

「どうしたの！？ バトルは？」

バトルする気満々だったのに肩透かしを食らわされたような感覚になるタキ。

「まあ見てるネ。OKよ！」

マチスが中にいる二人に向かって大声で叫ぶ。

その後、ジムに何か大きな音がしたかと思うと、中に入っていた二人が大急ぎで外に出てきた。

二人が出てきたその後もジムから発せられる大きな音は静まろうとしない。

あれこれ二分程であろうか、ようやくジムから発せられる大きな音が止まった。

「終わったネ。さあ、中に入ろう」

マチスが嬉しそうにジムの中に入る。

二人も後を追うように中に入った。

「な……何これ」

「どうなっているの……」

タキもユリカも驚いた。無理もない。何にも無かったジムが自然のような森や草に囲まれているのだ。どんな仕組みなのかも分からない。

「驚いてる驚いてるネ。この地形には意味があるネ。ちょっとミーの戦い方は変わってる。だから、こんな地形にしてるネ」

そう言うと、マチスはクチバジムの戦バトル方式を説明する。

まとめるところだ。

マチスは、戦いはトレーナーとポケモンの友情も大事だが、ポケモン自身の行動力も大事だと考えている。だから、これだけ広いジムを作り、外からは中がどうなっているか分からないように大自然のような作りになるような仕込みを行ったのだ。

そして、本題のバトル方式。使用ポケモンは一体。トレーナーはジムの外で待機し、大自然の中、ポケモンだけでバトルするサバイバル方式。勝利方法は、ジムの中で勝利したポケモンが、敗北したポケモンを背負ってジムの外に出てくること。

このバトルは、トレーナーの命令は一切ポケモンには聞こえず、ポケモンの判断だけで行動しなければならない、非常に難易度の高いバトル方式である。

「じゃあ、勝負ねボーイ！ さあ、久しぶりのバトルネ、ライチュウ！」

マチスはそう言うとライチュウを出す。

ライチュウを早速、ポケモン図鑑で調べるタキ。

名はライチュウ。体長0.8m。体重30.0kg。どこことなく大きなネズミにも見えなくてないポケモンだ。ネズミに比べると少し可愛く見える。

タキが出したのはヒーロ。タキがヒーロに、今回のバトル方式を伝え、準備万端。

「勇敢なボーイのポケモンだからって手を抜くことは無いネ。思いっきり倒してやるネ。ライチュウ」

「僕が命令しなくてもヒーロは大丈夫だよネ！ 頑張れヒーロ！！」

二人の言葉を聞いた、ライチュウとヒーロは、気合を入れてもらったかのように真剣な顔になり、ジムの中に消えた。

ライチュウとヒーロ。トレーナーのいない戦いが今、始まろうとしている。

第二十一回。ヒーロVSライチュウ。トレーナーのいないサバイバルバトル！

草木が生い茂る森の中、トレーナーの指示も無く、ポケモン自身の能力の高さが試される戦いが今、始まった。

ジムの中へ入った途端、ライチュウが広い森の中へ素早く身を隠す。

ヒーロを攪乱する作戦なのだろう。思惑通り、ヒーロは注意深く辺りを見渡し警戒している。確実に精神ダメージを与えているということだ。流石、マチスのライチュウ。サバイバル方式に手馴れている。

一方、ジムの外でポケモンの勝利を祈るトレーナー達。

「ボーイ。気分はどうネ？」

口を開くマチス。

「さっきから緊張が止まらないよ……信じて待つことがこんなに緊張するものだとは思わなかった」

暑くもない気温の中、額から冷たい汗を流すタキ。

「感心感心ネ。戦場へ旅立つ人は、色々な感情が交差して不安な気持ちになるネ。でも、帰りを待つ人だって同じように不安ネ。それは、ちゃんとパートナーと意思疎通できてる証拠。ボーイのポケモンも不安というプレッシャーに支配されないように頑張ってるネ。ボーイも支配されないように頑張るネ」

嬉しそうに話すマチス。そんな二人を黙って見ていたユリカが小さな声で言葉を発する。

「私は惜しい事をした。私もタキのようにもっとポケモントレーナーとして素直になるべきだった。そうすれば私の横にいる二人のように、ポケモントレーナーとして輝けていたのだろうな……」

ユリカの声は二人には届いていなかった。

しかし、ユリカの気持ちは二人に届いていることだろう。ポケモントレーナーとして大事な気持ち。それは、ユリカも二人と同じように輝いている。

そのような会話をジムの外でしているとき、ジムの中の戦いは大きな動きを見せていた。

ライチユウが地に倒れるヒーロを見下ろしているのだ。

ヒーロは耐えることが出来なかった。いつ、どこから攻撃がくるか分からない不安。トレーナーのタキが横にいない不安。

色々な不安の積み重ねは表にも裏にも隙を生む。その隙をライチユウは見逃さない。この状況は必然といえるものであった。

ヒーロを背負い、ジムの外へでようと行動するライチュウ。しかし、ヒーロはボロボロの体でそれを拒否する。

他のポケモンなら不安に押しつぶされていたかもしれない。

しかし、ヒーロには諦めないという強い意志がある。その意志は、時に不安すら打ち破る。

だが、その意志すら打ち破ろうというライチュウは、フィニッシュを決めようとするかのように最大出力で電撃を溜め始める。

ここで電撃を食らえば終わる。そう感じたヒーロは、体の力を全て振り絞り、ライチュウに向けて火の粉を放つ。

最大の力で電撃を溜めていたライチュウに火の粉を交わす時間は無く、火の粉はクリーンヒット。今度はライチュウが地に倒れる。ダメージ的に五分とはいかないものの、逆転の可能性が見えた一撃。ヒーロの執念。

だが、思った以上に起き上がるのが早いライチュウ。ヒーロに休息の時間すら与えてくれない。いや、ライチュウが与えようとしていない。

サバイバルでは相手にプレッシャーを与えるのはとても大事なことだ。無理にでも立ち上がり常に相手にプレッシャーを与え続ける。その心の現われに、ライチュウの足はガクガク。とても立てる状態とは思えない。

しかし、ライチュウは前に出る。一步一步ゆつくりとヒーロに向かい足を進める。有利なのは自分だ。そう言っているかのように自信気な表情で……

ヒーロはもう前に足を進ませることもままならない。さっき、体の力の全てを振り絞って火の粉を放ったのだ。もう、反撃する力すら残っていない。状況は絶望的ともいえるだろう。でも、なぜかヒーロは負ける気がしない。なんだか心が熱い。いつもの熱さとは違う。なんだか分からない熱さ。

ヒーロは突然、叫びたくなった。もう、我慢できない。叫ばないと熱さに押しつぶされる。そう、本能が叫んでいる。

「カゲエエエエー!!!」

ヒーロが思いっきり叫ぶ。サバイバルバトルに手馴れているライチュウも驚き、一瞬、動きが止まるほど大きな叫びだ。

その声はジムの外にいるタキには届かない。

しかし、なぜだか分からないが、タキにはヒーロが自分を呼んでいる気がした。そして、タキも思いっきり呼びかける。

「ヒーロー!!!」

ヒーロと同じように思いっきり叫ぶタキ。しかし、その声に驚くものはいない。逆に、さっきから嬉しそうにバトルしていたマチスが額から冷や汗を流し、不安に支配されている。

「バトル中に……まさか……ネ」

自分に言い聞かせるように誰にも聞こえないような声でボソッと言葉を発するマチス。

しかし、マチスの思う、まさかの事態は現実にかかる。

ジムの中で起こるまさかの事態。

地に倒れ、気絶するライチュウ。そして、ヒーロとはまた違う形のポケモン。

そのポケモンがライチュウを背負い、ジムの外へ出る。

この瞬間。勝負は決まった。

「まさか……本当にこんなことになるなんて……まったく、ボーイは大した大物ネ」

「ヒーロ！……ヒーロ？……」

タキが驚くのも無理はない。ライチュウを背負って出てくるポケモン。それはヒーロしかない。しかし、ライチュウを背負って出てきたポケモンは、明らかにヒーロとは違う形をしたポケモンなのだ。

「どうなってるの……これ？」

タキが不思議そうな表情でユリ力を見る。

「タキが驚くのも無理はない。でも、安心するんだタキ。あのポケモンはヒーロ。ヒーロは進化したの」

「進化？」

タキは、進化の事をオーキド博士から聞いていない。全く分らないのだ。

「進化とはポケモンが成長した証。ポケモンは成長すると進化する。当然、進化しないポケモンもいるけど、タキのヒーロは進化するポ

ケモン。姿は変わってもヒーロはヒーロ。それに変わりはないわ」

「そうなんだ！ よかった。いきなりヒーロとは違うポケモンが出てきたからビックリしちゃったよ。でも、あのポケモンはヒーロなんだよね。なら、全然いいや！」

ユリカの言葉を聞き安心するタキ。進化したヒーロに近づく。

「よくやったよヒーロ！ そうだ。ヒーロがバトルしてる時にね、なんだかヒーロの声が僕に聞こえてきたんだ。心配のしすぎかなあ？」

ヒーロに話しかけるタキ。ヒーロも、首を縦に振りながら「カゲエ」と鳴いている。

「やっぱりヒーロもそう思う？ でも、それはいいことだね！」

そう言った後、モンスターボールにヒーロを戻すタキ。

その後、マチスがタキに近づく。

「ブラボー！ まさか、バトル中に進化するとは思わなかったネ。進化とはトレーナーとの心の共鳴も大事ネ。相当な信頼関係がないと独断で出来ないネ。離れて行動していても共鳴しあえるポケモンとトレーナーの信頼関係。正にブラボー！ オレンジバッヂはボーイに相応しいバッヂ。久しぶりにオレンジバッヂが輝いて見えるネ」

そう言ったマチスは、タキにオレンジバッヂを手渡す。

「ありがとう。僕はマチスから色々なことを学ばせてもらった。このオレンジバッヂはその証だね！？」

「その通りネ。ボーイとバトルできるトレーナーは幸せネ。ミーが幸せなんだから間違いなしネ！」

ガツチリと握手を交わすタキとマチス。
その後、ユリカがマチスに言葉を発する。

「私も幸せだ。やっと私の持つバッヂ全てが輝いて見えるようになった……マチス。一つ聞いていい？ 私の持つオレンジバッヂも輝いて見える？」

とても真剣な顔でマチスに問うユリカ。
問われたマチスは一つも考える様子を見せることなく、優しい笑顔でユリカに微笑みかける。

「当たり前ネ。ガールがボーイと一緒に行動することで学んだことも多いネ。だから、ガールは、オレンジバッヂが輝いて見えた。そういうことネ！」

ユリカとマチスもガツチリと握手を交わした。この瞬間。ユリカのオレンジバッヂは、輝きを取り戻した立派なバッヂとなった。

そして、マチスと別れた二人が次に目指すのは、クチバシティの南部にあるクチバ港！

第二十二回。サント・アンヌ号　く動く軍団く

クチバシティを南に進んだところにあるクチバ港。

二人はここで、マサキから貰ったサント・アンヌ号のチケットを使い、船に乗り込む。目指すはタマムシティ。タキから見て四つ目のバッヂがある町で、ユリカの目的地でもある重要な町だ。

船に乗り込んだ後、船員に場所を案内される。タキとユリカは、マサキから貰ったチケットの番号が違うので、別々の部屋となる。

タキが案内されたのは、サント・アンヌ号の中でも特別に大きな部屋。マサキという人物の凄さをしみじみと感ずる。

その大きな部屋には、今のところタキを除くと人はいない。正に選ばれた人のみが入れる部屋と言うべきか。

「ここがタキ様の部屋となります。それと、この部屋にはもう一人お客様が来られます」

船員は、タキにそう言うとその場を立ち去った。

しばらくして、部屋にノックの音が響き渡った。恐らく、もう一人の客が来たのだらう。

予想した通り、部屋に入ってきたのはもう一人の客人と、案内人

の船員。

船員は一通りの説明を終えた後、部屋を出ていった。

「若いのに凄いなあ。中々入れんねんでこの部屋」

船員が部屋を出た瞬間、笑顔で積極的にタキに喋りにきた三十くらいの年であろう男。

タキは軽く頭を下げ、挨拶し、言葉を返す。

「別に僕が凄いわけじゃないよ。マサキからチケットを買ったからここに入れたんだ」

「マサキさんの知り合いかいな！ そりゃ凄い話や。これは役に立つかも知れへんな……」

不適に微笑む男。

「まっ、短い間やけどよろしく頼むわ。わいの名前はコルト。そちらさんの名前はなんて言うん？」

コルトの発言が少し気になったタキだが、この世界で突っ込んでもありいいことがないことを今までの旅で知ったタキは、あえて突っ込まない。名前を教え、挨拶だけを交わす。

その後、無言の時間が続き、静かな部屋の中、出港のアナウンスが流れる。

そのアナウンスは途中までは普通のアナウンスだった。

しかし、異変は突然訪れる。

「……え、ただいま出港いたしました。確認いたしましたね。も

う一度言いましょうか。出港いたしました。それではこれより作戦実行とさせていただきます。実は、このサント・アンヌ号の船員は全て偽者です。ですがご安心ください。我々の技術は完璧です。船の操縦はお任せください。ということは……………お前達は全員逃げられねえってことだよ！ 今からお前達の部屋を訪問する。そこで手持ちのポケモンを差し出せば逃がしてやる。助かるなんて考えるんじゃないぞ。この船を乗っ取ったのは我々、残虐非道のロケット団なんだからよお！ ガタガタ震えて待ってやがれ！」

急なアナウンスに船内は戸惑いの渦に巻き込まれる。

ロケット団というのはかなり凄い組織のようだ。隣の部屋などから、悲痛の聲が二人の部屋まで貫通してくる。

当然、タキも戸惑う。

「何々！？ どういうこと？ コルトは何か分かる！？」

とりあえずコルトに聞いてみるタキ。

「すまんなあ。船が出港した後にも伸び伸びと話たろうと思っててんけど、まさかここで出てくるとは厄介なやつちゃ。まっ、わざわざ名乗りでくれたのはありがたいな。とりあえずや、タキはどんなくらい強い？……そうやなあ。バッヂ何個持つとる？」

コルトの落ち着いた質問に、タキは大慌てで三つと答える。

「よっしゃ。最高に役立つわ。とりあえず手持ちのポケモン全部だすんや」

タキは言われた通りにヒーロとロッキーを場に出す。

「よっしゃ。じゃあドアが開いた瞬間、行動開始や。とりあえず、タキはわいの後ろを着いてきてくれ。相手がポケモン使ってきたときに応戦してくれると助かるわ」

タキは、よく状況は分かっているものの、コルトの命令に頷く。

しばらくして、部屋のドアが開く音がした。

恐らく、ロケット団がポケモンを奪いに来たのだろう。

「じゃあ行くで。タキは何が起こつとるか分からん思っけど、とっても危険なことすんねや今から。もしかしたらひどい目に遭うかも知れん。でも、そうしな、人を・ポケモンを助けることが出来ん。タキは、それでも人やポケモンを助けたいと思うか？」

「うん！ 当たり前だよ！」

「ええ返事や！」

そう言ったコルトは、開いたドアから現れた、全身黒い服を来た、黒いベレー帽に書かれている赤色のRが目立つロケット団であろう男を思いっきり蹴り飛ばした。

「す……凄い」

その蹴りはタキも驚くほど鋭い蹴りで、一撃で黒づくめの男をノックアウトした。

「驚いてる場合ちゃうで！ 早よせなあかんねや！ 他のロケット団員は待ってくれへん！」

「う……うん！」

勢い良く部屋を飛び出す二人。

どんな存在なのかもイマイチ分からないロケット団。

まだ、状況も掴めていないタキだが、サント・アンヌ号に乗る、人・ポケモンを助けるため動き出す！

第二十二回。サント・アンヌ号　ゝ動く軍団ゝ（後書き）

十九話で、サント・アンヌ号のチケットの枚数に関する訂正があったことをここで報告しておきます。

第二十三回。サント・アンヌ号　く救出作戦く

部屋の外に出た二人。

広い通路を慌ただしく走る。

「ど……どうするのこれから!？」

「とにかく走るんや。多数のロケット団員が今の音に反応してこっちに向かってきとるはずや。そうなると、残ったロケット団員が一つのエリアに集まる数が限られてくるやろ？　道はたくさん分かれとる。十分、分散されるわ。それを利用して助けるうちゅーわけや」

走りながら説明していると、部屋を発見。その部屋の前には、ロケット団員の姿が……

「そこで、見つけてもったロケット団員はこうする!」

ロケット団員の姿を発見するや否や、鋭い蹴りで思いつきり蹴り飛ばす。

そして、部屋の中にいる客とポケモンの無事を確認する。

この場にいるのは危ないので、客にも着いてくるように言う。

「よっしゃ。まず一人無事や。タキ！　ポケッツと見とるだけじゃあかんで。ロケット団員もポケモントレーナーや。もしもわいがしくじって、向こうがポケモンつかうてきたら、リザードとイシツブテで応戦してや。流石のわいもポケモンは蹴れん。人には人。ポケモンにはポケモンや」

「うん！　分かった!」

「よっしゃ。じゃあ次いくで！」

同じように部屋を回った。

コルトの活躍は凄まじく、タキの出番は全くない。奪われそうになったポケモンだつてきちんと助ける。頼りになる男だ。

きっと、武術にはかなりの自信があるのだろう。時には相手のロケット団員三人同時に出くわすといったこともあった。しかし、コルトはあっさりと倒してみせる。

「凄いよコルト！　なんだか無謀な状況でもいけそうな気がしてきた！」

「なんも凄くない。まだ助けきれてへん。凄いつていうのは助けきつたときにでも言うてくれ」

タキは普通にコルトがかっこいいと思った。
熱さがあるにも関わらず、大事なところではクールな男はツボなのだ。

その時だ。一つの部屋から女性の大きな叫び声が聞こえてきた。
タキはこの声に聞き覚えがあった。そう。ユリカだ。

「ポケモンを渡せ！　そうでないとしたじゃすまんぞ！」

ロケット団員がユリカの持つモンスターボールを奪おうとする。

「嫌！　あなたにも家族がいるでしょ？　その家族と離れるのは嫌でしょ？　それと同じ。私のポケモンは私の家族よ！　家族を渡せ

るはずがないわ！」

必死で抵抗するユリカ。

そこに二人と、着いてきた客達が駆けつける。

「そうやで姉ちゃん。自分のポケモンは家族や。わいはそれを奪うロケット団が許せん。どんな理由があるんかは分からん。もしかしたら大きな事情があるんかもしれん。でもな、これはやってええことやない。どんな理由があつたとしてもやってええことやないんや。それでもやる言っんやつたら、わいは容赦せん」

そついい終わると、ユリカからポケモンを奪おうとしたロケット団員を思いつき蹴り飛ばした。

その時だ。大勢の人が入っている大きな部屋の扉から大きな拍手とブラボーという声流れ込んできた。

「そつだ。そつだよ。忘れてたぜえ。何やら大きな音がしたと情報が入り、部屋を見に行けば誰も居ない。この部屋は誰だつたかなと見てみれば、なんと名前にコルトとあるじゃないか。こんなことなら大袈裟な行動するんじゃないかなかつたぜ。反省だ反省。本当、邪魔だなコルト。邪魔だなあ！！」

一斉に後ろを振り向いたそこには大勢のロケット団員とボスらしき男。

完全に入り口付近はロケット団により封鎖されており、部屋の外に出れる状態ではない。

「その声、聞き覚えあるなあ思うとつたんや。しかも、その目立ちたがり屋な性格。リユージやな？ 毒蛇リユージ言うた方がええか。」

まさか、幹部と出会えるなんて思うとらんかったわ」

タキもユリカも周りの客も、二人の会話にまったくついていけない。

とりあえず分かること。それは、ロケット団とコルトには、何か深い関わりがある。ただ、これだけだ。

第二十四回。サント・アンヌ号　く読めない毒蛇く

誰も分からぬ状況。そして、静かなこの空間。そんな奇妙な空間で、しばらく動かぬまま睨みあうリ्यूジとコルト。

「リ्यूジ様……この状況、我々は圧倒的優位に立っております。力押しでポケモンを奪った方が早いのでは……？」

誰も動かぬ状況に辛抱ならなくなったのか、ロケット団員の一人がリ्यूジに意見する。

しかし、これがいけなかった。リ्यूジは、自分に意見したロケット団員を殴ったのだ。

殴られたロケット団員はピクリとも動かない。

「す……凄い……」

タキが思わず声を上げる。

タキが驚くのも無理はない。リ्यूジはロケット団員をただ殴ったわけではない。拳が見えなかったのだ。恐らく、タキ以外の人間にもリ्यूジが放った拳は見えなかっただろう。それくらい早かった。

「相変わらずやな……毒蛇の異名は伊達やないわ。軌道が分からへん自由な拳は、まるで自分を表しとるのお。毒蛇」

その拳はコルトですら認める拳。相当凄いのだ。

「お前に言われると照れるなあ。自信がついてしまうよ。だが、俺

は別に暴漢野郎じゃねえ。自信をつけるべきじゃあない。俺はただ馬鹿な事を言う野郎がいたから殴っただけのこと。勘違いしないでくれよ皆さん。俺は結構紳士なんだぜえ？ 初めは無理やり奪おうとしたけどよお！」

自分で発言しながら自分で笑っているリュージ。正に奇妙。

「とりあえずどうしたいねん？ 早よせな、こんな状況みんなの体に毒やわ。そこで倒れてる団員の言うとおり、力押しでくんのが一番早い思っぞ。まあ、わいが止めるけどな」

このままペースを握られるのは不味いと思ったコルトが挑発を仕掛ける。

「おいおい。これを見るよ」

リュージが着ている、革ベストのポケットからモンスターボールを取り出す。

「腐ってもトレーナーなんだぜ俺達は？ なら、これしかないだろうがよお！？」

そう言つと、ポケモンを出すリュージ。

そのポケモンは色が紫色をした蛇のようなポケモンで、正に毒蛇に相応しい名前のポケモンである。

「ほんまに読めそうで読めん幹部やな。よっしゃ。出番やでタキ！ ポケモンバトルでぶち負かしたれ！」

「ぼ……僕！？」

いきなり名前を呼ばれたので慌てるタキ。

「当たり前やる！ 言っただやんけ。ポケモンにはポケモンや。わいはトレーナーちゃうからポケモンは持ってへんねん。バッヂ三つの力見せたれ！」

コルトの言葉で何かを決心したのか、さっきまでとは違うトレーナーの顔で、大きな声で「うん！」と言い、リザードと共に前に出るタキ。

まずは、相手のポケモンをモンスター図鑑で調べる。

名はアーボック。身長3.5m。体重65.0kg。腹部にある恐ろしげな顔のような模様が特徴的なポケモンだ。

「それ、図鑑か？」

不意にタキに質問するリユージ。

タキは、少し睨みつけるように「そうだけど？」と返す。

「幸せだなあ。いい環境に恵まれてるよお前。どうせ、そのポケモンも貰い物だろ？ 残念だが負ける気がしねえ。楽勝だぜこんなのよお！」

また、自分の言葉で笑うリユージ。

これにはタキもムツとする。

「環境なんて関係ないよ。ポケモンとトレーナーは環境とか貰い物とか、そういうところで結ばれてない。間違ってるよ！」

タキも負けじと反論する。

「そう怒るなよ。軽いジョークだ。早く始めよう……分かってとは思うがてめえら全員に言う。何があっても手を出すなよ。これは俺とこいつとのバトルだ。もし、誰かが手を出した場合、俺の拳が飛んでくることをお忘れなく」

そう言った後、リ्यूジもアーボックと共に前に出る。

「じゃあ始めようかあ！ぶっ殺潰してやるぜえ。戦意喪失するくらいよお！」

ポケモンを奪うために船を奪い、作戦を実行していたと思えば、自らポケモンバトルを要求してきたロケット団幹部の毒蛇リ्यूジ。

リ्यूジの本当の目的は掴めないでいるが、とにかく今は戦うしかない。

タキとリ्यूジ。異色とも言えるポケモンバトルが、今始まる。

第二十五回。サント・アンヌ号　く異色対決く

「早速行くぜえ。アーボック。作戦Aから行こうかあ！」

リユージの命令により、アーボックがゆっくりと動き出す。

「ヒーロ！　先制攻撃の火の粉だ！」

しかし、ヒーロはタキの命令を聞こうとしない。なんだか分からないが、とても得意気な顔でタキを見ながら、指をチツチツと動かしている。

「なんだ。命令も聞けねえのかよてめえのポケモンは！　マジで楽勝だぜえ！」

ケラケラと笑うリユージ。その顔には余裕以外の言葉が見つからない。

「どうしたんだヒーロ！　火の粉を放つんだ。やられちゃうよ！」

焦るタキ。

すると、ヒーロがクルツとアーボックの方へ振り返り、火の粉を放つ。

「凄い……凄いよヒーロ！」

これは火の粉と言うべきなのだろうか……部屋にいる全員が目の当たりにした光景。

それは、火の粉とは思えないほどの火力。火炎放射とでもいった

ところであろうか。

これで余裕をかましていたリユージの余裕も消えることだろう。誰もがそう思った。しかし、リユージは変わらず笑い続けている。

「確かに凄い威力だ。ビックリだぜ。でもよお、当たらねえと意味ねえんじゃないか？　そこに黒焦げになった俺のアーボックはいるか？　いやいねえ。ということは当たってねえってことだよ糞野郎！」

確かにリユージの言うようにアーボックはそこにいない。なら、アーボックはどこにいったというのだろう……

「上……上やタキ！」

真っ先に気づいたコルトがタキにそう伝える。

「おいおい。助言は卑怯だぜ。でも、もう遅い。俺のアーボックは、もうてめえのポケモンを捉えた」

避ける時間は無かった。空高く飛び上がったアーボックの体が、ヒーロへ、のしかかるように接触する。大ダメージとはいかないが、多少のダメージは免れない。

「アーボック！　そこから巻きついてやれ。一気に決めよう」

のしかかった状態のアーボックが、軟らかい体を器用に使って、ヒーロに巻きつき、苦しめる。

「どうしたよ？　やっぱりこんなもんなのか？　楽しませろよ。ま

「だまだ俺は燃えちやいねえぜえ？」

「大丈夫。ヒーロならやれるよ！」

必死に励まし続けるタキ。

タキは励まししながら打開策を考える。しかし、中々打開策が浮かんでこない。焦る一方だ。

対するリユージは焦るところか未だに笑い続ける余裕ぶり。状況の流れは見て分かるほどリユージが有利。

するとその時、ヒーロが精一杯の力を振り絞って立ち上がり、巻きつくアーボックを振り払った。

「まさかの展開だ。不味いな……リザードは小さな身体の割に力は強い……見誤ったぜ。アーボックの巻きつく力を振り払いやがったなんてよお！」

初めてリユージの笑いが消えた。アーボックは身体の割に力はそれほど強くない。

その身体の差をヒーロは力で打ち破ったのだ。

「やった！ いいぞヒーロ！ そこから思いっきり体当たりだ！」

巻きつきを振り払われて混乱しているアーボックに、ヒーロは体当たりを当てた。

体当たりを食らったアーボックは、その衝撃でダメージを受けるが、衝撃により我に返る。

「やるじゃねえか。これでこそバトルだぜ。よし、アーボック。作

戦Cに変更だ」

「ヒーロ！ 間髪容れずに火炎放射だ！」

ヒーロが思いっきり火炎放射を放つ。

しかし、アーボックは身体の割に素早い。サッと横にかわされる。

「甘いぜえ？ そんなガムシヤラに放ったところで当たんねえよ。学習しようぜ？」

リユージがタキを挑発する。

「ヒーロ！ 火炎放射が駄目なら体当たりだ！」

見事にタキはリユージの挑発にのってしまふ。

これもまたガムシヤラな命令である。

だが、ヒーロはタキを信じて命令を素直に聞き体当たりの構え。しかし、それは見事に打ち崩される。アーボックの尻尾が的確にヒーロを捉えたのだ。

「させねえよ。バトルはリズムだ。相手のリズムに合わせてたら勝てるもんも負けちまう。終始リズムは渡さねえ。これが大人のバトルってやつだ……ククク。まだまだ若いんだよてめえは！ 勢いだけで勝てるなんて思ってたんじゃないぜえ？」

確かにタキの命令パターンは大体分かる。

それに対し、リユージは色々な手で攻め、相手を混乱させつつ徐々に追い詰めていくタイプ。どちらの戦い方が上手いかと言われたら、リユージだと答えてしまうだろう。

「確かにそうだね。でも、僕は合わせないよ。相手のリズムに合わせたら負けなんだ。僕は、自分の思うように命令する。そうだよね！？」

タキはもう、リージュが悪い組織のロケット団の幹部だということとを忘れている。

ただ、一人のポケモントレーナーと戦っているという感覚に陥っている。しかも、自分よりも戦いを熟知していて強い相手。

今はワクワクすべき時ではない。しかし、タキのワクワクは止まらない。ポケモンバトルという魔法に完璧にかかっているのだから。

「間違っちゃいない。正確な判断だ。でも、どうする！？ てめえは今、絶体絶命だ。さあ、どんな悪足掻きを見せてくれるんだあ！？」

それはリージュも同じことなのかもしれない。

リージュも今、自分がロケット団の幹部だということを忘れているのかもしれない。

真意は分らないが、そうとしか見えない。

「ヒーロ！ そこから一步も動いちゃ駄目だ！」

タキがだした命令は動かずその場で待機しろということ。

この命令にはリージュもハテナ顔を見せる。

「僕がリズムを合わせるからいけないんだ。僕がリズムに合わせなければリズムはとれない！」

自信満々にそう言いかけたタキ。

「馬鹿だなてめえ……マジで若いぜ。まあいい。持久戦ならいつまでも付き合ってやる。なめんなよ糞野郎が！」

その後、しばらく時間が流れる。

二体はまったく動かず睨みあい続ける。

しかし、ここで展開は動く。

「ヒーロ！ ゆっくりと間合いを詰めるんだ！」

動いたのはタキ。持久戦に耐えられなくなったのだろうか。

ジリジリと詰められていく間合い。

そして、ヒーロの足がアーボックの間合いに触れる。ここはもうアーボックの世界だ。

「結局、持久戦を制したのも俺だったようだなあ！？ アーボック！ 一撃で仕留めてやれ。これで終いだぜえ！」

リユージがフィニッシュとでもいうような命令。

「ヒーロ！ それを避けて全力で体当たり！ これで決めよう！」

すかさずタキもヒーロに命令を送る。

素早く伸びるアーボックの尻尾。

その尻尾はヒーロを確実に捉えたと思われた。

しかし、その尻尾はヒーロを掠めただけでダメージには至らない。

「まさかの事態だ……耐えろアーボック！ 根性見せやがれ！」

リユージの言うようにアーボックに体当たりをかわす時間はない。アーボックの尻尾は伸びきっており、アーボックの体に尻尾が戻るまで時間がかかる。その口スは大きい。

尻尾が体に戻る前に、ヒーロの体当たりがアーボックにクリーンヒット。大ダメージは免れない。
もしかすると……

「立て！ 立ちやがれアーボック！ 負けぢゃなんねえ！」

必死にアーボックに呼びかけるリユージ。

しかし、その思いは届かない。アーボックは完璧に気を失う。

「やった！ やったよヒーロ！ 僕達の勝ちだ！」

「知らねえ。もう知らねえぜ？ 俺はもう抑えきれねえ」

バトルに勝ったタキ。

しかし、リユージがこのままおとなしくしているはずはない。まだ、本当の意味でのバトルは終わっていない。

第二十六回。サント・アンヌ号　く狂気く

ポケモンバトルに勝利したタキ。

これで終わるかと思われたこの事件。しかし、事件はまだ終わらない。

どうもリユージの様子がおかしい。さっきまでの余裕ぶりがまるで無かったかのような苦しそうな顔でフルフル震えている。周りのロケット団員もビビッて震えているみたいだ。

「聞きやがれ……写真を撮り、コルトとタキの写真をブラックリストとして報告しろ。作戦は失敗だ。全ては勝手な行動をしたリユージのせい。そう言えばお前らは助かるはずだ。もう一度言うぞ。写真を撮り早く逃げろ。俺が壊れちまう前によお!!」

リユージが言葉を喋るのも苦しそうに団員に命令を伝える。

その時、ロケット団員達の震えが止まった。リユージの言葉が心に伝わったのだろう。迅速にカメラを持つ。

「させへん!!」

コルトが動く。

「邪魔すんな糞野郎があ!!」

だが、リユージが邪魔をする。コルトもリユージ相手ではスムーズにはいかない。止めることは難しい。

そして、団員達が写真を撮り終えてしまう。
その後、団員達は一斉に部屋の外へ逃げ出した。

「ヒヒヒ……危ねえ。ギリギリセーフだ。まさか、負けちゃうとはなあ。だからポケモンってやつは気にいらねえ。俺の思い通りにいきやしねえ。だから鍛えちまう。最終的に信じれるのは自分の拳。ヒヤハハ。ヒヤハハハ！ さあ、二ラウンドを開始しよう。ゲームは簡単だ。勝利条件。俺を倒し捕らえている船員を救出する。敗北条件。俺に倒される。もしくは、誰も操縦者のいないこの船がどこかにぶつかり沈没し、全員死ぬ。どうだ！ 面白いだろ！？」

リユージの笑いはもう余裕の笑いじゃない。何かにとりつかれているかのような笑い。

確実に狂ってきている証拠だ。

「おもしろいやないかい。お前だけは絶対に逃さへん。タキ。下がつとれ。一瞬で倒したる。それで、わいらの勝利にしたろうや」

タキに下がるように言うコルト。
しかし、タキは下がるうとしない。

「駄目だよ。コルトは船員達を助けに行つて。リユージは僕が何とかする」

「何言うつんねん！ タキには無理や！ おとなしく下がつとれ！」

無茶なことを言うタキに少しきつめに言葉を発するコルト。
だが、やはりタキは下がるうとしない。

「駄目。このまま倒しちゃったら嘘のままで終わっちゃう。ポケモ

ントレーナーにはポケモントレーナーにしか分からない気持ちがあるんだ。だから譲れないよ」

「分かった。でもな、あいつを倒さな先には進まれへん。タキにあいつを倒せるか？ 無理やる。どうやってわいが部屋から出るんや？」

「大丈夫。僕に考えがあるから」

そう言つと、コルトに何か耳打ちするタキ。

「成功せんやろそれ……」

ちょっと呆れた感じでタキに言葉を発するコルト。

「大丈夫。信じて！」

成功すると言い張るタキ。

「分かった。しゃーないなあもう！ これで、みんなになんかあったらわいはタキを許さんで？」

「任せて！」

タキの頼みを了承するコルト。

しかし、その表情は不安で一杯といった感じである。

「最後の作戦会議は終了か？ じゃあ行くぜえ？ ゲームスタートだ。暴れてやる。壊してやる。ヒヤハハハハ！」

ゆっくりと近づいてくるリユージ。

対して、リユージに全力で突っ込んでいくコルト。

先制攻撃はコルト。ハイキックでリユージの顔面を狙いにいく。

「遅すぎるぜえ？ 死ねやあ！」

リユージの拳の方が圧倒的にスピードが上。

コルトを完璧に捉えたと思われた拳。しかし、リユージの重心が大きく崩れ、地に倒れこむ。当然、拳は当たらない。

「ねっコルト！ 成功したでしょ！？」

そう。タキがリユージに思いつきりタックルしたのだ。

リユージからしてみれば戦う相手などコルトしか頭にない。タキの行動など気にもしなかったのだ。

「やってみるもんやな！ タキ。絶対やぞ。約束やぞ！」

コルトは、そう言うと、部屋の外へと去っていった。

「てめえ。てめえもか。俺の邪魔をするやつは誰一人許さねえ」

「自分が作った嘘の自分で多くの人を巻き込むな！ そんなの最低だよ！」

タキがリユージの胸倉を掴みかかる。

タキが人の胸倉を掴むとき、それは怒ったときだけだ。

タキは今怒っている。これはポケモントレーナーにしか気づけな

い。
そんな怒り。

第二十七回。サント・アンヌ号　　ゝ終結ゝ

「嘘の自分？　俺は俺だ。誰でもねえ。分かったような口で説教垂れてんじゃねえぞ糞野郎が！」

瞬時に胸倉を掴むタキの手を振りほどくリュージ。
そして、タキの顔面目掛けて拳を振るう。

リュージの拳を避けることなど出来るはずもないタキ。
拳をモロに顔面に受け、地に倒れこむ。

「痛えか？　痛えだろ？　俺に説教垂れるところなんだ。分かったらおとなしくしとけ！」

「暴力に逃げるな！　今、辛いでしょ？　それは自分から逃げてるからだよ」

よろよろと立ち上がりそう言い放つタキ。
この言葉に、リュージの怒りボルテージは更にヒートアップする。

「うるせえ！　てめえに俺の何が分かる？　知ったような口聞いてんじゃねえよ」

リュージはまたタキの顔面を殴る。
しかし、また立ち上がるタキ。

「てめえは相当、持久戦が好きらしいなあ？　ポケモンでは負けたが、これなら負ける気がしねえ。付き合ってやるぜ」

そう言ったりリュージは、更にタキの顔面に殴りかかろうと拳を構える。

その時、タキをかばうようにタキの前に立つユリカの姿が……

「もうやめて！ タキを殴るなら私を殴りなさい！」

「いいぜ。その願い叶えてやるよ」

タキをかばうユリカに殴りかかろうとするリュージ。

しかし、タキをかばうユリカを更にかばうように、残る力を振り絞ってユリカの前に立つタキ。

当然、その拳はユリカではなくタキにヒットする。

「どうして…… タキはボロボロなのよ？ これ以上殴られたら…… 私のことなら大丈夫。慣れてるから。だから、タキは安静に……」

涙を流しながらタキを心配するユリカ。

そんなユリカに、タキはボロボロの顔でニコツと笑う。

「僕は誰も傷つけないんだ。コルトとの約束も守れないしね。僕は大丈夫。だから、泣かないでよユリカ。僕まで悲しくなっちゃう」

二人が話している間、ずっとブツブツと怒っているリュージ。

「なんで倒れねえ……俺の拳は弱いかな？ いや、弱いはずはねえ。じゃあ、なぜ倒れねえ？」

自分でブツブツ言っている間に、怒りは最高潮に。

「なんでなんだよ！ 俺の拳は痛えだろうが？ 凄えだろうが？
なのになぜ倒れねえ？ 俺はてめえにポケモンでも勝てねえ。暴力
でも勝てねえ……何にも勝てねえのかよお！？」

思わず、大声で叫んでしまうリユージ。

その顔は、怒りの叫びというより悲痛の叫びに聞こえた。

「勘違いしてるんだよ。だから自分から逃げてるんだ。勝負は勝ち
負けだけじゃない。ポケモンもそうだよ。当然、勝ち負けもポケモ
ントレーナーとして大事。でも、勝負を楽しみ、ポケモンを愛する
心があれば、どれだけ負けても立派なポケモントレーナーだ。だか
ら逃げないでよ。自分の気持ちからは逃げちゃ駄目だ！」

その言葉がリユージの耳に届いたとき、リユージの動きが止まっ
た。

リユージの心の思い出が甦り、心の整理を始める。

ごめん。ポケモン持ってねえんだ。ごめんな……やった。モンス
ターボールだ。これでみんなと遊べる……全然、捕まらない……や
った！ 捕まえたぞ！ 捕まってくれてありがとな。絶対大事にす
るからなアーボ……

お前のアーボ弱すぎだろ。ああ、すまないすまない。アーボが弱
いんじゃないな。トレーナーが弱いんだ……こんな弱い奴、相手に

してられねえよ。行こうぜ……

ごめんなアーボ。俺が弱いせいで。でも、絶対強くなるから。そんな時まで見捨てないでいてくれよ……

弱いな……弱いわ……弱い……弱い弱い弱い……

大丈夫だアーボ。どんな手を使っても強くなってやる絶対な……

おめでとう。これで君もロケット団の一員だ。しっかり働いてくれたまえ……おめでとう。これで君も幹部に昇格だ。これは名誉なことだぞ？ まあ、君の場合、ポケモンバトルに関してはそれ程、期待してはいない。君自身の腕を見込んでの昇格だ。そのところを勘違いしないようにな……

うるせえ。バトルが弱いことくらい知ってたんだよ。だから俺は自分を鍛えた。それで幹部に昇格した。それだけじゃねえか。いらねえこと言ってんじゃねえ……

どれだけ自分を鍛えても心が晴れねえ。やっぱり俺は……いや、そんなはずはねえ。俺は幹部だ。バトルは弱くても俺自身が強いからいいんだ。でも……

勝負を楽しむ、ポケモンを愛する心があれば、どれだけ負けても立派なポケモントレーナーだ……

うつせえ。餓鬼が一丁前に語ってんじゃねえよ。でも、それが本当なら俺だつて……

リユージの心の整理が終わった。

「本当だな？　なら、俺みたいなバトルが弱い糞野郎でもやり直せるんだな？　てめえの言う、勝負を楽しみ、ポケモンを愛する心があればよお？」

さっきまでの殺気が無くなったリユージ。冷静にタキに話しかける。

「当たり前だよ。それはどんな人にだって持てる心だ。その心を隠す必要なんて無いんだよ！　それに、リユージは弱くなんかない。僕にはそう感じた」

嘘偽りない瞳でそう言うタキ。

「ケッ。お世辞なんていくら言われても嬉しくないぜ。本当にそう思うなら約束しろ。俺がまたここに帰ってきたらポケモンバトルだ。いいな？」

その時、コルトと、警察官のような格好をした女性と、その部下と思われる男達が、大勢部屋に入ってきた。

「みんな無事みたいやな！？　もう安心しい。ジュンサーさん呼んだんや！　さあ、観念しいや毒蛇！」

みんなが無事で安心するコルト。相当、走り回ったようで物凄い汗の量である。

「そうよ。観念しなさい！ もう逃げ道は無いわ！」

ジュンサーがリユージにそう言う。

もう捕まえる準備は万端だ。

「やあ。船が正常に動き出したのに帰ってくるのが遅いから逃げたのかと思ってたぜ。安心しろよ。おとなしく捕まってやる。だが、もうちよつと待ちな。俺はまだ答えを聞いてねえ」

タキの方へ振り向き、そう言うリユージ。

「そんなの考えるまでもなくOKだよ。ただし、素直なリユージならだけどね！」

「ケツ。一言多いぜ。言われずとも約束は守る。さあ、連れて行きな。大サービスで抵抗しないでやるからよお」

こうしてリユージはジュンサーによりヘリコプターで連行された。リユージはもう二度と同じ過ちを繰り返すことはないだろう。最後の最後に素直なポケモンに対する気持ちを取り戻したのだから……

「ボロボロやなあタキ」

コルトがタキに近づき、笑いながらそう言う。

「でしょ？ でも、みんな助かったんだ。そう考えると楽なもんだよ」

タキも同じように笑う。

「言うやないか。よっしゃ。みんな、助かった記念にこいつを胴上げや！」

その言葉に部屋の中にいる客の全員が迷うことなくタキの周りに集まった。

そして、タキを抱え上げ、胴上げの開始である。

「わあ。初めてだよ胴上げ！」

みんな楽しそうにタキを胴上げする。タキも楽しそうに宙を舞う。さっきまでの恐怖が嘘のように。

こうして、サント・アンヌ号事件は幕を閉じた。船も軌道を修正し、長かった航海は、ようやくタマムシシティ前へと到着した。

第二十八回。ユリカ

タmamシシティ。町の中でも施設が多いことが特徴であり、その中でも、町の中心に建つタmamシデパートは知らない人はいないといくくらい有名。

当然、この町にもジムリーダーはいる。そして、ユリカの目的の場所でもある。かなり重要な場所だと言えよう。

そんなタmamシシティにタキとユリカ。そして、コルトの三人が足を踏み入れる。

そう。コルトもタキ達と行動することにしたのだ。

コルトは、サント・アンヌ号の一件で二人のことを気に入ったらしい。断る理由もないのでタキ達は快く承諾した。だから一緒に行動しているということだ。

「これからどないするん？ 早速バッチ獲りつてのもおもしろいと思うけど」

三人の中で明らかに年上のコルトは、リーダーシップを取るかのように早速、二人に問いかけてこれからの行動を決めようと考えてる。

確かにその方法もある。しかし、ここはユリカの目的の場所。

タキがバッチ獲得のためにジム戦に挑戦するより先にユリカの目的を優先するほうがいいんじゃないだろうか。

タキはコルトに、そう答えを返した。

「気にしなくていい。タmamシジムに行けば全てが分かるから……」

何やら緊迫した顔つきでそう言うユリカ。

どうやら、タمامシジムにユリカの目的はありそうだ。

そんなユリカが放つ空気を察した二人は何も言わず頷き、タمامシジムへ足を進める。

タمامシジムの前に立つ三人。

いつもならジムの前に立つとワクワクするタキ。しかし、タمامシジムの前に立つタキにワクワクはない。

それは、自分の側にタمامシジムを見ながら悲しい顔をしているユリカがいるからだ。悲しい気分な人がいる中、自分だけワクワクするなんて出来ない。

こんなに暗い気分で挑むジム戦は、タキにとって初めてだろう。むしろ、ユリカをこんな悲しい気分させるタمامシジムに密かな怒りすら覚えている。

タキは怒りに身を任せタمامシジムに足を踏み入れた。

タمامシジム。そこは、植物の香り漂う自然に囲まれたジム。そして、周りに居るジムの関係者と思われる人達は、全員和服を着ている女性。

タキの想像とは違い、清潔感漂うタمامシジムに少し唖然とした。

唖然として立ち止まっていると、ジムリーダーと思われる女性がタキ達に向かい歩いて来る。

「これはこれは。よくいらつしゃいました。私は、^{わたくし}タمامシジム、ジムリーダーのエリカと申します」

とても丁寧にお辞儀をして挨拶をするエリカに、タキは思わずお辞儀で挨拶を返す。

コルトは何もせず黙っている。ユリカは、やはり悲しそうな顔だ

……

お辞儀をして顔をあげたエリカは、タキの横にいるユリカの存在に気づく。

「あらあら、ユリカさんじゃありませんか。お帰りなさいませ」

ユリカにもタキと同じように丁寧にお辞儀をして挨拶するエリカ。

「ただいま帰りましたエリカお姉様……」

ユリカもエリカにお辞儀をして挨拶を返す。

しかし何を思ったのか、突然、エリカの表情が怒りの表情に変わりユリカの頬をビンタする。

「何も変わってないじゃないですかユリカさん！ お辞儀のときは手は横じゃなくて前！ 私は何のためにユリカさんを外に出したのか分かってのことです！？」

ユリカに怒鳴るエリカ。

それを見てクスクスと聞こえる周りからの笑い声。

表向きは感じる清潔感。しかし、時が流れ、内面が見え始めてくると、そこに清潔感はない。

タキの怒りは最高潮だ。すぐにもエリカに怒鳴るんじゃないかというくらいに……

しかしタキは動かない。タキよりも先にコルトが動いたのだ……

「わいらと出会ったためや。完璧な理由やろ？」

いきなり話に割って入るコルト。

「あなたには関係のないことですわ。ですが一つ言いたい事が……
あなたもいい大人なんですから、人に対する言葉遣いに気をつけるべきでは？」

「そりゃごもつともや。でも、それ以上に心の言葉遣いは大事ちゃうか？」

正に一触即発。場の空気が固まる。

「いいのコルト……悪いのは私だから」

自分のせいでこんな事態になっていることに責任を感じるユリカ。
どうにか場をなだめようと言葉を発する。

そこにタキも割って入る。

「ねえ。僕はジムリーダーのエリカとポケモンバトルをしにきたんだ。ここは口論で争う場所じゃない。それに……口で言っただけ分らない人にはどれだけ言っても分からない」

少し、沈黙が続く中、コルトがタキの眼を見つめて言葉を発する。

「そやなあタキ。わいが馬鹿やった。思いっきりぶつけたれ！」

コルトが口論から引き下がる。

「うん。ぶつけるよ僕達の気持ち。ポケモンで!!」

タキがモンスターボールを一つ取り出す。

「そうですね。失礼しました。しかし、今の私の気分は優れません。早期決着としたいので使用。ポケモンは一体としたいのですがどうでしょうか？」

「いいよ。そのほうがいい」

気分が優れないのはタキ達も同じだ。

こんな気分のジム戦はタキにとって初めてなのだから。

第二十九回。怒りのタマムシジム！ ぶっける。みんなの思い！

エリカの出したポケモン。

タキにはそのポケモンに見覚えがあるように感じた。なんというか、ユリカの持つウツドンにとってもよく似ているのだ。

その感じの正体はポケモン図鑑で調べてみると納得がいく。

名はウツボット。体長1.7m。体重15.5kg。ウツドンの進化系。大きな口から出る蜜の香りで獲物呼び寄せる。

そう。ウツボットはウツドンの進化系なのだ。それは似てるわけである。

そして、タキの出すポケモンは……

「タキ。ヒーロよ。ウツボットは草ポケモン。ヒーロは炎ポケモン。相性がいい」

タキにアドバイスするユリカ。
しかし、タキは首を横に振る。

「どうして？ ヒーロを信じて！」

説得するユリカ。

だが、タキはまた首を横に振る。そして……

「ユリカのウツドンを使わせてくれない？」

タキのその一言で場は騒然となる。

「駄目……ヒーロの方が相性もいいし、実力もある」

当然のように断るユリカ。

ユリカの言うとおりで、ヒーロは炎ポケモンで相性もいい、タキの主力ポケモン。

対してユリカのウツドンはウツボットの進化前でタイプも同じ。この条件なら間違いなくヒーロの方が有利だ。

「それじゃ駄目だよ。言ったでしょ？ 僕達の気持ちをポケモンでぶつけるって。だから一緒に戦おうよ。コルトも口で戦った。僕もトレーナーとして戦う。だからユリカもポケモンと一緒に戦おう？ エリカに言えないこと。全部ポケモンで返しちゃおうよ！」

これはタキの率直な気持ちだ。

みんなで戦いたい。これはもう自分だけの問題じゃない。今から始めるポケモンバトル。みんなの気持ちを込めて戦いたい……

「でも……」

迷うユリカ。

確かに言いたいことはたくさんある。でも、エリカは自分の姉。自分を叱ってきた思い出が甦る。簡単に反抗できるわけがない……

「悩むな姉ちゃん。そんな難しく考えんでええ。姉ちゃんが少しでもエリカに言ったりしたいことあるんやったらタキにポケモン預けないんやったら預けんでええ。自分の心にちよつと聞いてみ？ すぐに答え見つかるわ」

コルトがユリカに温かい言葉をかける。
そんな台詞を言うのはちょっとコルトも恥ずかしいようで照れ笑いだ。

しかし、そんな温かい言葉がユリカにとって、とても助かるものとなった。

落ち着いて自分に聞いてみる。すると、どうしたものだろう。エリカに言ってやりたい色々な言葉が浮かんでくる。もう……答えはでた。

「タキ！ 私……預ける！」

ユリカがタキにウツドンが入ったモンスターボールを投げ渡す。
タキは、そのモンスターボールを受け取り、ユリカにニツコリと微笑んだ。

「こっちで勝手に話を進めたけど、別に反則じゃないよね？」

ジムリーダーであるエリカに確認を取るタキ。

「別によろしいですね。それよりユリカさんは本当にお生意気に……あらやだ。今、関係のないことですわね。それよりあなた。ユリカさんのウツドンさんと私のウツボットさんじゃ戦力に違いがあると思われますが本当によろしいのですね？」

エリカは逆にその方が嬉しいようで、満面の笑みを浮かべながらそう答えを返す。

「うん。驚くよ。気持ちがいっぱい詰まってるからね！」

そして、タキもウツドンを場に出す。

この瞬間。ポケモンバトルスタートの合図がだされた。

ウツドンとウツボット。進化前と進化後。これだけでもかなりの戦力差がある。

なのに、相手はジムリーダー。これはタキにとって大変なバトルとなりそうだ。

しかし、タキにはみんなの気持ちがついている。これはタキにとって最高の原動力であり、最高の戦力だ。

「ウツボットさん。軽く様子見といきましょう。つるのムチです」

ウツボットの頭についているつるでウツドンを攻撃する。

冷静につるのムチをかわすウツドン。そして、ウツドンも同じようにつるのムチで反撃。

「待っていましたわ」

軽く微笑むエリカ。

なんと、ウツドンが伸ばしたつるにウツボットのつるを絡ませたのだ。

「あなたは進化を甘くみていますわ。進化前と進化後……力の差は歴然ですわよ！」

ウツボットがウツドンを空高く持ち上げ力任せに振り回す。

タマムシジムの落ち着いた雰囲気と相反してウツボットの繰り出す技はとても強引で力強い。

そして、力任せにウツドンを壁目掛けて思いっきり振り投げる。

「ウツドン！ つるで、生えている植物につかまるんだ！」

命令を聞いたウツドンは、ジムの中に生えている木の幹につるを絡ませ、勢いを殺す。

そして、逆に木の幹を使い勢いをつけ、ウツボットに向かい自分自身を飛ばす。

思わぬ攻撃にウツボットは対応することが出来ず、勢いのついたウツドンと衝突。大きなダメージを負う。

「あら……中々考えますことね」

少し思い描いていた展開と違い、あまり面白くない様子のエリカ。

「言ったでしょ？ 気持ちがいっぱい詰まってるって。絶対負けない！」

しかし、これで終わるエリカではない。エリカはジムリーダーだ。ポケモンに関して長く精通しているベテラントレーナーだ。

「勝負はここからですわ。見せてあげましょう。ジムリーダーの戦い方を！」

そう言ったエリカがウツボットに命令した技はねむりごな。技の名前から効果は推測できる。

ウツボットの大きな口から出る。その霧状の粉を見て、タキはウツドンとドガースの試合を思い出す。

あのとき、ウツドンはドガースの放った毒ガスを吸い込んだ。

なのでタキは、あの時と同じようにねむりごなも吸い込んでしまえばいいと考えた。

しかし……

「タキ。吸い込んではいけない。眠ってしまう。そうなる……」

ユリカはタキの考えを読んだのか、慌ただしくアドバイスする。

「そうなの？ 危なかったあ。ありがとうユリカ！」

急いで自分の考えを改めるタキ。

ウツドンは粉を吸わないように息を止める。

だが、これがエリカの作戦だった。

「さあ、いつまでもつでしょう。限界まで苦しめておやりなさいウツボットさん！」

その声と同時にウツボットからハッパカッターが繰り出される。ねむりごなを吐き続けながらのハッパカッター。これは、エリカのウツボットだからこそ出来る芸当だろう。

ウツドンは息を止めながら行動しているので、避けるので精一杯。とても苦しそうだ。

このままじゃ敗れるのは時間の問題。タキは考える。

もう時間がない。どうすれば勝てるのか。考えて考える。

すると、一つの案が思いついた。しかし、これはとても危険な賭け。

しかし、やるしかない。それ以外にウツボットに勝つ策が見つからない。

「ウツドン！ ウツボットの大きな口に飛び込め！」

タキの命令は誰もが予想していなかった。

「自分から倒されに来るとは……諦めましたわね！」

エリカは勝利を確信した。

「タキ……私も一緒に戦ってる。でも、私は声をかけてあげられるくらいしかない。頑張ってる……エリカお姉様を倒して！」

ユリカはタキの勝利を願う。

ウツボットはウツドンが口の中に侵入するのを受け入れた。

それはそうだ。ウツボットの口の中は溶解液が……当然、ポケモンバトルで死亡は厳禁なので、溶けない程度に制御することを義務付けされているが、触れれば最後、一撃で終了であろう。

そんな口の中にタキは自ら飛び込ませた。

その訳には、ウツドンしか実現できそうのない。タキオリジナルの必殺技を思いついたからなのだ。

「ウツドン！ ウツボットの口の間に鋭い葉っぱを食い込ませるんだ！」

タキはウツドンのもう一つの特徴を思い出していた。
ウツドンの体の横についている葉っぱはとても鋭いのだ。

体当たりを防ぎ、逆にダメージを与えるほどの鋭さ、もう、これしかないと考えた。

当然、ウツボットは苦しそうな表情を浮かべる。

「ウツドン！ そのまま回転して上昇！」

タキはさらに追い討ちをかけるようにウツドンに命令。
ウツドンは息絶える覚悟で回転する。

ずっと息を止めている状況だ。とてもきつい。これはもう体力勝負だ。

「頑張れウツドン！ ユリカが待ってる。僕達が待ってる。君の勝利を僕達の気持ちで待ってる！」

タキは精一杯ウツドンを励ます。

すると、ウツドンがウツボットの大きな口から飛び出してきた。

口の中を鋭い葉っぱに切られまくったウツボットは戦闘不能。
そして、耐え切ったウツドンは……

「この勝負……引き分けですわね……」

息がもたなかった。目を回して気絶している。

「ウツドン……よく頑張ったわ。エリカお姉様のウツボットと引き分ける……凄いこと」

ユリカがウツドンの下に駆け寄り、気絶しているウツドンに声をかける。

「これって……どうなるの……？」

タキの素朴な疑問。

「おほん。本来なら再試合となるのですが、この試合、私の負けですわ。今まで数々の人とバトルしてきましたが、ウッドンさんにウツボットさんが引き分けるなんて初めてのこと。それもユリカさんのウッドンさんに……本当、初めてつくしですわ」

エリカの主張は、自分の負け宣言。つまり、タキの勝ちということになる。

「ねえ。それって、ユリカのウッドンだから？　なら、納得かいかない。再試合だよ」

理由に納得のいかないタキ。

「あらあら。誤解なさらぬように。私は驚いているのですわ。まさか、ユリカさんがこんなに私に反抗的な行動をとるなんて……決まりには私を倒しておっしゃるもの。本当に驚きですわ」

更に語り続けるエリカ。その顔はなぜか嬉しそうだ。

「それを物語るようなウッドンさんの粘り。本当、親に似るとはよく言ったもので、ウッドンさんまで生意気になってしまつて……本当、悪い子達ですわ」

「なっ？　わいらと出会って正解やったやろ？」

コルトがエリカに対し笑顔で接する。どういつ気の変わりようだろうか。

「おほん。とにかく……この試合は私の負けです。あなた方の気持ちの勝利ですわ」

「僕は……僕自身は勝ったと思ってないから……またいつかバトルしようね！」

「ええ。もちろんですわ」

こうして、タキはレインボーバッヂを手に入れた。

次はセキクシティにジムがあるらしい。コルトがそこには面白い場所がたくさんあると言って張り切っている。タキにとって最高の町なのだそうだ。

そして……

「タキ……コルト……私達。ここでお別れ。私、エリカお姉様の下でまたポケモンマスターを目指す。こう思えたのも全てタキとコルトのおかげ。本当にありがとう」

言いだすのが辛かったのだろう。涙を流しながらそう告げる。

「泣かないでよユリカ。僕達はお別れじゃない。ちょっとした間、離れるだけ。ポケモントレーナーを続けていれば絶対会えるよ。だから……笑おうよ。僕まで悲しくなっちゃう。ほら、コルトも泣かないで！」

タキは精一杯の笑顔でユリカに言葉を返す。

ユリカもそんなタキの笑顔に精一杯の笑顔で返す。

「そんなこと言われてもあかん。こういうのはホンマに弱いねんわい……短い間やったけど泣いてまうわ。分かっとるなエリカ。こんな純粋な子、今度悲しませたりしよったら……」

ユリカとの付き合いが一番短いコルトが最も泣いてしまっている。三十歳の大人とは思えない……

「承知しております。もう、私じゃどうにも出来そうもありませんもの」

エリカもそう約束した。

こうして、ユリカと別れたタキ達。またいつか出会うのだろう。タキがユリカがポケモントレーナーとしてポケモンマスターを目指している限り、それは必然的に……

だからタキは笑った。笑顔でユリカと別れた。いや、一時的に離れたのだ。

しかし……

「うんうん。よう頑張ったなあタキ。ここならもう大丈夫や……姉ちゃんにはバレへんよ」

「うん……」

タキは涙をこらえていた。タマムシジムから離れたタキは涙を流した。

コルトと一緒に涙を流し続けた。

端から見れば男二人で泣き崩れている変な光景。
でも、二人の流す涙は何よりも純粹な涙だ。それは知る人しか分
からない、友情に溢れた涙だ。

第三十回。凄いぞ！ セキチクシティ！

ユリカと離れ、涙も引いた頃、二人はまた歩き出す。
その一歩はユリカと離れた悲しみを乗り越えた証拠だ。

二人が向かうセキチクシティ。前にも言ったが、セキチクシティはタキにとって最高の町というコルト。
どうやらその噂は本当であつたようだ。

セキチクシティ。そこはあらゆる町の中で最も施設の整う町。いや、それはタマムシティには及ばない。言い換えよう。セキチクシティ。そこは……ポケモントレーナーにとつての登竜門……

二人は、そんな町に足を踏み入れた。
いつにもましてコルトがニコニコとしている。それは、タキの喜ぶ顔が見れる確信があるからだ。

「タキ。あれを見てみい」

コルトは新たな町に興奮してキョロキョロするタキに対し、一つの建物を指差した。

「ん？ 何！？」

タキはその指差された建物を見るだけではピンと来ない。だが、これだけコルトが自信を持って勧める町なのだ。当然期待する。

「聞いて驚くなや。そこはポケモントレーナーが通らなあかんとま
で言われるポケモンマスターへの入り口。その名もマスターゲート

！ ポケモンマスター目指すトレーナーは間違いなく通る大会や。
どうや。凄いやる！？」

タキはそのネーミングはどうだろうかと頭にチラツと浮かんだ。
しかし、それ以上にタキは大会という言葉に心震えた。

タキは願う。今すぐその大会に出たいと。
しかし、それはコルトの一言で打ち崩される。

「無理や。まずバツチは五個必要」

「なら、今すぐ取りに行くよ！ 僕はたくさんポケモンバトルがしたいんだ！」

食い下がるタキ。

「タキならそう言うやろな思ってたわ。でもな無理なもんは無理や」

冷たくそう言い放つコルト。

「なんで！？ コルトはなんでそう思うの？」

タキは納得できない。

「そんなムキなんなや。マスターゲートはまだまだ先や。どう考えても無理やろ？」

タキはホツとした。なんだそんな理由か。そう思ってた安心した。
しかし、その安堵感もまたコルトの一言によって潰されることになる。

「後な。上には上がある。タキの目指すポケモンマスター。ポケモン持ってへんわいが言うのは変やけど、ポケモンバトルがしたいだけやったらなれんで？」

タキは何も言い返さない。いや、言い返せない。これだけはつきりと言われてしまったのだ。言い返す言葉がない。

よく考えてみれば、タキは人からはつきりとしたアドバイスをしてもらったことが多い。そして、その度にタキは成長する。

「とまあ、ここまでがマスターゲートの話や。ちょっとへこんだやろ？ それはそれで終わりとして、今からは嬉しい話や。修行やで修行。意味分かるやろ？」

コルトから笑みがこぼれる。どうやらマスターゲートへの秘策のようだ。

「うん。意味は分かるけど……どこでやるの？」

「それはわいに着いてき。これでタキはまだまだ強くなる。マスターゲートがまだまだ先でよかったわ。これで優勝に手が届く！」

意気揚々とそう語るコルト。その言葉は自信に満ちている。

「そんなに凄いんだ……うん。期待できる！」

タキもようやくその気になったようで、急ぎ足でコルトの後を追う。

コルトの秘策とはいったい何なのか。それはコルトにしか分から

ない。

第三十一回。コルトの思惑

コルトが向かった場所。そこはセキシクシティにある一つの施設。施設の前に大きく掲げられてある『マサヤ道場』と書かれた看板。それを見て推測するからに、どうやらポケモン道場のようだ。バトル等も教えてくれるのであろう……

「なんだか凄そうな場所だね……」

その大きな看板に書かれてある力強い文字を見て、そう感じるタキ。

「凄そうやない。凄いんや」

タキの言葉に対し、力強く断言するコルト。

「じゃあ、行こか」

道場の中に足を踏み入れる二人。

そこは、ジムのような作りで、様々なフィールドが用意。そして、たくさんの人の数。

そのたくさんの人の目が全て二人に向けられる。

少しビビるタキ。そして、そんなタキを見て意地悪く微笑むコルト。

すると、恐らく道場の師範である男が一人、二人に近づいてくる。

「なんや、われ等道場破り……コルトはん？」

その男。二人の前に立っていきなり喧嘩を売るようにメンチを切る。

見た目もコルトより若く、どうやら血の気が有り余っているようである。

しかし、コルトがいると確認した途端、一歩引いた。

「相変わらず態度悪いのおマサヤ」

呆れたようにコルトが呟く。

「誰に似た思てはるんですか。でっ、餓鬼連れて何用やコルトはん。もしかして、入門希望でっか？」

明らかに偉そうな男。タキは、心の中でふつつと怒りに燃えていた。

全く話についていけないので、死んでも言葉には出せないのであるが……

「そのもしかしてや。マスターゲートが始まるまででええ。優勝できるレベルまで鍛えたってくれや」

その言葉にマサヤの眼の色が変わる。

「いくらコルトはんでも冗談はいけまへん。その餓鬼、そんな強いんでっか？」

「いや、まだまだや。でもな、素質はある」

まだまだと言われたときは、もう言い返してやろうと考えたタキ

だが、素質はあるという言葉に少し満足してしまい、言葉を発しようとした口を閉じた。

「コルトはんにそこまで言わせるんなら相当やな……分かりましたわ。じゃあ、わたの道場の誰か一人に勝てば入門許しましょ」

明らかに上から優位にニツコリ笑い言葉を発するマサヤ。

タキは心の中で思う。絶対に入門してマサヤを倒してやると。

しかし、マサヤのそんな笑顔はコルトの一言によって吹き飛ばされる。

「それじゃあかん。マサヤ。お前がやれ」

自信満々にそう言うコルト。

タキはこの時、心の中でコルトを祝福した。

「コルトはん……本気でつか？ 素質あるんでっしゃる。将来棒に振りまっせ？」

この時のマサヤの顔は緊迫していた。

どうしてこういう表情をしているのか……それはタキには理解できなかった。

「振らへんよ。むしろ、そっからタキは伸びる。ステッパーはそっからなんや」

コルトの思惑はよく分からない。マサヤの素性・実力はよく分からない。

しかし、そんなタキにも分かることはある。

「ねえ。二人の話からして、僕はマサヤに負けるの?」

キツと睨みながらそう言うタキ。

マサヤはその言葉に少し困惑の表情を見せる。

「そうや。わてには勝てんよ。しかも、ボコボコにされるわ。だからこそや。だからこそ分かんねん。コルトはんの言うてる意味が…… 餓鬼…… あんさんの何が凄いんや?」

「何が凄いかなんて分からないよ。でも、一つ言えることがある。僕の名前は餓鬼じゃない。タキだ」

はつきりとそう言い返すタキ。

マサヤはその言葉に対し、困惑が吹き飛んだような笑いを見せる。

「ハッ! 言うてくれるやんけタキはん。分かりましたわコルトはん。のったりましよ。でも、どうなっても知りまへんで……」

マサヤは道場の門下生に大きな声で声を掛ける。

「ええなあお前等! 今から久しぶりにわてのバトル見せたるわ。よう勉強しいや。でも、もしバトル中に下衆な笑いや私語が聞こえてきてみい。即、この場から消えてもらうで。永遠になあ」

その言葉は、とても厳しい言葉に見えるが、どれだけポケモンバトルを愛しているかということが分かる一言だ。

「じゃあ、始めましょかタキはん。使用ポケモンは一体。これで全てが分かりますわ」

タキは静かに頷いた。

タキは負ける気など更々ない。タキには勝って場をアツと言わせることしか頭がない。

そのはずだった。そのはずだったのだ。しかし、タキは圧倒的に敗れた。

タキのヒーロが、無残にも地に倒れているのだ。マサヤのバリヤードというポケモンによって……

コルトは頭の中で二人の差を分析する。

マサヤの戦術は理論的でありながら勢いもある。最も、ポケモンマスター向けの戦術。しかし、それはポケモンを愛する戦術とはいえない。ポケモンバトルを愛する戦術なのだと。

タキのバトル戦術はポケモンと共に戦う戦術。確かにタキはポケモンを愛している。ポケモンバトルを愛している。しかし、それはポケモンを愛しているからポケモンバトルを愛しているのだ。それは悪いことではない。しかし、ポケモンマスター向けのバトルではない……それだけではいけない。

「どうやタキはん。宣言通りやったやろ」

自信満々にそう言うマサヤ。

しかし、そんなマサヤの言葉にタキは何も言わない。

それ程、マサヤとのバトルは圧倒的だった。正直、タキはマサヤのバトルで何もできなかった。何も残せなかった……

「答えるやタキはん…… 答えるやタキ！ なんでもええから答えんかい！」

マサヤはタキに大きな声で問いかける。

「マサヤ……」

タキが小さく呟く。

「なんや？ もっとデカイ声で言えや！ わてに伝わるくらい大きな声で叫ばんかい！」

「僕……強くなれるかな！？ 今以上に……なんでだろう。負けたのに……心の中ではマサヤに勝つ気持ちで挑んで負けたのに……まだまだポケモンバトルがしたい。今まで以上にポケモンバトルがしたい。この先でも通用するくらい、僕は強くなれるかな！？」

タキはマサヤよりも更に大きな声で叫んだ。

その言葉に、マサヤは大きく微笑んだ。

「何言うてはりますねん。わてやぞ……このマサヤ様やぞ。強くなれるわ。任せとけ。マスターゲート優勝やる！？ 優勝や。タキはん。あんさんなら優勝や！」

その言葉に、さっきまで啞然とした顔で見ていたマサヤの門下生達が総立ちで拍手した。

当然それは、タキに向けての拍手だ。

「見てみい。わての門下生も祝福しとるわ。ほなタキはん。行くで！」

この瞬間。タキはマサヤに認められた。

「マサヤ。どうやタキは？」

コルトのその質問はもう、確信に満ち溢れていた。

「お望み通りの返答ですんまへん。最高や！ 確かにええ素質もつとる」

「お前はそれに気づいた。流石やな！ お前も最高や！」

コルトの、マサヤのテンションは最高潮。

「コルトはんに言われたら照れますわ。では、コルトはんが認めた素質……このマサヤが預からせてもらいます！」

マサヤがコルトに深々と頭を下げる。

「こちらこそよろしく頼むわ！」

コルトもマサヤに対し深々と頭を下げる。

そして……

「コルト。ここに連れて来てくれてありがとう。そしてマサヤ。よろしく願います！」

タキも深々と頭を下げる。

そしてこれから、マサヤによるポケモン修行が始まる。

第三十二回。セキチクジム 不思議な違和感

時は流れ、マスターゲート二日前。

これでタキの修行は終わり。そのため、コルトがタキを迎えに来る。

コルトは楽しみだった。タキがどれ程強くなっているのか。いや、コルトの楽しみはそれもあるがもう一つある。それはとても残酷であり、成長への最大の第一歩……

「あつ。コルト！」

タキが道場に入ってきたコルトに気づき歩み寄る。

「おう。久しぶりやなあ。どうや調子は？」

笑顔でタキを迎えるコルト。

「完璧や。思った以上や。安心してもらってええでっせコルトはん。タキはんは殻破りますわ」

「ほんまか。そりやええこと聞いたわ」

二人の会話にやっぱりついていけないタキ。
しかし、内容的に褒められていると感じたので嬉しいようだ。

「じゃあ、わいら行くわ。五個目のバッチとらなあかんからな」

コルトがマサヤの下を去ろうとする。

しかし、それをマサヤは止める。

「ちょっと待ちいなコルトはん。一つだけ宣言させてもらいますわ。わては今回のマスターリーグ出場しようと決めたんですわ」

この瞬間。コルトの、タキの眼がマサヤに向く。

「本当！？　じゃあ、僕はまたマサヤとバトルできるの！？」

喜ぶタキ。

「それはどういう風の吹き回しやマサヤ」

緊迫するコルト。

「単純な理由ですわ。ポケモンバトルがやりたなった。これ以上の理由はないでっしゃろ？」

この言葉にタキは笑った。コルトが笑った。自分自身で言葉を発したマサヤも笑った。

その言葉は本当にその通りで、ポケモンバトルがしたいからポケモンバトルの大会に出場する。言い返せるはずがない。

「ほならタキはん。マスターゲートで会いましょ！　早く戦いたいもんですなあ」

「うん！　次は負けないから！」

「ハッ！　期待してますわ。そうや、忘れたらあかんがな。タキはんに渡したいもんあんねん」

マサヤがタキにモンスターボールを一つ手渡す。

「これは？」

いきなりモンスターボールを手渡されてもどうしたらいいかわからないタキ。

「わての道場の卒業記念や！ このモンスターボールにはナッシーっていうモンスターが入っとる。使ったってくれ」

「うん！ 大切にするよ。ありがとうマサヤ！」

タキとマサヤはガッチリと握手して別れた。
そしてまた、タキのポケモンが増えた。

しかし、そのためにはセキチクジムのジムリーダーを倒して五個目のバッチを手に入れなければいけない。二人は早速、セキチクジムへと向かった。

ちなみに、タキは修行によりヒーロ（リザード）がリザードンに、ロッキー（イシツブテ）がゴローンに。そして、ナッシーの名前は、名前自体があだ名っぽいのでナッシーのままとなった。

セキチクジム戦。タキは驚いた。これ程自分が強くなっているなんて。

こんなジム戦は初めてだ。これ程までに圧倒的なジム戦は初めてだったのだ。

タキは五個目のバッチ、ピンクバッチを手に入れた。

しかし、いつもならとても嬉しいはずなのにタキはどうもしくりこない。

いつもなら楽しいはずのポケモンバトルがなぜか楽しくない。自分とポケモンが繋がっている気がしない。今までこんな気持ちにはならなかったのに……

なぜなのだろう。自分は絶対に強くなっているはずなのに……タキの頭が疑問と困惑でいっぱいになる。

しかし、こんなにタキが困っているのに、コルトはニヤニヤとした表情を見せる。

いったいコルトの思惑は何なのか。それはまだ分からない……

そして、タキがこんな状況の中、マスターゲートが行われる会場へ向かわなければならぬ。マスターゲートはもう始まってしまっているのだ。タキの疑問と困惑が吹き飛ぶまで待ってなどくれない。

第三十三回。マスターゲート開幕直前！

マスターゲート。それは、Aブロック会場。Bブロック会場。そして、決勝会場の三つの会場で構成される大会。

出場者は、一回大会が開催される毎に五十名以上になるといわれ、予選により十六名に絞られる。

Aブロック八名。Bブロック八名。そして、決勝会場でAブロックの優勝者とBブロックの優勝者でバトルするのだ。

タキは現在予選を終えたところだ。

ちなみに、マスターゲート出場の判定を行うのはポケモンマスターへの最後の壁といわれる四天王四人。ジムリーダー八人の計十二人。

その十二人の判定でタキの運命が決まる。

五十名以上の人数が参加する中、選ばれる十六名。もう既に戦いは始まっているのだ。

「どうやったタキ？」

予選を終えたタキを出迎えるコルト。

「うん……なんとか……」

セキチクジム戦以来、元気のないタキ。

当然、コルトへの返事にも元気が見えない。

「元気だせやタキ。とりあえず予選の結果はすぐにはでえへん。気持ち落ち着かせてゆっくり待とうや」

タキを元気付けようとするコルト。

しかし、そんな言葉を発するコルトだが、やはり表情はニヤニヤした笑みに満ちていた。

その頃、予選の結果を記録したテープが審査員十二名の下に送られる。

当然、ポケモンを愛し、ポケモンバトルを愛し、楽しさに満ちていたタキとバトルしたジムリーダーにも、そのテープは送られる。

「何があつたんだタキ。あのときのような熱さが感じられない……だが……」

「確かに凄く強くなってる。でも、今のタキになら私は負ける気がしない……」

「オー。ボーイはスランプみたいネ。でも、ミーには見えるネ。ボーイはまだまだ輝いてるネ」

「本当にお強い。ですが、少し説教が必要のようですね」

中にはタキを外そうと考える者もいた。しかし、タキは強かった。四人のジムリーダー……いや、十二人の審査員の眼から見てもタキには可能性があつた。その可能性を……

「タキ！ 合格や！ 本選出場や！」

声を弾ませてタキの下に走り寄るコルト。

その可能性に十二人の審査員は賭けた。そして、四人のジムリー

ダーは知っているのだ。ポケモンを愛し、ポケモンバトルを愛し、楽しむタキの姿を。

とにかく一つの事実が確定した。
タキ。マスタートレート出場決定！

第三十四回。マスターゲート開幕！

マスターゲート出場が決定したタキ。

タキはAブロック会場にてバトルすることとなる。

ちなみに、マサヤはBブロック会場にてバトルすることとなったようだ。二人が戦うとすれば決勝会場での優勝決定戦。とてもドラマチックである。

だが、マスターゲート出場が決まり、会場へ足を運んだ今でもタキのテンションは上がらない。

そして、その状態のまま第一回戦へ進むこととなる。

「無理せんと頑張つてきい。わいはタキに笑顔が戻ることに信じとるで」

「うん。ありがと……」

コルトが優しい言葉でタキをバトルフィールドへ送り出す。

しかし、やはりコルトは不思議なニヤニヤとした表情だ。言葉では信じていると発言しているコルトだが、内心では確信していると思っているとみて間違いはないだろう。ただ、根拠は分からない……

バトルフィールドに移動するタキ。

タキの移動するバトルフィールドはAブロック会場のバトルフィールドー。バトルフィールドは四までである。

ただし、バトルフィールド自体には何の変化もなく、Aブロック中の第四ブロックまでの区別づけのためにそう称しているのだ。つまり、タキは第一回戦の第一ブロックなのである。

「それでは第一回戦、第一ブロック。バッチ数五！ タキ選手の入場です！」

実況アナウンスにより入場を告げられるタキ。生まれて初めての経験だ。

実況アナウンスの後、バトルフィールドに入場したタキは、あまりの雰囲気にもまれそうになる。

タキ達はイベントのメイン。タキ達、ポケモントレーナーの試合を見るために会場に足を運ぶたくさんの客達。

タキが入場するだけで歓声を上げる客達。当然、こんなことは初めてのこと。

いつもは有名人を会場、もしくはテレビで見ている存在だったのに、急に自分が有名人になり、自分は見られる存在になった。そんな感覚に陥っている。

バトルフィールドに入り、トレーナーゾーン。つまり、ポケモントレーナーの立ち位置。

そこに移動する足が重い。目の先に見えるのにすごく遠い。やつとの思いで辿りついたと思ったならまた歓声上がる。

こんなことで大丈夫なのだろうか。落ち込んでいた心が更に落ち込む。

「続いて、バッチ数六！ マツリ選手の入場です！」

……どういふことなのだろう。実況アナウンスの音が響き数分。マツリが入場してくる気配がない。会場全体の歓声がざわめきに変

わる。

この場合、入場のアナウンスが告げられて五分以内に入場しないと試合放棄とみなし失格になる。

会場全体。そして、タキ自身としても、この勝ち方は望ましくない。

更に時は流れ、失格まで残り一分となった頃のことだ。

「ん！？ 一人……いや、二人です。二人入場してきます！」

「うおおおおい！ ずまねえ。おぐれちまったがあ！？」

大きな声と共に入場する驚くほどのがたいのいい男。そして、それを止めるように入場する女性。

恐らく……いや、間違いなく男はマツリであろう。「冗談でこれほどの入場はできない……」

マツリと共に現れた女性は案内役のお姉さん。

お姉さんは必死でマツリのとる行動を止めている。それは、とてもまともな判断であろう。

なんと、マツリは自分より遥かに大きな岩を抱えて入場してきたのだ。

いったい会場に何をしにきたのか分からない入場で、会場は違う意味で盛り上がりを見せる。

「マツリ選手！ これは一体！？」

不思議に思った実況がマツリに大きな岩の意味を問う。

「これがあ？ 普通ふつうの入場じゃつまんねえと思っでなあ。それより、遅おくれてすまんがった！」

マツリが会場全体に深々と頭を下げる。
行動の割に礼儀はしつかりとしているようだ。

「色々つまねえなあ。ごごは一つ、おらあのパフォーマンスで言いつごなしにしでぐれると嬉しい」

大きな岩を抱えて入場することがパフォーマンスだと思っていたタキは、まだあるんだと苦笑いになる。確かに、自分よりも遥かに大きな岩を抱えてくるだけで十分パフォーマンスだ……

「それじゃあ行くぞお！ カイリキー！」

マツリが出した新しいポケモン。タキは急いでポケモン図鑑を取り出す。

名はカイリキー。体長1.6m。体重130.0kg。四本の腕から繰り出される一撃は、どんな相手でも瀕死に追い込むといわれている。考えるよりも先に手が出るようだ。

マツリはカイリキーを場に出し、大きな岩を思いっきり上に振り投げる。

その振り上げられた岩が落ちてくるその一瞬の間に、カイリキーの四本の腕が激しく岩にぶちかまされる。

なんと、そのぶちかましで粉々に砕けたのだ。カイリキーよりもずっと大きな岩を……振り上げられて落ちてくるその一瞬の間に粉

々に砕いたのだ。

これには、会場からも熱い声援がおくられる。

「どうもありがとう！ どうもありがとう！」

マツリも満足気に声援に答える。

「この人……凄い！」

このパフォーマンスに、落ち込んでいたタキも徐々に元気が回復してきた。

いくら落ち込んでいても燃えてしまうのだ。今のパフォーマンスを見ても、マツリというトレーナーは間違いなく強い。そんなマツリと今から戦うとなるといやでも燃えてきてしまう。

「ずまねえずまねえ。待たせじまっだなあ。おらあマツリ。よろしく頼みばす^{だの}！」

丁寧にあ挨拶するマツリ。

「ううん。いいパフォーマンスだったよ！ 僕はタキ。こちらこそよろしくね！」

「そりや嬉しい。わざわざ持ってきた甲斐があっだつてもんだ！」

ガッチリと握手を交わす二人。

そしていよいよ……

「さて！ 色々ありましたが、第一回戦、第一ブロック。いよいよバトル開始です！」

実況アナウンスの声と共にタキVSマツリのバトルが開始された。

第三十四回。マスタートゲート開幕！（後書き）

ドラゴンボールの天下一武道会に憧れた。幽遊 白書の暗黒武術会に憧れた。月下の棋士のA級順位戦に憧れた。

だから自分も何かしら大会を開催しようと思い、作品を考えた。つまり、このマスタートゲートがこの作品の原点です。ようやく開幕！

第三十五回。マスターゲート第一回戦。タキVSマツリ

マスターゲートの試合形式。使用ポケモンは三体。一つの決着がつくことのポケモン交代は可。先に三体のポケモンを倒したトレーナーの勝利。

バトル開始の合図とともに二人はポケモンを場に出す。

タキの出したポケモンはロッキー。マツリの出したポケモンは、長い足が目立つポケモンだ。

早速タキはポケモン図鑑で、その足の長いポケモンを調べる。

名はサウムラー。体長1.5m。体重49.8kg。長い足はバネのように伸縮し、最大二倍の長さまで伸びる。

どうやら、サウムラーは足技重視のポケモンのようだ。

「それでは、ゴローンVSサウムラー。バトル開始！」

審判の声とともに動き出すトレーナーとポケモン達。まず攻撃を仕掛けたのはサウムラー。

「ザウムラー！ 思いつぎに蹴り上げろお！」

サウムラーが勢いよく繰りだす長い足がロッキーに向けて飛ぶ。

「ロッキー。冷静に避けて」

サウムラーが繰り出す蹴りを冷静に避けるロッキー。そして……

「やるなあ。もういつだろういつでみよう!」

もう一度同じ蹴りを指示するマツリ。

だが、これをタキは待っていた。

「ロッキー。サウムラーが足を上げる瞬間に転がる」

タキはマサヤとの修行で、ポケモンの弱点を見つけることが上手くなった。

サウムラーの場合、その二倍に伸びる足がそうだ。

確かに足が二倍に伸びるのは強力だが、その分自分の隙も大きくなる。タキはその一瞬を狙ったのだ。

タキの指示でロッキーが勢いよくサウムラーに向け転がる。

だが……

「甘え甘え! サウムラー! 軸足じくそくを利用してバネのように飛び上がれえ!」

指示を受けたサウムラーが軸足をバネにして空へ飛び上がる。

無常にも転がるロッキーは、サウムラーの真下を潜り抜けていく。

「ザウムラー! 着地ちやくちと同時に飛び蹴り!」

サウムラーは、着地と同時にそのバネを利用して大きく飛び上が

り、ロッキーに向け飛び蹴りを放つ。

これには、転がり終わりの反動が残るロッキーには反応できず、サウムラーの飛び蹴りをモロに受ける。これは大ダメージ。

更にサウムラーが追撃しようとしたその時だ。

「攻撃止めだあ！」と言うマツリの声が響き渡る。

いきなりのこの言葉に騒然とする会場。

「どういうことでしょうマツリ選手！ バトル中に攻撃を放棄したあ！」

当然、こんなこと前代未聞である。もしもこれが情からの行動だとしたら、それはお門違いで、それほどまでに無様で侮辱的な行動はない。

「タキ。おめえ、無理なんですね。トレーナーが苦しい時は、ポケモンだって苦しい。苦しい時は元氣もでねえ」

マツリは少々怒り口調でそう語る。

しかし、会場の観客は、なぜマツリが怒っているのかイマイチ分からなかった。

いい戦いではないか。どちらも全力でバトルしてるいい戦いではないか。会場はそういう空気に満ちていた。

だが、その空気はマツリの一言で吹き飛ぶ。

「ポケモンが泣いでる。泣がせちゃいげねえよ。トレーナーとして、ポケモンは泣がせちゃいげねえ」

会場が一気に静まる。

ポケモンを知る者にとって、この言葉はとても重く大きい……

「タキ。おらあはおめえの事ことを何にも知らねえ。でも言わぜでぐれ。タキはタキのやりだいにやれ。それが最善じゃないとしても……
……楽しくなぐっちゃ苦しい……自分自身もポケモンも……絶対ぜったい苦しい」

静まり返る会場に、マツリの思いが響き渡る。
その思いにタキは……

「僕が元気になったら……僕のポケモン達はまた笑ってくれるかな……?」

マツリの精一杯の思いに答えるように、タキもまた精一杯の思いで答えを返す。

「ああ。間違まちがいねえ」

さっきまで怒り口調だったマツリが、優しく微笑みながらそう言う。

この言葉により、タキの心は完全に晴れた。

何だか凄くいい気分だ。さっきまでは自分でもビックリするくらい自分の体は重かった。

なのに、今は凄く軽い。ビュンビュン走れ回れそうなくらい軽い。自然と溢れ出てくる笑顔と共に走り回るととても気持ちいいことだらう。

そんな気持ちをバトルで燃やす……タキ。完全復活！

「ごめんマサヤ！ マサヤとの修行……無駄になっちゃうかもしれ

ない。でも、それでも僕は僕の好きなようにバトルする。だって……それが一番楽しいから！」

タキが抑えきれないような声で叫ぶ。

そうだ。タキにはポケモンの弱点を見つける目なんて、自分だけで全てを考えて行動する頭なんていない。

タキには、ポケモンを信じ、ポケモンを愛し、ポケモンと共に行動しバトルする。そんな心があればそれでいい。

「いい笑顔だ。ポケモンも笑ってる。となれば仕切り直し……いや、バトル開始だ。さあ、バトル開始の声をあげてくれえ！」

マツリものってきたようで、さっきまでの怒り口調が嘘のような笑顔だ。

それと同時に、会場の興奮も最高潮。バトル再開……いや、バトル開始には絶好の空気である。

「ゴローンVSサウムラー。バトル開始！」

審判も興奮してきたのか、自ずと声も大きくなる。

タキはとても嬉しかった。楽しかった。

久しぶりに自分とポケモンが繋がっているような感覚がした。

バトルが楽しい。ポケモンバトルが凄く楽しい。

やっぱりこうでなければ。もし、この選択が間違いだとしても、そう感じなければ……

「サウムラー。戦闘不能！」

タキのロッキーがマツリのサウムラーに打ち勝った。
この瞬間。圧倒的不利だったこのバトルが、一気に有利に変わった。

「きよった。一回戦からきよった。ラッキーや。一回戦からこんなトレーナーと当たれるとは思わなかった」

観客としてタキを見守るコルトが思わずそう呟く。

「タキはもう立派なトレーナーや。自分のスタイルを完璧に崩されて、そこから自分自身のスタイルを完璧に見つけた。こうなったら強いでえ。もう何事にも迷わへん。それだけの自信が生まれたはずや……でもなあ……」

人の目も気にしないくらいに興奮して一人でブツブツと喋っているコルトだが、一つ大きな不安があった。

「問題はマツリに勝てるかどうかやな……」

「タキ選手。ポケモンの交代を行いますか？」

この勝負は一つの決着がつくことに交代ができる。
つまり、タキは傷ついているロッキーを一時的にモンスターボールの中で休ませることができるのだ。

ロッキーはサワムラーとのバトルでボロボロに傷ついている。
当然、交代を選択する。

するとそのときだ。

（タキ。おかえり！）

タキがロッキーをモンスターボールに戻そうとモンスターボールを取り出したとき、タキの耳に聞こえたその言葉。

それは、幻聴かもしれないし気持ちの問題かもしれない。
だが、これが自分のポケモン達の声だと思うと自然と笑顔が溢れてくる。元気が出てくる。

タキは改めて感じた。自分はこれだけポケモン達に元気をもらってるんだから、自分もポケモン達に精一杯の元気をあげないといけないと。

そのためにはもっともっとポケモンを愛そう。タキは、そう心に誓った。

第三十六回。熱く楽しくバトルバトル！

タキのポケモン交代で出したポケモンは、マサヤから貰ったナツシー。

対して、マツリが出したポケモンは、何やら豚のような猿のような……区別しにくいポケモンだ。

名はオコリザル。体長1,0m。体重32,0kg。常に額に血管が浮き出ており、名前の通り、よく怒るポケモン。

なんだかとても危険なポケモンである。

「ナツシーVSオコリザル。バトル開始！」

……動かない。ロッキーとサウムラーの試合の時はよく動いていた。

だが、この試合、全く動きが見えない。更に奇妙なのは……

「行くんだナツシー！」

「ナーッシ……」

ケタケタと不気味な笑みを見せて動かないナツシー。

タキの命令など糞食らえといった様子だ。

「やめろ……！^{まったく}全く……いづになっただら素直になつてくれんだ？」

「ブキー！ ブキー！」

マツリ側のオコリザルも命令など糞食らえといった様子で、意味

の分からない暴れまわりを見せている。

すると、実のような三つ顔のあるナツシーの一つが、口から種をオコリザルに向けて放つ。

その種は、オコリザルの目の前で爆発。驚くオコリザルを見て、またケタケタと不気味な笑みを見せるナツシー。どうやら、かなりのイタズラ好きのようだ。

「ブ……ブキー！」

オコリザルの標的は決まった。

常に体に溜めているストレスを爆発させる標的……それは、ナツシー！

ブンブン腕を振り回して向かってくるオコリザルに対し、ナツシーは、そのやしの木のような体とは思えないほどのジャンプを見せ、オコリザルを踏みつけにかかる。

だが、予想通り身軽なオコリザル。ナツシーの踏みつけを軽々と返し、さっきのお返しにとナツシーの顔の一つに怒りのパンチを浴びせる。

「ナツ……ナ……ッシー……！」

さっきまでのケタケタ顔が消え、怒りの顔に変わるナツシー。

そして、この二体のポケモンは大暴れのバトルに……まるでチンピラの喧嘩である。

「懐かしいなあ。昔のヒーロみたいで」

今のナツシーの暴れっぷりを見て、全く命令を聞かなかった頃のヒーロを思い出し懐かしむタキ。

「どうじたタキ。寂しいが？」

「ううん。それがそうでもないんだ。この試合を見てたら、どつちのポケモンも凄い生き活きしてて……こっちまで燃えてきちゃう！」

その言葉にクスツと笑うマツリ。

「だよなあ。おらあもそう思う。こういう暴れん坊がいでぐれないと、トレーナーとしてなんだが寂しくなるっでもんだ」

会話を交わしながら二体の試合を見守る二人。

戦いに指示を出すのもトレーナーの仕事だが、指示を聞くとうしないポケモンを温かく見守ることも同じくトレーナーの仕事だ。

そして……

「おっと！ 倒れましたナツシー！ もう起き上がれないか！？」

地に倒れこむナツシー。

どうやら、大暴れのチンピラの喧嘩に勝ったのはオコリザルのようだ。

いや……

「ナ……ッシシシシ！」

とても奇妙。地に倒れこむナツシーが不気味な笑いを見せる。

それはもう、会場全体が最後の悪あがきだと思った。最後まで不気味で意地悪いポケモンだと思った。だが、ナッシーはそれだけじゃ終わらない。

「こ……これは……大爆発!？」

不気味な笑いを見せたナッシーの周りが爆発に包まれる。

当然、その爆発はオコリザルを巻き込み、オコリザルは目をクルクル回しながら地に倒れる。完全に戦闘不能だ。

爆発を起こしたナッシー本人も爆発に巻き込まれる。そして、オコリザルと同様に目をクルクル回し戦闘不能。

大爆発。それは、自分を犠牲にし、相手に攻撃する最終手段のよきなもの。

「なんでいう負けず嫌い……………いいポケモンだなあ!」

マツリが拍手で、敗北が確定したと思われた最後の最後で大爆発を使用したナッシーを褒め称えた。

ナッシーの不気味な意地悪さは最後の最後に大きな評価を得た。これはある意味大きな武器である。

「ナッシー。オコリザル。共に戦闘不能!」

これでタキの残りは手負いのロッキーとヒーロ。
マツリは残り一体となった。

手負いのロッキーを使っても勝てるとは思えない。
実質上、一体同士の対決。

そんな状況もあり、タキはヒーロを場に出す。

マツリは当然……

「いぐぞカイリキー！ おらぁ達ならいげる！」

あの大きな岩を一瞬で粉々に砕いたカイリキーを場に出す。
これこそ正にエース対決である。

「いくよヒーロ……勝つよヒーロ！」

トレーナーとポケモンが放つ、独特な緊張感に包まれる会場。
そして……

「リザードンVSカイリキー。バトル開始！」

まず先手を仕掛けるのはヒーロ。

リザードから進化して生えた大きな羽を利用して空中へ飛び、火炎放射を放つ。

その火炎放射はとても強力な炎で、目で見ても、リザードの火炎放射よりも威力があることが分かる。

だが……カイリキーには通用しない。

カイリキーは、その四本の腕を素早く器用に動かし、自分の腕の周りに風を作る。

そして、その風を利用して火炎放射を受け流し……ダメージは無し！

「効がねえなあ。今度はごっぢからいぐぞー！」

そう言つと、地面を殴るカイリキー。

そして、そこから生まれた、割れた地面の一つの塊をヒーロに向けてぶん投げる。

「そんなの当たらないよ！」

ヒーロは軽く、カイリキーが投げた塊を交わす。

だが……

「そんなことが分がつでる。むしろ……それが狙いだあ！」

そう。ここまでは全てマツリの計算通り。

「タキ。この勝負もらつた。もう、ヒーロはカイリキーの間合いの
なが中だ！」

マツリは一瞬の隙が欲しかった。

ヒーロに近づける一瞬の隙を。それさえあれば……

「離れるヒーロ！」

慌てて命令するタキ。

「無駄だあ。カイリキー。ぶちかませ！」

離れようとするヒーロに向かい、カイリキーの拳がぶちかまされる。

そのスピードは離れようとするヒーロを確実に捉える。

その拳の實力はもう知つての通り。

大ダメージは避けられない。

地に倒れこむヒーロ。

「終わりだ。おらあのカイリキーの拳食^ぐらっちゃあ立でねえよ」

フィニッシュ宣言するマツリ。

「立つんだヒーロ！ ヒーロの力はこんなもんじゃない。それは僕が一番知ってる！」

それでも諦めないタキ。

「グ……グオオオオ！」

突然、大声で声を上げるヒーロ。
そして……

「いいねえ。久しぶりに立ちあがった奴^{やつ}を見だ！」

自分のカイリキーの拳を受け、立ち上がったヒーロに、何故か嬉しそうなマツリ。

「カイリキー！ もう、終わりの時間^{じかん}だ！ 決め^ぎでやれええ！」

マツリはカイリキーにもう一度、拳をぶつかますように命令する。
それに対しタキは……

「もう避けようとしちゃ駄目だ！ 受けきらなくちゃ……避けてちゃ勝利は見えてこない！」

避けずに受けてくれと命令する。

タキもヒーロも……覚悟を決める！

ぶちかまされるカイリキーの拳。

そして、それを避けずに全て体で受け止めるヒーロ。

カイリキーの拳が止まった瞬間。マツリは勝利を確信した。

マツリは自分のカイリキーの力に絶対の自信を持つ。それを二発も受けきれぬポケモンなんて……

「そんなポケモンいるっでのか？ いや、そんなはずねえ！ 倒れ
るヒーロ！」
だあ

必死にそう叫ぶマツリに、ヒーロは軽く微笑んだ。
いや、マツリにはそう感じた。

そして、カイリキーを掴み、上空へ飛び去っていくヒーロ。
ヒーロが何をしようとしているのか、タキにも分からない。

「ハハ！ そうが。そうがヒーロ！ そうだよなあ！ 受けきれな
ぐちゃいげねえもんなあ！ 勝利が見えてごねえもんなあ！ こり
やあ、おらあの負けだあ！ タキとヒーロ。おらあ。感動した！」

大声でそんな言葉を放つマツリだが、タキは返答しようとしな
い。タキは見守る。ヒーロが何をしようとしているのか。それは分か
らない。

だが、自分が見守ることが少しでもヒーロの力になれば。そんな
気持ちでヒーロを見守る。

その頃、ヒーロは遙か上空でピタッと止まった。
そして、カイリキーを掴みながらグルグルと回転しだした。

「こ……これは。地球投げ！？ 地球投げです。皆さんには見えてこないでしょうか！ リザードンがグルグル回るその合間に見える球体を。そして、その球体が美しく綺麗な地球に！ 皆さんにも見えるでしょう！」

興奮する実況。それほどまでに美しい技なのだ。

言い忘れていたが、このポケモンの世界の惑星的名称も地球である。

地球投げ。グルグルと回った遠心力で急降下。

遙か上空から急降下で地面に叩きつけるその技は、まさに超必殺技！

「カイリキー戦闘不能！ マツリ選手の手持ちポケモン0。これにより、勝者。タキ選手！」

タキ。第二回戦進出決定！

「いやあ。感動した！ 楽しいバトルをありがどな！」

マツリがタキに握手を求める。

「ありがと！ マツリは最高のトレーナーだった。僕はマツリのお陰で元気になった。そして、これだけ熱くて楽しいバトルができた！」

タキも喜んでマツリの握手に応じる。

その瞬間。会場からは大きな拍手と声援が送られる。
タキとマツリの熱くて楽しいバトル。それは、会場にも伝わった。

「そうだ。タキ。これを受け取^どつで欲しい」

マツリはタキにモンスターボールを一つ手渡す。

「こ……これは？」

タキはつい最近同じような経験をしたので薄々は感づいている。

「おらあのポケモンだ。エビワラーっていうポケモンが入^どつでる。
使^どつてやつてくれ」

確かに嬉しい願いだ。だが、そんな簡単には受け取れない。

「受け取^どつてくれよお。おらあのエビワラーがそう望^どんでんだ。さ
つきのバトルを見でな。ポケモンと別^{わが}れるのはトレーナーとして辛
いことだけど、ポケモンがそう望^どんでる以上、ポケモンの望^どみを優
先してやりでえ。トレーナーとしてでな」

そう言われると受け取らないわけにはいかない。

タキは嬉しかった。またポケモンが増える。自分の愛せるポケモ
ンがまた……

「ありがとマツリ！ 大切にに使わせてもらっよう！」

モンスターボールを受け取るタキ。

「ああ。まだバトルしような。タキとのバトル。最高さいこうに楽しかった。
おらあ。満足だ！」

「うん！ またしよう！」

ニツコリと笑う二人。

その二人の笑顔は、ポケモンバトルを体感しないと味わえない。
そんな笑顔だった。

こうしてマスターゲート第一回戦。終了！

第三十七回。懐かしき再開　くもう一つの第一回戦く

タキがマツリと出会う丁度その時まで時間は遡る。さかのぼ

マスターゲートのルール上、第一回戦、第四ブロックまであるこの戦いは、全て同時に行われる。

その内の第二ブロック。すなわち、第二回戦でのタキとの対戦相手になる二人の対決。ここでドラマは生まれた。

「第一回戦、第二ブロック。バッチ数五。ユリカ選手の入場です」

実況アナウンスにより入場を告げられたのはユリカ。

ユリカはエリカの下で一生懸命に修行した。それは、タキ達のお陰でポケモンマスターになろうと火がついたから。そして、エリカを超えたいという思いから、まあ、この思いは前々からだったのであるが……

そして、ユリカは、自分の思いを超えた。ユリカはエリカを超えたのだ。

前々から持っていた四つのバッチと、エリカの持つレインボーバッチを合わせると五つ。マスターゲートに出場する資格。そして実力は十分にある。

「続いて、こちらにもバッチ数五。カケオ選手の入場です」

カケオ。覚えているだろうか。ニビシティからハナダシティを繋ぐオツキミ山の中で通路を遮るように座り、タキとユリカを困らせたあのカケオである。

カケオは、あのバトルの後から初心に戻り、何の文句も言わずポケモンと触れ合い、ポケモンバトルを繰り返してきた。

そして遂に、カケオは五つ目のバッチを手に入れ、マスターゲートへ挑戦した。

だが、その時の審査。正直、マスターゲート本選へ進める実力ではないと皆が判断した。だが、それと同時に皆は同じ感覚を感じ取った。

実力ではない何かにとりつかれている。カケオはきっといい意味でのダークホースになる。審査員達はその思いでカケオの本選出場を決めた。

そして、カケオがここまでこれたのもユリカのお陰だ。あの時、カケオの心はパンクしていた。惨め、無力。そんな言葉で埋め尽くされていた。

だが、そんなパンクしていた心を全てリセットしてくれたのはユリカ。カケオはユリカに救われたのだ。少なくともカケオはそう思っている。

だからこそ嬉しかった。ここでユリカとバトル出来る事に幸福を感じていた。

「やあ。俺のことを覚えているか？」

カケオは自分自身を指差しながらそう質問する。

「失礼だけど……………分からない」

ユリカは本気で覚えていない様子だ。

「ふっ……無理もない。覚えているって方が無理な話だ。でも、俺は覚えている。ユリカ。お前の名前はユリカだろ？」

名前を言い当てられて驚くユリカ。

これは出会ったことのある男だと……自分の記憶をフル回転させる。

すると、記憶の片隅で一つの思い出が甦る。そう、この男は……

「もしかしてカケオか!？」

「よかった。俺の名を頭の隅のほうには置いてくれたんだな。そして、これからユリカとまたバトルができる。二重の幸福だ」

カケオが試合前の握手にと、片手をユリカに向けて伸ばす。

「私もまたバトルが出来て嬉しく思う。私が言うのも失礼なのだが……成長したな。トレーナーとして」

「お陰様で」

ガッチリと握手を交わす二人。

そして……

「それでは、第一回戦。第二ブロック。バトル開始！」

実況アナウンスの声と共に、ユリカVSカケオ。バトル開始！

第三十七回。懐かしき再開　くもう一つの第一回戦く（後書き）

カケオ。何故ここで登場させたかというと、単純にユリカと再戦させたかったから。やはりこの理由に尽きます。

ちなみに、カケオは第十五回に登場しております。

第三十八回。感情精神

ユリカとカケオ。両者一步も譲らないバトルを見せる。

見て分かるほどに成長している両者。会場も歓声を上げて、息を呑み、魅せられて……申し分ないバトル内容だ。

そして、両者のポケモンが一体づつになった後のポケモン交代。その時、ユリカはカケオの様子がおかしいことに気づく。

「気分でも悪いのか？」

ユリカが心配して、そう声をかけるのも無理はない。

カケオの額からは明らかに気温のものではない汗が流れ、体は震えている。

「いや、大丈夫さ……バトルを続けよう」

明らかに大丈夫では無さそうなカケオ。

ユリカはもう一度心配の声をかける。

「ユリカにはこのバトルがどう映る？」

突然的外れな質問をするカケオ。何か意味があるのだろうか……

「とてもいいバトル。バトルしてるっていう実感が湧くいいバトル」

率直な気持ちをそのままカケオに伝えるユリカ。

カケオは、そんなユリカの言葉にクスッと笑みを見せる。

「その通りだ。でもよ、いいバトル過ぎて自分の精神がどっか遠くにいつちまったことあるか？」

「どういうことだ？」

カケオの言うことがよく理解できないユリカ。
返す言葉が見つからず、カケオに説明を求める。

「俺にもよくわかんねえ。よくわかんねえけど時々あるんだよ。このバトルとかジムリーダーとのバトルとか……とにかく最高のバトルのときにお、自分が自分でなくなっちまう気がして、何者かが俺をどこかに連れてってる気がして……それが怖いんだ」

真剣にそう語るカケオに、珍しくフツツと笑うユリカ。

そして、カケオを優しく包み込むような笑顔で言葉を返す。

「深く考えすぎ。カケオにとって最高のバトルなのだろう？　ならいいじゃない。最高のバトルだから自分を見失うほど熱中してそう感じてるだけ。私からすれば正直羨ましい。恐がる必要はない。素直に自分の感情を受け止めればいい」

ひとつ大きく呼吸をするカケオ。

「……ありがとう。俺はまた救われたようだ。そうだな。俺はどこまでも連れて行ってもらうことにするよ」

カケオは自分に行き詰ったとき必ずユリカに出会う。そして、必ず自分を救ってくれる。これは運命なのだろうか。カケオの心はまた一つ成長した。カケオのポケモントレーナーとしてのレベル。いや、人生までもユリカに救ってもらっている。

その結果。カケオの口から初めに出た言葉はありがとう。これ程までに素直に出てくるありがとうはない。カケオが言葉に言い表せないほどの感謝の全てが詰まったありがとうだ。

「そう。それでいい」

温かい返事を返すユリカ。

それに対し、一つ頷くカケオ。

「……ありがとう。じゃあ、そろそろバトルに戻るとしよう。これ以上中断すると、会場の観客にも悪いしな」

「そうだな。では、最後までよろしく頼む」

トレーナーゾーンに戻る二人。バトル再開である。

「では……ウツボットVSマタドガス。バトル開始」

ユリカが出したポケモンは、エリカの持っていたポケモンでもあるウツボット。ユリカのウッドンが進化したのだ。

カケオの場にいたポケモンは、マタドガスという名のポケモン。ドガースが二つくっついたようなポケモンなので恐らく進化したのだろう。

熱戦を繰り広げる二人。

恐らく、感情の肩の荷が下りたからであろう。先程よりも楽しそうにバトルを繰り広げている。

「お前は俺をどこまで連れて行ってくれるんだ！？ 楽しすぎるじゃないか。我を忘れちまうぜ！」

熱が入りすぎて思わずそんな言葉を発してしまう。

そんなカケオに、ユリカはまた笑みを見せる。

「私が連れて行けるところまでどこまででも連れて行ってあげるわ。だけど……最終的には私が超える！」

ウツボットVSマタドガス。両者ポケモン一匹ずつのそのバトルは、正に勝利への対決。すなわち、最終戦に相応しい二匹のバトルであった。

しかし、どんなバトルにも勝者と敗者というものがある。
どちらかが勝利し、どちらかが敗北する……

「ウツボット。戦闘不能。ユリカ選手の手持ちポケモンが0となったため、勝者。カケオ選手」

カケオ。第二回戦進出決定！カケオもタキもまだ知らないことだが、次のバトルはカケオVSタキということとなった。

だが、正直このバトルの勝者がユリカになっても違和感はない。正にギリギリのバトルだったというわけだ。

「成長したなカケオ。とうとう私も超えられてしまった」

敗北はしたが、納得の表情を浮かべるユリカ。

「俺は超えたなんて思っちゃいないね。ポケモンバトルは無限大だ。今回のバトルはたまたま俺が勝っただけだ。だから……またバトルしよう」

「こちらからお願いしたいくらい。でも、次は私が勝つわ。カケオの言うとおり、今回のバトルはたまたま負けただけだもの」

そんな言葉に二人は笑顔になる。

ポケモンバトルが終わった後には、笑顔でポケモンバトルを語り合い握手で終わる。これがポケモンバトルのあるべき姿だ。この二人のバトルは正にそれを物語るバトルであった。

だが、ユリカには一つカケオに言わなければならないことがあった。

「カケオ。一つ頼まれてくれるか？」

喜んでと頷くカケオ。

「もしこの先、タキというトレーナーに出会ったら伝えておいてくれ。ユリカは一步踏み出したと」

そう。この大会はユリカのポケモンマスターへの第一歩。

ユリカはその第一歩を踏み出したのだ。それもタキとの出会い。タキとの旅のお陰。だから、ユリカはカケオにその気持ちを伝えてくれと伝えた。

「タキ……覚えてるぞ。あの時、一緒にいた男だろ？ 今は一緒にいないのか？」

カケオはタキのことも覚えていた。

それ程あの時の出来事を鮮明に覚えているのだ。

「ああ。私とタキは同じポケモンマスターを目指すトレーナー。つまりライバル。ライバルと一緒に旅するのはおかしいでしょ？」

「確かに。でもその条件だと俺からしてもライバルってわけだよな……分かった。そのライバル君に出会ったら必ず伝えておく」

その後、二人は握手をしてその場を去った。

恐らく、二人はまたどこかで出会い、どこかでバトルするのだろう。そんな気がしてならない二人のバトルの一つが終わった。

第三十九回。マ스터ゲート第二回戦。タキVSカケオ

第一回戦終了から二時間程、ポケモンセンターでのポケモンの体力回復も十分になった頃、第一回戦を勝ち抜いた四人による第二回戦が始まる。

その、第一回戦、第一ブロック・第二ブロックを勝ち抜いたタキとカケオが第二回戦、第一ブロックのバトルフィールドへ入場する。バトルフィールドへ入場した二人に会場の観客が大きな声援をおくる。第一回戦以上に熱気のこもった声援に会場全体が盛り上がる。

丁度そのとき、観客席でタキを見守るコルトの下に現れる女性。

「横いいかしら？」

そう。ユリカだ。ユリカは自分を倒したカケオのバトルを観戦に来た。

だが、そのカケオの相手がタキだということに驚いたユリカは、驚きながらも冷静に考えた。

タキが試合に出ているということはコルトもどこかでバトルを観戦しているんじゃないかと……そういう考えで会場を探していたところ、コルトを発見したのだ。

「おお！ ユリカやないか。ユリカも見に来ててんなあ」

久しぶりにユリカに再開できたこと、一人で見ているのも寂しかったと思っていたこと。二つの意味でコルトはユリカの登場を喜んだ。

「いいえ。私は出場したわ。負けてしまったけど」

「ん？ 出場者は観客席に入場したらあかんのちゃうかったっけ？」

マスターゲートは、出場者に他の出場者の情報を一切教えてはならない。だから、出場者は基本的に部屋の中で待機だし、敗れた出場者は速やかにマスターゲートから退場しなければならなかったはずなのだ。

「負けた出場者は観客席で観戦するのはよくなったはずだ。最近は、出場者のマナーもよくなり、観客席からバトル相手の情報を叫ばなくなっただけだな」

「ホンマか。そりゃええ話やなあ」

ほのぼのと話す二人。

しかし、コルトには一つ気になった点があった。なので、空気が変われることを覚悟でユリカに質問する。

「ユリカは誰に負けてん？ ユリカ程の実力があれば簡単に負けはせんやろ？」

コルトに質問されたユリカは静かにカケオを指差した。

「ビンゴでタキの対戦相手やないけ……」

ユリカは言う。カケオの勢いはタキ以上かもしれないと……それ程、カケオは成長した。そして、その成長はポケモンバトルにも十分に繋がると。

そして、コルトとユリカは話すのをやめ、視線をタキとカケオに

向ける。

タキとカケオ……マスターゲートの中でも最も勢いのある二人のバトルである。

「おお。驚いた。お前タキだろ？」

驚いた顔でそう言うカケオ。

「僕も驚いてるよ。カケオでしょ！？」

タキはカケオのことを覚えていた。常に記憶の片隅にカケオを残しておいたのだ。

そんなタキにカケオは拍手を送った。

「嬉しいな。俺を見ただけで分かってくれるとは……これはスツキリとしたバトルの幕開けだ。いいバトルにしようぜタキ」

「うん！ 絶対にいいバトルになるよ！ よろしくね！」

そして、両者スツキリとした気持ちで第二回戦、第一ブロック。タキVSカケオ。バトル開始！

第四十回。素敵な馬鹿

「ナツシー戦闘不能！」

これで両者ポケモンが一体ずつ。カケオは、タキ相手にも必死で食らいつく。

カケオはタキに全く負けていない。むしろ、気持ちでは押しているのではないだろうか。

だからこそ、カケオのテンションはユリ力戦のあの時の状態へと。ポケモンバトルにのめり込み、我を忘れている。

タキが繰り出したポケモンはヒーロ。

カケオの場にいるポケモンはマタドガス。またもやエース対決。やはり、自分が最も信頼しているポケモンは最後の切り札なのだ。

「リザードンVSマタドガス。バトル開始！」

エース対決が始まった。

まず、先手を仕掛けるのはヒーロ……かと思われた。

しかし、予想外に先手を仕掛けてきたのはマタドガス。ヒーロに向かって、捨て身の体当たりを繰り出す。

普通なら当たるはずも無い無謀な捨て身。しかし、ヒーロの取ろうとした行動は空中からの火炎放射。その、空中へ飛ぶ瞬間を狙われたのだ。この捨て身の体当たりを反撃することもかわすことも出ず、クリーンヒット。あの大きな体格をしたヒーロが大きく吹っ飛ぶ。

「気持ちを先行させるのも悪くないもんだな」

カケオが、指をぱちんと鳴らしながら嬉しそうにそう言う。

「カケオ……油断禁物だよ！」

そう叫ぶタキの言葉にハッと反応するカケオ。

すると、そこにはマタドガスに向けてひっかくを繰り出そうとしているヒーロの姿が。

「何！　嘘だろおい……全力で避けるマタドガス！」

カケオは驚いた。

あの体格の大きなヒーロが、一瞬の内にマタドガスの間合いに入って攻撃を繰り出そうとしていたのだ。驚くのも無理は無い。

そして、驚きと同時に、少しでも油断してしまった自分を恥じた。

間一髪でかわすマタドガス。

しかし、ヒーロの攻撃はそれでは終わらない。かわされてもかわされてもヒーロはひっかくを繰り出す。それを間一髪でかわし続けるマタドガス。

確かにひっかくは当たっていない。しかしその状況は、誰がどう見ても攻守逆転。

精神的にヒーロがマタドガスを上回る。

「くっ。マタドガス。煙幕！」

勢いよく煙幕を噴射するマタドガス。これにより周りの視界が見えなくなり、リザードンはひっかく攻撃の連打が出来ない。カケオ。

ピンチを切り抜ける。

しかし、これでピンチの全てを切り抜けたわけではない。

タキもこうなることは想定済み、すぐにヒーロに、羽をバタバタさせて風を作り、煙幕を吹き飛ばすように命令。

その命令はピシヤリと当たり、風により煙幕は吹き飛ばされた。これでまたヒーロのペースに……いや、これがカケオの狙い。

「えっ？　どういうこと!？」

煙幕を吹き飛ばした次の出来事に、タキは驚きを隠せない。

それもそのはず、煙幕を吹き飛ばした次の光景……目の周りがヘドロだらけになり、暴れまわるヒーロがタキの目に入ったのだから

……

「これだからポケモンバトルは止められねえよな。自分の油断から始まるトレーナー同士の読み合い。当然、俺は不利な状況から読みが始まる。だけど、そんな不利な読み合いに読み勝ったときなんかよお……絶対に止められねえよ」

カケオが声を震わせ、体を震わせながらそう言う。

カケオはヒーロが煙幕を吹き飛ばしてくるのを願っていた。

そうでなければ、もし、吹き飛ばし以外の方法で、この状況を打破されていたならば、間違いなくカケオの作戦は成功しなかった。だからこそ、読み合いは難しい。そして楽しい……

ヒーロが羽をバタバタさせて煙幕を吹き飛ばす。

その間に必ず無防備の時間が出来る。つまり、隙だらけとなる。そこにカケオは仕掛けたのだ。煙幕と同じ色のヘドロを……普段

は当てることが難しいヘドロ攻撃を……いくら当てるのが難しいヘドロ攻撃も、無防備の相手なら必ず当てる事が出来る。」

「ヘドロで目をやられてる今、更に無防備の時間が作れる。俺のマタドガスは、攻撃力自体は低い。でも、二回も体当たりをクリーンヒットさせられたら……考えるだけで興奮してくるぜ」

カケオはマタドガスに体当たりを命令。

当然、マタドガスの体当たりはヒーロにクリーンヒット。

攻撃の二度のクリーンヒット。これはもう、どれだけ非力なポケモンでも確実な致命傷を与えられるといってもおかしくない。

ヒーロ。マタドガスの体当たりによりダウン……この時カケオは、勝利を確信した。

「楽しかったぜタキ。最高だっ……」

「まだ終わってないよ！！　ヒーロはまだ諦めてない。だから僕も諦めない！」

カケオの言葉がタキの声に遮られる。

その時、カケオは見てしまった。自分がポケモンバトルにのめり込み、我を忘れた精神世界。カケオはユリカとのバトル、そして、このタキとのバトルで、カケオの精神は更に上へ上へと昇る。そして、カケオは見てしまった。

その時、会場がワーツと沸く。ヒーロが大きな声を上げながら立ち上がった。

しかし、カケオには聞こえない。

「……馬鹿だぜ。もっと馬鹿になんねえと……俺はまだまだポケモン馬鹿になれる……」

カケオは見てしまった。辿りついたその先に……いや、もっと上の上に、タキの姿が見えた。これは幻覚かもしれない。でも、カケオは感じた。自分はある時、勝利を確信してしまった。だが、タキはそれでも諦めなかった。この時点でタキは自分よりも上にいる。そう感じてしまった。

「マタドガス。戦闘不能！ カケオ選手の手持ちポケモンが0となったため、勝者。タキ選手！」

カケオはその後、タキとヒーロの気合の猛攻で逆転されて敗北した。

カケオはタキの精神力に押されてしまったのだ。それが一番の敗因である。

「タキ！」

試合終了後。カケオがタキに話しかける。

「お前馬鹿だな！」

タキの肩をポンツと叩き、笑顔でタキに馬鹿と言うカケオ。普通に考えると、これ程、礼儀の無い挨拶は無い。

「馬鹿つて……」

タキも引き笑いしながら反応する。

「そんな顔すんなよ。馬鹿は馬鹿でも素敵な馬鹿ってことだ。褒め言葉さ。こんな素敵な馬鹿と出会ったからこそ、ユリカは一步踏み出せたんだろうな」

「馬鹿に素敵なんてあるのかなあ……それより、ユリカとどこかで会ったの!? ユリカ元気にしてた!？」

ユリカと言う名前に過剰反応するタキ。

これには、少しカケオが引き笑いになる。

「ああ。元気にしてた。お前に感謝してたぜ」

カケオは、ユリカの気持ちを全てタキに説明した。

タキはその説明にニコツと笑った。素直に嬉しかったから。

「じゃあ、そろそろ握手して解散といきましょうか馬鹿野郎」

「……馬鹿野郎はないんじゃないかなあ……まあいいや! 楽しかったよ馬鹿野郎!」

「お前より馬鹿じゃねえよ! まっ、いつかお前よりも馬鹿野郎になる予定だからまあいいか!」

二人の馬鹿野郎は、馬鹿みたいな笑顔で握手をかわし、その場を去った。

タキ。Aブロック決勝戦進出!

第四十一回。マスタートゲートAブロック決勝戦開始直前

Aブロック決勝が始まるちょっと前。

観客席にざわめきが起こった。それもそのはず、ユリカ。カケオ。マツリ。このマスタートゲートAブロックで名勝負を繰り広げてきたトレーナー三人が、一人の男の周りに集まっているのだ。

「なんや……恥ずかしくなってきたわ……」

当然、一人の男とはコルトのこと。周りの観客がコルトを見て、何者なんだあいつは！ とざわついているのが少々恥ずかしいようである。

こんなことになったのは簡単な話。コルトとユリカの二人で試合観戦していたところに、カケオがユリカを発見し、合流する。そして、マツリはタキとカケオの試合をチェックしていたので、カケオを見つけたマツリがカケオに話しかけ、結果的に合流……なんだか奇妙な話である。

初めて出会った組み合わせも当然あるが、そこはやはりポケモントレーナー同士、すぐに打ち解け仲良く会話する。コルトはポケモンを持っていないが、ポケモンに関する知識はあるので、全然話題にもついていけているようだ。

程よくポケモンの会話を話した後、話はAブロック決勝の話へ移行する。

つまり、タキの話だ。

「いよいよだなあ。楽しみだ^{だの}なあ」

話を切り出したのはマツリ。まるで次は自分が決勝戦に出るかのようにつくつくしている。

「ホンマ楽しみやわ。マツリ、カケオと一試合一試合成長しとるかなアイツは。マツリと一回戦で当たつたらんかったらタキはカケオには勝てんかった。やけど、カケオはユリカと当たらんかったら二回戦へ進めんくてタキとバトル出来んかったやろな。凄い話や」

ニヤニヤしながら言葉を返すコルト。その顔は、我が子の成長を見守る親のようだ。

しかし、そんなコルトの言葉に、挑発するようなニヤケ顔で言葉を返す人物が……

「おじさん。一つ抜けてるぜ。タキが自分と出会わなければ、タキはマスターゲートに出場出来なかった。だろ？」

「おじさん言うなおじさんって！ これでも、年の割にお若いんですねって言われんねぞ！ でも、上手いこと言いよるやんけ。おじさん発言チャラにしたろ！」

「ありがとうございます。おじさん」

「二回も言いよった……二回目はあかんぞ！ 二回目は！」

年下のカケオが年上のコルトで遊んでいるとき、ユリカは遠くを見つめてタキと出会ったときの事を考えていた。

初めてタキと出会ったとき、タキはまだまだポケモントレーナー

として知らないことが多く、未熟だった。だから、タキに色々教えてあげようと、タキのお姉さんのような気分だった。

だけど、タキはもう未熟じゃない。むしろ、ポケモントレーナーという点では自分の方が未熟だ。だから、今はタキが自分のお兄さんのように見える。

どんどん立派になっていくタキ。もう、自分なんて必要は無いのだろう。

嬉しいことだけど、とても悲しい。自分と手を繋いで歩いていたのに、気づけばそこにタキはいない。自分の下からどんどん離れていく気がして……

「強くなつたなタキ。私なんて追い抜いてしまった。もう、私なんて必要ない。それは分かっている。でも、なんだか寂しいぞ。タキ

……」

思わずそう呟くユリカ。

その瞳はウルウルしている。

そんなユリカの呟きを聞いてしまったマツリ。

カケオとコルトのじゃれあいを見て笑っていたマツリだが、ユリカの呟きを聞いた途端、笑いがピタツと止み、ユリカの肩をポンツと叩いた。

「寂しいのは分かる。でも、それはユリカどじて悲^{がな}じめ。ポケモントレーナーどじてそれは嬉しいことだろお？」

コケリと頷くユリカ。

その瞬間。マツリの顔がまた笑顔に戻った。

「なら大丈夫だ。ユリカは今、^{がな}悲じ^{がな}んでる。だから、今は^{がな}悲じ^{がな}めばいい。でも、タキの前では^{がな}悲じ^{がな}んじやいげねえ。タキのポケモントレーナーどじての成長を^{がな}悲じ^{がな}んじやいげねえ。それが分がつ^{がな}でるなら大丈夫」

「ああ。ありがとうマツリ」

眼にウルウルと溜まる涙を手で拭き取り、マツリに礼を言うユリカ。

「礼なんでいらねえ。おらあもユリカと同じポケモントレーナー。^ぎ気持ち……良^ぎく分がるからよ」

そう言つと、マツリはまた、カケオとコルトのじゃれあいを見て笑い始めた。

ユリカも、それを見てクスツと少し笑った。

こうして時間は過ぎていき、いよいよマスターゲートAブロック
決勝戦が開始！

第四十二回。マスターゲートAブロック決勝戦……開始！

大観衆が見守る中、遂にマスターゲートAブロック決勝が幕を開けようとしている。

マスターゲートAブロックに集まった八人の選ばれしポケモントレーナー達。そして、選ばれし八人の中から選びぬかれたポケモントレーナー二名。

ポケモンという世界に愛された二名のポケモントレーナーが、今……

「Aブロック決勝戦。ポケモンと共に戦う一体感バトルは常にギリギリ、常に熱戦！ バトルの後はニッコリ笑顔で握手も忘れない熱血紳士！ タキ選手の入場です！」

いつも以上に力のこもった実況アナウンス。空からはライトアップされる光が眩しくて、思わず眼を細めてしまう。一回戦・二回戦以上に力溢れる会場。これがAブロック決勝戦。決勝というものの重圧。タキは生まれて初めて、大舞台というものに足を踏み入れるいや、足を踏み入れた。

タキの入場により更にヒートアップする観客。中にはタキを、喉がかすれそうなくらいの大声で応援する声もあった。

そんな、色々な要素が混ざり合ったこの場所に対し、タキは思わず生唾を飲み込む。これだけ高揚した気持ちで飲み込む生唾。全然気持ち悪いとは思わなかった。むしろ気持ちよかつたくらいだ。タキは徐々に、この大舞台での緊張感を楽しみ始めている。

「続いて、ポケモンを愛せぬ者にポケモンバトルをする資格無し！ そんな一途なポケモンLOVE！ ピリ力選手の入場です！」

タキの入場と同じように、空からライトアップされる光に照らされながら入場してくる一人の女性。

しかし、この女性。これだけの大舞台の中、緊張しているような素振りが一つも無い。応援してくれる観客に対し、被る帽子を脱いで、笑顔でお辞儀をしたり手を振ったり……確実にこの状況を楽しんでいる。無邪気な素振りに身を隠し……かなり大舞台に手馴れていると見える。

「マスタートゲートAブロック。選ばれし八人が集まったこの場所で、その中から更に選ばれた二名のトレーナー。ここに……ここに出揃いました……！」

実況アナウンスのテンションも最高潮。このテンションに同調したマスタートゲートAブロックに集まる全ての観客。全ての観客が、実況アナウンスと同時に「うおー……！」と唸った。ヒートアップする会場に響き渡るその数々の声は、タキの体をピリピリと刺激した。まさか、声がこれほどまでに力のあるものだとは……タキにとって生まれて初めての実感である。

そして、いよいよバトルの時間。これ程の大舞台の中、自分は思うようなバトルが出来るのか、吞まれちゃ駄目なのは分かっているけど……いや、大丈夫。出来る。自分は様々な強敵とバトルをしてきた。そして、目の前には更なる強敵がいる。それだけなのだ。自分はいつも通りにバトルをする。そうじゃなきゃ相手に失礼だ。いつもと違う自分で戦うのは相手に失礼だ。

タキは、そんなことを考えながら、モンスターボールを取り出す。そして一つ深呼吸を置き、ゆっくりとモンスターボールからポケモンを場に出す。

「頼むよロッキー。大事な先鋒。君に決めた！」

タキが繰り出したポケモンはロッキー。ロッキーも、このいつも以上に熱い空気を存分に感じているのだろうか。いつも以上にロッキーも熱い。

だがそのとき、この熱い空気をぶち壊す出来事が起こる……

「きゃー！ ゴローンですわ！ しかも、こんなたくましくゴツゴツしながらも、艶つやのいいゴローンを見るのは初めて。流石は決勝戦ですわ。相手もちやんとポケモンを愛しながらポケモンマスターを目指す……どちらかに偏らず両立しているというわけですわね。ピリ力感激ですわああー！」

緊張感溢れる熱い会場だとは思えないほどのはしゃぎ様。タキも悪態をつかれているわけではなく、純粹に褒められているので、空気を考えろ！ と思っていながらも「いやあー」と言い、少し照れながら頭をポリポリ掻くことくらいしか出来ない。正に褒め殺しである。

「そんないいゴローンを見せられちゃ、ポケモンを出さずにはいられませんわ。いくのですよピカチュウー！」

その場に似合わぬテンションは止まることなく、ピカチュウと言う可愛らしいネズミといったような風貌のポケモンを場に出した。

名はピカチュウ。体長0.4m。体重6.0kg。尻尾はギザギザで、頬には赤斑点に見える「でんきぶくろ」と呼ばれる、電気を生成するための器官が備わっている。そして何より、黄色い肌が特徴的である。

「きゃー！　いつ見ても見事ですわピカチュウ！　相手のゴローンにも全然負けてませんわよー！」

そう言いながら、自分の出したピカチュウに抱きつくピリカ。流石一途なポケモンLOVE。伊達ではない。タキもピリカのはしやぎっぷりを見ているばかりだ。

しかし、ピリカはマスタートゲートAブロック決勝まで勝ち上がったきた強者。ただ、ポケモンに対して、はしゃいでいるだけではない。

一頻りピカチュウとじゃれあった後、さっきまでのはしやぎっぷりが嘘のような表情でピカチュウの下を離れ、タキに近づくピリカ。

「一人ではしゃいで申し訳ありません。私、わたくしピリカと申します。タキさんのゴローン。とてもいい状態ですわ。大事になされてるようで、私としても嬉しく思います。では、いいバトルをしましょうね！」

さっきまでののはしやぎっぷりが嘘のように、タキの目の前できちりとお辞儀をして、スツと腕を前に出し、握手のポーズまで決めた。なかなか読めない女性である。

握手のポーズに答えようと、タキも腕をスツと前に出そうとする。しかし……

「ちょっとお待ちくださいですわ！　タキさん。私に対し、何か一言どうぞ。その方が私的に盛り上がるので、どうか一つお願いしますですわ！」

なかなか難しい質問を出すピリカ。何か一言と言われた後、何を言おうかなり迷うということをピリカは分かって言っているのだろうか。それに、この緊張感の中、一言を即興で考えられるほど頭が回るはずがないというのに……その笑顔を見る限り悪気は無さそうなのだが……

案の定、タキもいきなり言葉を振られ、かなり動揺したのだろう。よく意味の伝わりにくい言葉を発言する。

「えっ……そうだなあ。当然のことだけど、ポケモンバトルに関して、あいつが悪い。こいつが悪い。そんな対象なんてない。勝つても負けてもLOVE & amp; PEACE！ って何言ってる僕……とりあえずLOVE & amp; PEACEでいいよねピリカ！ あっ……後、タキさんじゃなくてタキでいいよ！」

タキの放った何を言いたいのがよく分からない言葉に対し、あんなに熱気のもった会場がシーンとなる。俗に言うスベったというやつだ。これでタキもピリカと同じく、空気を考えろ！ の仲間入りである。

しかし、ピリカだけは物深そうに頷いている。タキの言葉がピリカには伝わったようだ。

「愛と平和。いい言葉ですわ。ポケモンを愛せぬ者・信じれぬ者、ポケモンバトルを……いえ、ポケモンと触れ合う資格無し……ですわ。さて、これ以上長引くと折角見に来てくださってるお客様にも悪いですわね。それではタキ、改めてよろしく願いしますわ！」

仕切りのおして、また腕をスツと前に出し、握手のポーズを決めた。

そして、今度こそ固い握手を交わした二人。

これでようやく、Aブロック決勝戦……開始！

第四十三回。相性はタイプ以外にも

ロッキーVSピカチュウのバトルが始まろうとしているなか、一人、今の現状に納得出来ていない人物が。

「どういうつもりだ。どうして、タキのロッキーに対し、ピカチュウをぶつける……」

ユリカだ。ユリカは人一倍ポケモンの相性を気にするトレーナー。雷タイプのポケモンの十八番技である電撃技は、ロッキーのような岩・地面タイプのポケモンには通じない。となると、これは明らかにミスマッチ。

しかも、タキはピリカよりも先にポケモンを出した。つまりピリカには、相性で有利にたつ権利があるも同然。後出しジャンケンが出来る状態なのだ。しかし、ピリカは明らか不利な雷タイプのピカチュウを出した。後出しジャンケンで故意に負けたのだ。ユリカが疑問を持つのも分かる話。

だが、その答えはロッキーVSピカチュウ。このバトルで明らかになる。

ユリカは、これ以上何も言わず、静かにバトルを見守ることとした。

「それでは、ゴローンVSピカチュウ。バトル開始！」

いよいよ始まった。マスターゲートAブロック決勝戦。

決勝戦の勢いに身を任せ、まず攻撃を仕掛けたのはロッキー。

摩擦が起こるほどの回転率で回転しながら転がる勢いを溜めてゆ

く。そして、勢い十分、標的ピカチュウ。ゴロゴロと猛スピードで転がる。

これに対しピカチュウ。焦るところか、手で耳を弾き、ピクピクさせるほどの余裕振り。

どこから現れる余裕なのだろうか。

「遅いですわ。スローですわ！ ピカチュウ。高速移動ですわよお！」

勢いよく、そして自信満々に、ピカチュウに人差し指をピツと差して、そう命令する。

命令されたピカチュウは、ピリカの命令通りにロッキーの転がる攻撃をかわそうと高速移動。そして……

「そんな……どういうスピード!？」

タキは驚いた。タキは絶対の自信があつたのだ。ロッキーの転がるに対し、余裕を見せるピカチュウとピリカ。それが通じるほどロッキーは甘くない。タキはそう信じている。余裕は最大の隙。今までの戦いで、それも身に染みるほど実感した。

しかし、ロッキーの転がるは、ピカチュウを捉えた手ごたえが無い。余裕を見せ、隙を作っても捉えることが出来ないピカチュウの圧倒的なスピード。タキはまだ、これ程素早い移動をするポケモンを見た事がない。

「そういうことが……ロッキーはポケモンの中でも攻撃スピードが速いほうではない。相性というのは属性だけではないというわけね……」

この時、ユリカは気づいた。そして、人一倍相性を気にする者として、自分を悔いた。なぜ、ピリカがロッキー相手にピカチュウを選んだか。ピリカの手持ちポケモンで一番……

「ピカチュウ！ 転がり終わりで隙が生まれましたわ！ すかさず電光石火！」

ピカチュウから見れば、ロッキーの転がり終わりの反動は、時が止まっているも同然。焦らず的確にロッキーの弱点を直撃。急所に当たったというやつだ。しかし、それ程大きなダメージはない。中ダメージといったところだ。的確に弱点に命中したというのになぜ中ダメージなのだろうか……

「ロッキー！」

タキが心配そうな声でロッキーを呼ぶ。

ロッキーは、大丈夫だということを伝えようと苦しそうにしながらもニツと微笑む。

「美しい。バトル中にもポケモンを思いやる。愛ですわ。ですが、心配なざる必要はございません。私のピカチュウは、全くとっていいほどパワーがございません。ポケモン愛を見せてくれた代わりに、一つ教えておくと防御力もございませんわ。恐らく、タキのゴロンの攻撃を一撃でも受ければダウンするでしょう。でも……私のピカチュウはタキのゴロンには負けませんわ！」

これだけバトル中に、自分のポケモンの情報をペラペラと喋るトレーナーがいたのだろうか。どこまでもお喋りで自信家なトレーナーである。

しかしそれは、それだけ自分のポケモンに対し、自信をもって信

じている証拠。ポケモンバトルにおいて、自信家というのも一つの大事な要素である。

「その理由。パワー・防御力、その全てを捧げたスピード……だよ
ね……」

タキは、声を震わせながらそう言う。

「その通りですわ。どうですか？ 絶望感を味わえましたか？」

余裕綽々な笑顔で言葉を返すピリカ。

「絶望感……確かに、対処法を思いつかないけど、それ以上に今、
凄く楽しいんだ！ 本当にポケモンって面白い。ポケモンも一匹一
匹に個性があるけどトレーナーも一人一人に個性がある。それも、
みんな驚くほど違うんだよね！」

絶望感。いや、むしろ希望に満ち溢れたような表情でそう言うタ
キ。

声を震わせながら放ったその言葉は絶望感から表れた震えではな
い。今が楽しくて仕方ない。だから抑え切れない。そんな震えだ。

「美しい……ですわ……」

そんなタキの心からの言葉に、ピリカは余裕の表情を失くした。
絶望感からの振るえ声だと思っていたピリカ。予想を大きく外し、
一瞬、空いた口が塞がらなかった。

しかし、それも一瞬。今度は、覚悟を決めた。余裕など見せやし
ないであろう笑顔を見せる。

「どれだけ美しくても愛があっても、これはポケモンバトル。その先にある勝利を手にしなければ無……ですわ。タキ、あなたは美しく、愛もある。さあ、最後に私から勝利を奪う。これであなは私の中で完成しますわ。まだ不完全……不完全ですわ！」

ピリカは、落ち着こうと自分に言葉を投げかけ、自分で自分に言い聞かせる。

「決めた。この戦いに戦略なんて必要ない！ 僕のロッキーが攻撃を一撃与えてくれる。そして勝利する。僕はそう信じる！」

「なら私は、ピカチュウが攻撃を全てかわし、一撃も食らわず勝利する。私はそう信じますわ！」

この一言により、長らくストップしていたバトルが動き出した。しかし、タキとピリカ。この二人はトレーナーである。しかし、共にポケモンに命令を出そうとはしない。「頑張れロッキー！」「大丈夫ですわピカチュウ！」二人とも、観客視線でバトルを見つめる。

バトルは一方的なピカチュウ有利に進んでいるように見える。

岩を投げて、転がっても、殴りにいっても……その圧倒的なスピードでロッキーの攻撃をかわし続ける。

しかし、一撃でも食らうとピリカいわく、一貫の終わり。常に有利ともいえない状況。これが、二人のトレーナー。そして、大勢の観客の緊張感を高ぶらせる。

何度も何度も電光石火を食らい、傷つくロッキー。

もう、これ以上食らうと……というほどの回数を何度も食らっている。

しかし、ロッキーは倒れない。ロッキーのタフさは、ハナダジムのジムリーダー、カスミとのアズマオウ戦でも知るとおり折紙つきだ。だからこそ、勝機が生まれる。飛びぬけた根性は圧倒的なスピードをも跳ね返すのか……

流石のピカチュウも、ノンストップで走り回っている。いつもなら決着がついてもいい頃なのに倒れない。何度食らわせても……ピカチュウのスタミナは、こういう状況になるまでつけられてはいない。徐々にスピードも落ち……るはずなのに、ピカチュウは、自分の最高速度を保ち続ける。スピードが落ちてしまつと攻撃を食らうてしまふ。そうなれば自分は負けてしまふ。そんなことにはなりたくない。だから、ピカチュウも根性で保ち続ける。ロッキーに勝機を生ませるわけにはいかない……

だが、当然無理をしていれば隙は生まれる。
そして、無理をしていて一番隙が生まれやすい場所……足だ。

ピカチュウは一瞬であるが体勢を崩した。
これはこの試合にとっては致命的な隙。その隙をロッキーは見逃さない。最後の力を振り絞り拳を振るう。

「ロッキー！ そこだー！」

タキがようやく巡ってきた勝機に、楽しそうに応援する。

「大丈夫ですわピカチュウ！ あなたは……さいっこうですわああ！」

ピリカもいよいよ作ってしまった隙に対して……しかしながら楽

しそつに応援する。

バトルの勝敗を超えた何かをピリカは感じているのだろうか。

「……ゴローン。戦闘不能！」

ギリギリの世界だった。ロッキーの拳があと少しズレていたら、戦闘不能になっていたのはピカチュウの方だっただろう。

ロッキーVSピカチュウ。執念でかわし切ったピカチュウに軍配が上がった。

第四十三回。相性はタイプ以外にも（後書き）

自分で書いておいてあれだが、ロッキーの転がるは、大抵外れて自分がダメージを受けるなあ（汗）

そして、決勝戦のピリカ。これも自分で書いておいてあれだが、バトル中だというのによく喋る（笑）

第四十四回。奥義

タキ二体目のポケモン。

現在タキは、ピリカと一体差ある。このまま平行線で戦いが続けば負けるのはタキ。

なのでタキは、ここで試合の流れを変えなければいけないと判断した。

タキは今までの戦いを振り返る。その一試合一試合。常に試合の流れを変え、勝利を呼び起こしてくれたポケモン……頭に甦るはヒーロ。ヒーロ……ヒーロ！

試合の流れ……ヒーロに託す。

対するピリカ。恐らく二度連続同じ手は通用しない。そう考え、ピカチュウをモンスターボールに戻し、何やら大きな貝のようなポケモンを場に出す。

名はパルシェン。体長1.5m。体重132.5kg。非常に固い殻と大きなトゲが印象的なポケモンである。

ヒーロVSパルシェン。バトル開始早々、ヒーロの火炎放射とパルシェンのオーロラビームがぶつかり合う。

「長い！ とてつもなく長いぶつかり合い！ 魂と魂のぶつかり合い。そういつても過言ではないほど……どちらも引こうとしない！」

攻撃を止めようとしなない両ポケモンに賛辞の言葉を送る実況アナ

ウンサー。」

戦いが動くのは火炎放射とオーロラビームのぶつかり合いの後、
どちらも引かずぶつかり合った技は相殺。

相殺した直後、とてつもなく素早い反応を見せたのはヒーロ。相
殺した爆風に身を隠し、一気に間合いを詰める。そしてもうそこは
ヒーロの間合い。

「ヒーロ！ そのままの勢いで体当たり！」

タキの命令を受けたヒーロは、間合いを詰めた反応速度の勢いそ
のままにパルシェンに体当たり。この体当たりに反応できなかった
パルシェンは、ヒーロの体当たりをモロに受ける。これは大ダメー
ジ……と思われた。しかし、体当たりを受けたというのに、ピリカ
がニヤツと笑った……

「流石見事ですわ。息ピッタリのコンビネーション。身震いがしま
す。でも、それは私のパルシェンではなかったらの話ですけど！」

「き……効いてないっ!？」

ヒーロの体当たりに対し、吹っ飛ばず動じずのパルシェン。ダメ
ージを受けた様子など一つも無い。

「私のパルシェンの防御力は並じゃないですわ。半端な攻撃は無駄
だと思うことですわよ。しかし、もう遅いですわね……パルシェン
！ とげキャノン！」

パルシェンの固い殻についている一際目を引く大きなトゲ。その
大きなトゲがキュルキュルと回転を始める。そして、その回転する

トゲは照準をヒーロに定め発射！

「一発！」

ヒーロの体に刺さるトゲ。

「もう一発！」

二本目。

「更にいきますわよおお！」

三本目！

「まだまだですわああああ！」

四本目！！ しかし、これは辛うじてヒーロがかわす。丁度、パルシエンのとげキャノンも打ち止めとなった。

素早く、刺さる三本のトゲを抜くヒーロ。しかし、トゲを抜くときの痛みは尋常ではなく、痛みで膝をついてしまふ。そして、チラツとタキの方を振り向いた。それ程のダメージ。

それに気づくタキ。タキもこのダメージはヤバイと感じている。しかし、それを表情に出すわけにはいかない。タキは無理に大丈夫だという表情を作る。そしてヒーロに言葉を投げかける。

「大丈夫だよヒーロ。全然大丈夫。これからだよヒーロ！ さあ……行こう！！」

タキの言葉はヒーロに届く。無理にでも……しかし、諦めずに自

分を励ましてくれるタキに答えたい。だから立ち上がる。タキに安心して欲しいと願う。だから立ち上がる！

しかし、これだけの重症の中、ピリカが黙っていてくれるはずはない。

防御力、攻撃力を兼ね備えたピリカのパルシェンを打ち破る手段。もう、答えは一つしかない。ピリカのパルシェンの弱点は、あまりにもお粗末なスピード。それを狙い、打ち破れる手段……

もう、考えてる時間はない。勝負は一瞬。判断も一瞬。伝えてる時間も無い。タキは一筋の望みをかけて、頭にパツと浮かんだ一つの手段を、ヒーロに目で伝える。

ヒーロもタキの目で送る合図に、コクツと頷き動き始める。

決死のアイコンタクト。成功なるか……！

「また……またですよ！？ もう、通じないことは分かっているはず。焦りが状況判断を鈍らせましたのね！ チャーンスですわああ……！」

勝利を確信したピリカ。

しかし、一番隙が生まれるときは勝利を確信した瞬間……

「違うよ……僕たちの狙いは違うところにある！」

タキの言うとおり、ヒーロの放った体当たりはパルシェンに向けてのものではない。パルシェンを越え、パルシェンの真後ろでピタッと止まる。

「な……何をしておつもりですか？ 私のパルシェンは並の攻撃は

受け付けませんわよ……」

言葉では強がり放つものの、とてつもなくヤバイ出来事が起こるのは感づいているようで、流れ出す汗。引き笑いのような顔……表情までは誤魔化せない。

「次の攻撃……次の攻撃が通らなかつたら、正直もう手段はないよ……でも、意地でも通すよ。意地でも……僕とヒーロは通す気でいる！」

迷いの無い声色でそう言い放つ。

そして、静かに最終手段の命令を告げる。

「ヒーロ。地球投げ」

パルシェンを抱え上げ、上空へと飛び去る。

これは、マツリのカイリキー戦でも見せた。そして破った。あの……大技だ。

これに対し、ピリカは何も言うことが出来ない。眼を見開き、生唾を飲み込み、汗を垂らし……明らかに冷静さを失った表情で上空を見つめる。

ヒーロの地球投げ。上空でグルグルと回るその姿に、会場から応援する声が消えた。観客全員が、静かに息を呑んで上空を見つめる。この瞬間、会場は真に一つとなった。タキを応援する観客。ピリカを応援する観客。みんな上空を見つめる。どちらを応援するとか今は関係ない。ヒーロの描く、球体……美しく綺麗な地球に、観客全員が魅入る。

そして……勢いよく急降下。その勢いで地面に叩きつけられたパルシェン。

あの、ヒーロの体当たりにはビクともしないパルシェンが目を回し、気絶している。戦闘不能だ。

それと同時に、観客全員から歓声が巻き起こった。
地球投げ終了同時。また、応援する声は甦る。

「……………はっ！ パルシェン！ 戦闘不能！」

審判も、地球投げの美しさに魅入っており、判断が遅れたようだ。審判をも魅了する地球投げ。正に必殺技。奥義に相応しい技である。

そして、ポケモン交代。タキはそのままヒーロ。
ピリカは震える手でピカチュウを場に出す。

しかし、これはピリカの焦りからのミスなのか。
ヒーロの反応速度は、数あるポケモンの中でもトップクラスだといえる。いくらピリカのピカチュウといえど捉えられそうな気がするのだが……

「危険……危険ですわ！ とくとお見せさせていただきました。タキとリザードンの意地……次はこちらが意地を見せる番ですわ！」

試合開始早々、ピリカの命令でピカチュウは一直線にヒーロに電光石火をぶつけにいく。

「ヒーロ。よく見るんだ……ヒーロなら捉えられるよ！」

集中するヒーロ。

しかし、捉えられることはピリカは予想済み……

「そんなこと分かってますわ！　いくら非力なポケモンでも、全てを捨てた意地の一撃……なめちゃいけませんことよ！」

真っ直ぐ。どこまでも真っ直ぐにヒーロに電光石火を繰り出すピカチュウ。

これなら、どんなポケモンでも捉えられそうな軌道である。

例に漏れず、ヒーロは、腹に思いっきり電光石火を受けながらもピカチュウを掴む。

そして、思いっきり火炎放射をぶち込む。

「よし！　よくやったよヒーロ！」

防御力のないピカチュウは、一撃で目を回してダウン。戦闘不能だ。

「ピカチュウ！　戦闘不能！」

審判もピカチュウの戦闘不能を告げる。

「甘いすわ！　甘いすわ甘いすわタキ！　私のピカチュウの意地は確実に通りましたわ」

ピリカがそう発したその時、ヒーロの体がグラツと揺らぎ、地に倒れた。

ピカチュウと同じく戦闘不能である。

「リ……リザードン！ 戦闘不能！」

パルシェンのとげキャノンで受けた瀕死のダメージ。そして、そこから立ち上がり、瀕死のダメージで放った地球投げ。そして、最後のピカチュウの意地の一撃。ヒーロの限界を破ったヒーロの意地を、ピカチュウの意地が打ち破った。

「ヒ……ヒーロ……」

倒れるヒーロを悲しげな表情で見つめ……いや、頬をパンパンと叩き、ポケモントレーナータキの顔に戻るタキ。ここで悲しんでいるわけにはいかない。前へ進まないと……

「よく頑張ってくれたねヒーロ。絶対勝つから。負けないよ。僕。負けない！」

そう言い、モンスターボールにヒーロを戻すタキ。

これで残すポケモンは共に一体づつ。ヒーロの活躍で試合状況をイーブンに戻し、タキVSピリカ。最終決戦へ！！

第四十五回。決着決着決着！！

両者残すポケモンは一体。息を呑み、流れる汗を拭くのも忘れ、タキはスツとモンスターボールに手をかける。

いつもよりもモンスターボールを手に取る距離が短いように感じる。不思議だ。なんだか、モンスターボールの方から自分呼びかけている気がする。不思議だ……そうか……

「僕を呼んでくれてるんだね。ごめんね。まだ一度も触れ合えてなかったね。初めまして僕がタキです。僕を望んでくれてありがとう。初めましてエビワラー。僕が……君のトレーナーです……！」

眼を閉じ、ニツコリ微笑みながら、優しくモンスターボールを投げ、エビワラーを場に出す。

エビワラー。体長1.4m。体重50.2kg。見た目の通り、パンチを得意とするポケモン。その破壊力は殺人級である。

そして、対するピリカ。どうやら対戦相手のタキに対し、感激中の様子。

「いいですね。最高ですね。こんな熱いバトルはいつぶり？ 私のポケモン達も皆感激……しかも、バトル終盤。場に出すポケモンに初めましてときましたわ。どこまで最高ですね！ これは絶対……負けられませんわ」

一頻りはしゃいだ後、すぐにポケモントレーナーピリカの顔に戻る。

そして、豪快にモンスターボールを手に取り、モンスターボール

を放る。そして、大きく叫ぶその名は。

「いきますわよペルシアン！ 最後に笑うのは、私ピリカ。そして私の全てのポケモン。その一択ですわあああ！」

ペルシアン。体長1'0m。体重32'0kg。額に宝石がついているのが特徴的。

ポケモンは出揃った。後は、バトルのみ。タキVSピリカ。エビワラーVSペルシアン。マスターゲートAブロック決勝戦。ポケモントレーナーとして、ポケモンとしての全てをぶつけたバトルの結末が今……

「では……エビワラーVSペルシアン……バトル開始！」

始まった！！

まず、攻撃を仕掛けるはペルシアン。縦に横に、不自然に揺れていたかと思うと、凄まじい瞬発力でエビワラーに飛び掛る。

そして、見るだけで痛そうな鋭い爪を浴びせようと、エビワラーに向け、爪を振りかざす。

いきなりの奇襲、ピリカは完璧に成功したと小さくガッツポーズをした。ペルシアンの奇襲攻撃。今まで幾度無くバトルしてきたピリカ。そのピリカのペルシアンの奇襲攻撃の成功率。実に100%。外したことが無い。それほどの瞬発力なのだ。

その証拠に、ペルシアンが飛び掛った瞬間、エビワラーは反応することが出来ていなかった。このままでは当たる。

しかし、一人の男は余裕そうにエビワラーを見つめる。

それはタキではない。タキはしてやられた。そんな顔をしている。もう、攻撃は当たったとでもいうように、既に次の展開に頭を働かせようとしている。

もう一度言う。それはタキではない……

「なめるでねえ。タキもピリカも……おらあのエビワラー。なめぢやいげねえよ。エビワラー。このフィールド、おめえのフィールドにがえでやれ……おつど。言っでる間に聞きこえでぎだ。もうここは……おめえのフィールドだ」

エビワラーの元トレーナーマツリ。マツリには全てお見通しだった。

こんな緊迫したムードの中、一人優しい笑顔でエビワラーを見つめ、平気で独り言をかます。そして、その独り言は現実となった……

「かわした！　かわしましたエビワラー！　データによると、ピリカ選手のペルシアンの奇襲攻撃の成功率。実に100%。しかし今、この場で、確にかわしました！　タキ選手のエビワラーが不敗神話、いや、奇襲神話を華々しく打ち破ったあああ！　これは歴史に残る瞬間！　我々が生き証人！　見事。感激です！」

盛り上がるアナウンス。耳鳴りが起こりそうな程の観客の声。タキとピリカ。ポケモンバトルに命を刻み込むトレーナーまでもが啞然とエビワラーを見つめる。

マツリの言うとおり。今、この瞬間。少なくともこの瞬間、この会場はエビワラーのフィールド。エビワラーに吞まれる会場の中、ただ一人冷静に笑みを浮かべて「おっげえおっげえ」と頷くマツリ。流石である。

「なんですのこの空気……まるで私達が敗れたかのような……なめちゃいけませんことよ。今まで奇襲攻撃が成功してきたのはタキのような素晴らしいトレーナーと巡りあわなかっただけの話。ただそれだけですわ。そんなことで慢心なんて……そんな気持ち一欠けらもございません。ですわねペルシアン」

そしてここにもう一人、エビワラーに吞まれず、自我を取り戻したトレーナーが一人。静かに、だが力強く。ペルシアンに向け言葉を発する。

ペルシアンは、目線をピリカに向け、スッと戦闘態勢に構える。

「尻尾が水平……流石ですわ。それでこそ私のポケモン。勝ちますわよ。絶対。勝ちますわよ！」

その言葉と同時に、ペルシアンの眼がギツと見開き、エビワラーを捉える。そして、飛び掛る！

「来たよエビワラー！」

タキも、ペルシアンの気配を察知し自我を取り戻す。そして、ハッと言葉を発したその瞬間。エビワラー。動く。

「……向こうが上……ですの？」

ピリカ絶句。

それもそのはず。攻撃を仕掛けたのはペルシアン。しかも、瞬発力重視というお墨付き。

しかし、蓋を開けてみれば、攻撃の瞬間は互角。ペルシアンの爪はエビワラーの頬をかすめ、エビワラーの拳もペルシアンの頬をか

すめた。

つまり、瞬発力。間の差を埋める最大の能力。これは、エビワラ
ーの勝利。

この時、タキは一つ、思いついたことがあった。
そっくりなのだ。この間を埋める動き。そっくり。もう、叫ばず
にはられない。

「タイソン！ 君の名前はタイソンだ！ よしタイソン！ 一気
にいけー！」

飛び跳ねながら命令をだすタキ。なんて嬉しそう。楽しそうな表
情なのだろう。

そんな表情を見て、ピリカは思わず顔が緩んでしまった。もう、
この時点でこのバトル。勝負は決していたのかもしれない。

タイソンは、タキの勢いを受け取ったかのように、右手に炎、左
手に氷の膜を浮かびあげ、ペルシアンに拳をぶちかます。そして、
最後に電気の膜で終結！

「ペルシアン戦闘不能！ ピリカ選手の手持ちポケモン0。これに
より、勝者。タキ選手！ そして、マスターゲートAブロック……
優勝決定！」

会場からは「おめでとう」の声が上がる。そんな声援に包まれな
がら、改めてタキは自分がポケモントレーナーなんだと思い直す。
今はただ、純粹に嬉しい。

「タキ。おめでとですわ」

ピリカがタキに話しかける。

「ありがとうピリカ！」

ニッコリと微笑み、言葉を返すタキ。

その微笑みに対し、一つ大きいため息をつくピリカ。

「それですわそれ。その顔」

タキの微笑んだ顔を指差すピリカ。

「ごめん……ちょっとはしゃぎすぎたね」

当然、ポケモンバトルには勝者と敗者が存在する。当然、勝者は嬉しいが敗者は悔しい。勝者が喜ぶのは当然だけど、それを敗者の前で行うのは良くない。タキはいけないうことをしたと反省した。

そんなタキに対し、また一つ大きなため息をつくピリカ。

「そうじゃありませんわ。タキ。タキの笑顔はポケモンを……相手トレーナーでさえも惹き込む力があります。そのせいで、私は後で、私のポケモンたちに謝らなければなりませんのよ。相手に惹き込まれ、自分のポケモンを一人ぼっちにするトレーナーなんて言語道断。しっかり謝りますわ。まあ、話をまとめますと、タキ。あなたはやっぱり最高ですわああ！！」

言葉を言い終わると同時に、ペルシアンのような勢いでタキに抱きつくピリカ。

これには会場からも、「おおー」という言葉が響いた。

「なっ……」

これに最もオロオロしたのはユリカ。言葉にならない反応を見せる。

そして当然。

「そんな赤くなってまでムキになんたって。ユリカ姫。これくらいじゃタキ王子は逃げはしませんよぉ」

おちよくるのはカケオの役目。

カケオのちょっかいを真に受けたユリカは、勢い良く立ち上がり、カケオに人差し指を指して反論する。

「違う。私はそういう意味で心配しているのではない！ 私はただ純粹に……」

ここでユリカの必死の反論を遮るカケオ。

「分かったから落ち着きなさい。俺が悪かった。よく分かりましたごめんなさい」

そしてその後、誰にも聞こえないような声で何か……呟いた。

そして場面は変わり、抱きつかれてアタフタするタキ。

「恥ずかしいから！ 凄く恥ずかしいから離れて離れて！」

タキが赤面しながらそう叫ぶ。

すると、ようやくピリカが離れた。

「何照れてますのタキ。こんなの挨拶じゃないですか。意外とウブですね」

フツと笑うピリカ。

この時タキは地味に傷ついた。でも、なんだか笑みが込み上げてきて、最終的にピリカと二人で大笑い。とても楽しいバトルとなった。

そして、いよいよ退場。そこでピリカは言った。

「タキ。あなたとはまた会うことになるでしょう。そんな気がしてならないですわ」

「うん。僕もそんな気がする。また会おうね！」

「はい！ では、ごきげんよう！」

この言葉は決して嘘ではない。ポケモントレーナーの勘というのは存在し、きつといつかこの二人はまた……出会うことになるのである。ユリカやカケオと再会したときのように突然に。二人は出会っているのである……

そして、タキ。マスターゲートAブロック。制覇！！

第四十六回。優勝決定戦会場へGO！

マスターゲートAブロックを制覇したタキ。

これにより、タキはマスターゲートAブロックの代表として、マスターゲートBブロック制覇者との優勝決定戦が行われる。

その一大イベントに集まる人数は半端ではない。Aブロック会場では入りきらない人数が優勝決定戦に押し寄せる。会場移動をしないとならないほどの大人数。

そんな一大イベントの中心人物にタキはなる。それはもう半端ない重圧がのしかかる。

しかし、マスターゲートAブロックで死闘を繰り広げてきたタキ。精神的にも少しは成長したのだろう。重圧に吞まれるどころか、ワクワクした顔つきで優勝決定戦会場へと向かう。

そのワクワクした顔つきは、タキの移動中にピッタリとガードしているガードマンが「緊張してはおられないのですか？」と聞くほど。それに対しタキは「してるよ。凄くしてる。でも、それ以上にワクワクが止まらないんだ」と返す。これにはガードマンもプツと笑ってしまう。

そして、しばらく歩くと、前に立ちはだかる大きな会場。

これが、僕が戦う会場かと、流石のタキも息をゴクツと飲み込む。そこに、ガードマンの一人がタキの肩にポンツと手を置き、話しかける。

「どうです。大きな会場でしょう。タキ様には更に大きく見えることだと思います。多くのトレーナーは、ここでバトルすることに憧れを覚える。しかし、ここまで辿りついたトレーナーは、この大き

な会場を見て、バトルすることに少なからず恐怖を覚えるのです。タキ様はどうですか？」

タキは少し考えて、頭を人差し指でかきながら、苦笑いで答えを返す。

「いやあ。怖い。凄く怖い。ワクワクするのは確かだけどやっぱり怖い。でも、この大きな会場で恐怖よりもワクワクが勝ったらもつといいトレーナーになれる気がする。だから、僕は精一杯ワクワクするよ。恐怖を感じながらワクワクを感じる。これって普通じゃ絶対味わえないことだから。精一杯贅沢を楽しまなきゃね！」

正直に答えるタキに、ガードマンは少し啞然とした後、またプツと笑った。

「私、会場までトレーナー様を護衛する中立の身でありながら、あなたを応援したい気になってしまいましたよ……あつ、これ秘密ですよ。こんなこと知れたら私、クビになってしまいますので！」

「うん！　ありがとう。頑張るよ！」

慌てるガードマンに、ニコツと笑い親指を立てながらガードマンに言葉を返すタキ。

そんなタキに、笑顔で深くお辞儀をするガードマン。

そんなガードマンに見送られながら、タキ。優勝決定戦会場の中へ足を踏み入れた。

第四十七回。マスタートゲートBブロック制覇者

優勝決定戦会場へ足を踏み入れたタキは、案内人の案内の下、バトルフィールドへ。

一歩一歩地面を踏みしめる事に、自分の心音が聞こえてくる。

恐怖と対面する自分。ワクワクと対面する自分。二つの自分が混ざり合って、そしてそれが一つとなり自分となる。こんな贅沢な体験は無い。

「さあ。この扉の先がバトルフィールドでございます。そして、この扉はタキ様自身がお開けになってください。恐らくこの先は、タキ様がまだ味わったことの無い世界。自分で、自分のタイミングで、自分の見てきた世界の先をご確認くださいませ」

着いた。いよいよこの先がバトルフィールド。

案内人が言うに、この先はまだ自分が味わったことの無い世界。どんな世界だ。分からない。分からないからこそ自分で開くしかない。

扉が重い。世界の先を見るのを拒んでいるのか自分が……いや、そんなことはない。見たい。見たい。見たい！ タキはそう思っている。

そしてもう一つ。この扉を開けないと、マサヤとの約束が果たせない。マサヤはきっとBブロックを勝ち抜いてきている。そしてもう、世界の先にいる。だから、自分も開けないと。自分で進まない……自分で決断しなきゃならないことは必ずある。多分、今その一つの時。

重い扉をゆっくりと開くタキ。

そして、世界の先へ一歩足を踏み入れるとそこは……

「これが……世界の先……」

圧倒的。なんて広さ。さっきまで自分の心にあつた恐怖とワクワクが消え去る。

世界の先。そこは、なんて圧倒的な世界。タキの心を一瞬でも無にしてみよう。そんな世界。

その圧倒的な世界を体感し、観客を見渡し、そして、前を見る。そこに見たのは、この圧倒的な世界の先の中、吞まれたとは思えない真つ直ぐな瞳でこちらを見つめる男。この男はマサヤじゃない。この男は……

「よお。タキじゃないか。久しぶり！」

「……シヨウ……」

タキの瞳に映るは、シヨウ。まさか、ここで再会するとは……

「まさか、こんなところで出会うとはなあ。運命ってのは存在すんのかねえ」

しみじみとそう言うシヨウに、タキは一つの疑問を感じた。

「シヨウ。君はこの場に来て、どうしてそう余裕でいられるの？ 僕、正直今、吞まれてるよ。何も感じない。シヨウに出会っても何も感じないくらい何も感じれない。吞まれてる」

そんな真面目な質問に、シヨウは、おいおいとため息をつく。

「タキらしくない質問だな。どうしてそう余裕でいられるの？　じやねえよ全く。考えてみる。俺達の目標はどこだ？」

「ポケモンマスター……」

「だろ。じゃあ、ここはどこだ？」

「マスターゲート……」

「そうだな。なら、呑まれる必要なんかないじゃないか。ここはマスターゲート。ポケモンマスターへの通過点だぜ？　通過点ってのは通るってことだ。そんなところで呑まれてたら、そこから先はどこも進めねえだろ。大体、俺は呑まれるって表現はあまり好きじゃない。呑まれるってことは、バトルで勝つ負ける以前に自分に負けてんじゃないか。そんな気持ちじゃないねえよポケモンマスターってのは」

この瞬間。この大きな会場。タキの心を呑み込んでしまう程の会場が静かにピタツと止まった。呑まれてしまった。タキも、観客も、会場でさえも……シヨウが呑み込んだ。

タキは改めてシヨウの凄さを思い知った。しかし、それと同時に、自分の中で何かが生まれた。吹っ切れたというのとはまた違うこの感覚。全てがリセットされ、また自分を構築するこの感覚。タキにとって、シヨウの一言は救いの一言となった。

「ありがとうシヨウ。ようやく僕になれてきた。この借り……バトルで返すよ！」

「おう。利子付きで返せよ。期待すんぜ」

このやり取りに、優勝決定戦を見に来ているコルト達も動揺を隠せない。

「あれがシヨウか……」

ユリカとコルトが声を揃えてそう言う。

二人は、旅の途中、度々タキからシヨウの話を聞いていた。まさか、これほどのトレーナーとは思ってはいなかったが……

「まだ戦^{ただ}がつでねえけど、間違^{まちが}いなく強いな^{つよ}」

「悔しいけど、トレーナーとしての実力では僕達より上……か」

マツリとカケオがシヨウを称賛する。

特に、カケオが出会った事もないトレーナーを称賛するなんて初めてのことである。

「一言でタキの瞳を蘇らしよった。そりゃマサヤが負けたのも頷けるわ……」

「タキ……」

皆、シヨウを称賛し、タキを心配する。なんだか、優勝が決定してしまっただようなこの空気。

タキ。この空気を覆すことは出来るのか……

第四十七回。マスタートゲートBブロック制覇者（後書き）

久しぶりですショウ。回数にして第九回ぶり。

実際の時間として、約一年三ヶ月ぶり。

ちなみにショウというのは、タキの友達であるライバルです（汗）

第四十八回。友達

異様な雰囲気にもまれた会場。少しの間の沈黙が流れる。
だが、この沈黙を破るのもまたシヨウ。

「なあタキ。あそこで見てる団体さんはお前の友達か？」

シヨウが、会場の一点を指差す。

「あつ……皆……見てくれてたんだ」

シヨウが指差したのは、当然、ユリカ。コルト。マツリ。カケオの四人。

どう見てもタキを見つめているその四人に、シヨウは気になったようだ。

だが、タキは知らなかったのだ。というか、考える暇がなかった。タキは今までずっと、一人で戦っている気でいた。いや、ポケモンと自分の二つの精神で……

しかし、フィールドに立つ瞬間は自分一人。だが、それは違ったのだ。

この瞬間。タキには、このフィールドがとつてもとつてもちつぽけなものに見えた。

だって、周りにはユリカが、コルトが、マツリが、カケオが、この場にはいないがピリカもいる。皆、自分の周りで見ていてくれる。自分一人じゃない。怖いものなんて何も無い。

「どうやら、ご名答みたいだな。羨ましいね。一人旅つてのは辛いもんだぜ全く」

シヨウがため息を一つつきそう呟く。シヨウはどうやら、ここま
で一人できたようだ。

やはりタキには、人を惹き付ける何かがあるのだろう。シヨウは
そう思った。

「ありがとうシヨウ。僕はいつもシヨウに助けられてばっか
りだ。今も……今だって僕はシヨウに助けられた。これで僕は僕と
してシヨウと戦える。もう、何も恐くないよ。でもそれは……」

「ユリカ！ コルト！ マツリ！ カケオ！ ありがとう！ 僕……
精一杯頑張るよ……！」

タキは精一杯の大声で叫んだ。その声には、本当に感謝している
んだろうという思いがのしかかっていた。

「大丈夫みたいねタキ」

ニッコリと微笑むユリカ。そんなユリカの言葉に、他の三人も、
ニッコリと微笑み頷く。

もう、四人には、タキが気負いされているという心配はない。た
だ、タキが精一杯頑張るのを見届けるだけ。もう、見ている側の不
安もない。当然、会場も同じ。理論で会場を圧倒したのがシヨウだ
とすると、タキは気合で会場を圧倒した。

「いいねえ。本当、お前のそういうところ好きだぜ。こつちも燃え
てくる。よっしゃ！ 審判！ このテンションのまま、おっはじめ
ようぜ。俺とタキで、マスタートゲート史上、最高のバトルつてのを
演出してやつからよお！」

その言葉に、また会場は盛り上がる。

そして、そのテンションのままバトルが始まる。

そして、このテンションを作ったのはタキ。ショウもまた、タキのその気合に動かされた一人ということだ。

第四十九回。バトル開始！！

ショウの……タキの言葉で盛り上がる会場。そして、そのままの
テンションで行われるバトル。

タキもショウも、興奮状態でモンスターボールに手をやる。
そして、タキがトップバッターとして繰り出すポケモンは……

「いつも……いつも先鋒は君に任せてきた。だから、今回も君に任
せるよ。ロッキー！ 君に決めた！」

タキが場に出したポケモンはロッキー。今思うと、このマスター
ゲート。全ての戦いの先鋒はロッキー。輝かしき特攻隊長である。
ちなみにロッキーは、この先鋒キャラに誇りを持っている。

「おお。お前に似て熱そうなゴローンじゃねえか。じゃつ、俺は俺
に似たクールなポケモンで攻めっかな。スプーン。軽く曲げてやれ」

ニヤツとした表情で場に出すポケモンは、スプーンと呼ばれる黄
色いポケモン。タキは早速ポケモン図鑑を開く。

名はユンゲラー。体長1.3m。体重56.5kg。筋力がほと
んどないため、常に超能力を使い移動するポケモン。右手に持つ銀
のスプーンと長い髭が特徴的。

「なんだかまあ、そのままなネーミングだねまた」

タキがすかさずツッコミをいれる。

「ハハハ。それでも短くしたんだぜ。元々は髭スプーンだったんだ

が、略した」

「どっちにしてもそのままじゃないの！」

なんだかこういうやり取りも懐かしい限りである。

そして、そんな懐かしい会話も済み、いよいよバトルが始まる。
これは、タキにとってある意味でのリベンジ戦。今度こそ……今度こそシヨウに一泡ふかせてやると意気込む。

「それでは、ゴローンVSユンゲラー。バトル開始！」

まず、攻撃を仕掛けるのは例の如くロッキー。スプーンに自慢の拳をぶつけようとギリギリと近づく。

しかし、そんなロッキーの行動に、シヨウもスプーンもフツといった笑いを見せる。

「おいおいタキ。スプーン相手に間合い詰めか？ そりやお前……悪手だろ！」

シヨウがそう言うと、スプーンが何やら念仏のような言葉を唱えだした。

いわゆる詠唱というやつだろう。そして、唱え終ったと同時に、スプーンの持つスプーンから、怪しげな光がロッキーに向かって飛び出した。

そして、その光は、確実にロッキーを捉える。ダメージ確定だ。

「ロッキー！」

心配そうな声を上げるタキ。

そして、そんなタキを見てニマツとした笑みを浮かべるシヨウ。

「当たり前前の結果だぜ。俺のスプーンとガチンコ喧嘩バトルが出来ると思うなよ。俺のスプーンに間合いは関係ねえ。このフィールド全体が攻撃範囲。分かるだろう？　これがどれだけ恐いかが」

シヨウがそう言うと、スプーンがまた何か詠唱を唱え始めた。

まだ、ロッキーは、さっきのダメージが回復しておらず、フラフラしている。見事に無防備だ。

「スプーン、サイコネシスだ。この熱いゴローンを、優雅なフィールド旅行に連れてってやれ」

指をパチンと一つ鳴らすと、スプーンの持つスプーンがキラリと光る。

するとどうだろう。あれだけ重そうなロッキーがフワリと持ち上がり、シヨウの言うように、フィールドを優雅に舞っているではないか。

「これは……どういうこと!？」

不思議そうにするタキ。

「これか？　これはマジックだ。種も仕掛けもない本当のマジック。クールだろう？」

どや顔でタキに語るシヨウ。だが、実際にいいようにやられているタキに返す言葉はなかった。

秘策も何も思いつかなかった。だが……何かが吹っ切れた。

しばらくして、地面に叩きつけられたロッキー。もう、ダメージは致命的。

このまま何もすることは出来ないのか……ロッキーは心をギュッと締め付ける。

「違う。そんなはずはないよ！」

いや、何も出来ないことは無い。タキとロッキーの思いがシンクロする。

逆転できるような秘策が思いつかないにしても、何も出来ないことはない。

ロッキーに出来ることはまだある。自分の能力を最大限に発揮してもいずに何が出来ないだ。

「ロッキー……！ 分かってるね！？」

タキの一言に、ロッキーは目線で合図する。当然、その合図は分かっているの合図。

そして、ロッキーは回り始める。

摩擦を起こし、大地を揺らし、砂埃をあげる。目標は種も仕掛けも無いマジシャンのスプーン。このままいいようにやられていいはずがない。ロッキーは全てをかけて回転する。

「いいじゃないの。タキのポケモンらしい選択だ。だが、俺のスプーンの前には無駄な選択だぜ！」

「無駄かどうかはやってみなきゃ分からない！ そうじゃなきゃ楽しくないじゃない！？」

「はっ！ そりゃごもつとも！」

タキとシヨウの言葉の掛け合い。そして、それと同時に最大限まで回転率を極めたロッキーが、スプーン目掛けて突進する。

そして、それを止めようと、今の今まで詠唱を唱えていたスプーンが、ロッキーにサイコキネシスをぶつける。

サイコキネシスをくらっても回転をやめないロッキー。止まらないでも唱え続けるスプーン。

「いいねえ。やるじゃない。でも、いつまで抵抗が続くかねえ」

「続くよ。君のスプーンが諦めるまで続けるから僕のロッキーは！」

「はっ……本当に止まらねえでやんの……いいねえ。ゴローン……いや、ロッキーだっけか。意地の音色がビンビン伝わってくるぜ。こいつは馬力飛ばしていくしかねえな！ なあスプーン……！」

全力全快でサイコキネシスを飛ばすスプーン。しかし、止まらない止まらない止まらない！

そして、その回転する熱きロッキーは、遂にスプーンの側まで……

流石のシヨウの顔にも曇りが現れてきた。

正直、直感でヤバイと感じてはいたのだ。そして、側まで寄せられてしまうと、その感じも現実的に……

「気合い見せやがれスプーン！！ この会場全てがお前を疑っても！ 俺は見届けてやるぜ。お前の意地をよ」

その言葉と同時に、ロツキーの回転がスプーンに直撃。

これはもう致命傷を超えたといえるダメージ。会場全てが戦闘不能だと判断する。

そして、それは審判も同じ。

「ユンゲラー戦闘不能！」

審判が旗をあげたその時、ショウが血管むき出しで怒りを露にした。

「馬鹿野郎！！ てめえ審判だろ！？ なのになぜ見えねえ聴こえねえ！？ 俺にはよく聴こえるぜ。スプーンの意地の音色がな。見せてやれスプーン。サイケ光線」

そうショウが言った途端、スプーンの持つスプーンから、あの怪しげな光が放たれた。

そしてその光は、確実にロツキーに直撃する。ロツキーもタキも勝利を確信していたのだ。かわせる筈は無い。そして、ロツキーも、ゆっくりと地に倒れた。

「いいぜスプーン。お前の意地はこれでみんなに届いた。誰も気づけなかったお前の意地は……さあ、ゆっくり眠りなスプーン。誰がどう見てもお前の意地は伝わったから」

少し涙目に、そして笑顔でそう言うショウ。そして、その言葉の直後、スプーンは気絶した。

「さあ、どうだよ審判。それでもユンゲラー戦闘不能かい？」

ショウが冷徹にそう言葉を発すると、審判は自分を恥じるような

瞳でシヨウに視線をやり、弱弱しく旗をあげる。

「両者戦闘不能……」

「そうだよ。これで分かったろ？ ポケモンには意地がある。それを見破れねえようなやつがポケモンマスターになれるはずがねえ。そうたるタキ？ お前は自分のポケモンの意地しか見えてねえようだが……でもよお、その考えを変えるなよ。俺はポケモン全体を見る。お前はとことん自分に関わりのあるポケモンを見る。それでいいんだよ」

タキはまたも見破られた。タキは反省していた。どうして、自分はスプーンの意地を見破られなかったのだろ。正直、完璧に裏をついてくるシヨウに憧れていた。でも、それは違う。

タキにはタキのスタイルが、シヨウにはシヨウのスタイルがある。そして、そのどちらにも長所短所がある。一度裏をつかれたからといって、ほいほい自分のスタイルを変えてはいけないのだ。

「さあ、第二ラウンドといこうぜタキ。まだまだ楽しめそうだ」

「うん。こちらこそだよ！ 流石シヨウだ!!」

タキとシヨウ。第二ラウンド……開始!!

第五十回。大事な大事な二体目

ロッキーVSスプーン。両者戦闘不能で互いにポケモンを二体とした。

そしてこの二体目。これはとても大事なバトルだ。ここで、流れを制したものがバトルを制すと言っても過言ではない。

きつと、その感覚を本能で掴んでいたのだろう。シヨウは迷わず、一つのモンスターボールに手をかける。

「いいねえ。ゾクゾクするぜ全く……やりたいだろ？ やりたいよなあ。ビンビン伝わってくるぜ俺にはよあ。心配すんな。今……開放させてやる。行けキッコー！」

名はカメックス。体長1.6m。体重85.5kg。甲羅の中から2本の巨大なロケット砲が出る。危機的状态に遭遇すると、甲羅の中に隠れる。ちなみに、その甲羅はとても固く、一度甲羅に隠れたカメックスを引っ張り出すのは大変。

シヨウは迷わずキッコーを場に出す。

そして、キッコーの思いを直感で感じ取るのだ。そしてその思いは、大体シヨウと連結する。そうなったとき、脳が働く前に、既に口から伝達されている。

「なあタキ。俺もキッコーも満場一致だよあ。ヒーロを御指名だ。まあ、こっちからすればフィーリングばっちりだから、判断は当然トレーナーであるタキにある。さあ、俺達の思いにどう答える？」

もう、当たり前のように、タキに質問するシヨウ。

これに対しタキは、何の迷いも無く言葉を返す。

「当たり前じゃない。だって、ヒーロが戦いたがってる」

そう。ヒーロのモンスターボールは、シヨウの質問の前から既にタキの手の中にあつた。もう、タキの答えは質問する前から決まっていたのだ。

そして、この言葉に対し、シヨウは、会場がビククりするほどの大笑いをかます。

「やっぱりタキだなお前は。大好きだぜ」

「僕も同じ言葉を返すよ」

なんだか、告白まがいな事になっている現状。

だがまあ、このままズルズルとラブゲームをやっても仕方が無い。

メインはポケモンなのだ。しかも、エース対決なのだ。会場は、早く二体のバトルが見たくてウズウズしている。

その現状に気づいたのだろうか。シヨウが一度仕切りなおす。

「よし。そろそろじゃれ合いも頃合いだな。さあ、出せよ。お前の始まり。お前の魂を俺に見せろ」

「うん！ 見せるよ。僕の全てをヒーロと合わせて……魂を剥きだしにするよ！ 行け、ヒーロ！」

場に出るヒーロ。そして、その眼はその顔は、いつものヒーロよりも更に鋭さを増している。

それもそのはず、ヒーロはまだヒトカゲ時代のあの敗戦を忘れていない。

これは、ヒーロにとってリベンジ戦。タキにとってもヒーロにとっても、魂を剥きだしにする価値のあるバトルなのだ。

そして、静かに熱くバトルは始まる。

第五十一回 エース対決

ヒーロVSキッコー。二体のライバルは、進化を経て再戦する。両者睨み合い、ジツと相手を見つめる。微塵たりとも目線は離さない。気合でも負けてられないのだ。

そして、その気合はトレーナーであるタキとショウにも伝わる。もう、我慢しきれない。二人のトレーナーは、スツと人差し指を互いのポケモンに向け、言葉を発する。

「ヒーロ！ 火炎放射！！」

「キッコー。ハイドロポンプ」

重なる二人の声。

そして、その声は……その命令は……きちんと互いのポケモンに伝わり、同時に技を放つ。

互いに譲らない技のぶつかり合い。いつまで経っても決着のつくことの無いその技のぶつかり合いは相殺。しかし、相性のことも考えると、単純な技の威力はヒーロが勝っているようだ。

「まだ終わりじゃないよ！ 体当たりだヒーロ！」

間合いを詰めるのはヒーロの得意技。相殺した爆風に身を隠し、圧倒的な反射速度で体当たりを繰り返す。

「いやいや甘いね。全く甘い。間合い詰めに自惚れちゃいかんぜ。間合いを詰められたら、その間合い詰めを打ち落としてやればいい。」

キッコー。メガトンパンチで応戦だ」

ヒーロの繰り出す体当たりを、メガトンパンチで応戦するキッコー！。

いくら間合いを詰められても、いくら爆風で身を隠しても、いくら勢いのある攻撃だったとしても、打ち落としてしまえば意味が無い。キッコーなら全然余裕で出来る。ショウがそう信じているからこそこの命令。そして、それは見事に当たる。

ヒーロの体当たりの勢いを増してでも打ち負けるキッコーのメガトンパンチ。身体的パワーではキッコーが勝る。

どちらも譲らぬ攻防戦。魂と魂のぶつかり合いに、会場は一番の盛り上がりを見せる。

「やっぱりショウは凄いや！ 見事に打ち返されちゃった！」

「へっ。んなこと言ってる場合でも無かるうに」

ショウの冷静な判断から繰り出される命令に興奮するタキ。常に熱く勢いで命令するタキがショウのような冷静な命令に懂れるのは意外である。

「だね。でも、次はギャフンと言わせて見せる！ ヒーロ！ 翼を羽ばたかせ風起こし！」

フィールドに風を集め、突風を吹かせるヒーロ。しかし、キッコーは動じない。

「おいおい。俺のキッコーはそんな風じゃ……っておい！ 打ち消

せキツコー！」

ショウが初めて動じた。なんと、ヒーロは上に向かって火炎放射を吐いたのだ。

そして、その火炎放射は風によって散らばり、雨のようにフィールドに炎が降る。

それは、ヒーロにもダメージがあるように思えるが、多少の炎など、ヒーロにはビクともしない。これは意外と効果的な攻撃である……いや、攻撃ではないのかもしれない……

炎の雨を打ち消そうとするキツコー。だが、それこそがタキの狙い。

「よし！ キツコーに体当たりだヒーロ！」

「なっ……これは不味いんじゃないか……」

炎の雨に気を取られるキツコーは隙だらけ。これはチャンスだとヒーロにもう一度体当たりを命令するタキ。

今なら距離も近く、隙がある。更に、持ち前の間合い詰めもある。その全てが揃った今。ヒーロの体当たりがクリーンヒット！
大きな体をしたキツコーが石の様に吹き飛ぶ。

「間合い詰めも役立つときは役立つでしょ？」

ニヤリとした顔でショウに言葉を放つタキ。

「まったく……タキがこんな効率いい攻撃してくるとは予想外だったぜ……予想以上の成長だな」

今のタキの攻撃を高く評価し、驚いているが、とても嬉しそうなシヨウ。

「うん。僕は僕のポケモンと共に成長してるよ。ポケモンが僕を成長させてくれる」

「お前らしい回答をどうもありがとう。さて、次は俺のターンといこうか！」

シヨウはそう言つと、キツコーに甲羅へ閉じこもるようにと命令。そして、これは何処かで見た光景である。

「さて、俺は今から甲羅アタックをするぞ。ちゃんとかわせよ」

シヨウは次の攻撃を宣言した上で、本当に甲羅アタックを仕掛けてきた。

「あまりなめない方がいいよ！　かわせヒーロー！」

楽々とかわすヒーロー。

それを見て、シヨウは満足顔。

「そりゃそうだな。なら、これはどうする」

甲羅に閉じこもったキツコーが回転を始めた。

そして、その回転の勢いで大きな体のキツコーが浮かぶ。そしてそのままの勢いで甲羅アタック。いや、スピニアタックでも言うべきであろうか。浮力により、浮いた甲羅が地面につく瞬間。甲羅は不規則にバウンドする。これを見切るのは難しい。

だが、反射神経に優れたヒーロ。かろうじてこれをかわす。

「これをかわすか！ いいねえ。でも、こいつは無理だろうよ！」

シヨウの自信も頷ける。

なんと、キッコーの隠れた甲羅の間から水が噴射されているのだ。回転しながら水が噴射。これはもとのポテンシャルも高くないと出来ない。まさに、唯一無二の芸当である。

「さあ、いくぜ。キッコー！ 激流葬！」

これは流石のヒーロもかわすが出来ない。攻撃がクリーンヒットする。

「よし！ さっきの借りは返したぜタキ。でも、俺の攻撃は止まらねえけどな！」

また、激流葬の準備を始めるキッコー。

確かに、これに対する攻略法は全く浮かんでこない。だが、タキもヒーロにしか出来ない唯一無二の技があることを理解している。そして、それは今ここで使うべきだとも理解している。

「確かに凄い攻撃だよ。でも、僕は……ヒーロはそれでも負けない。諦めない！ いくよ。キッコーの攻撃を止めてみせる！」

「はっ！ やってみなタキ。タキが何をやろうとしてるかはまだ分かる。でも、だからってここで引くのはタキに失礼だ。ヒーロに失礼だ。キッコーに失礼だ。そして、俺にも失礼だ」

キッコーの激流葬がヒーロを襲う。この唯一無二な攻撃に、ヒー

口は耐える。水を受けても引かない。甲羅が近づくにつれ、水の勢いも増す。だが、それでも引かない。そして、甲羅がヒーロに触れるその瞬間。力強く甲羅を受け止めた。スピンの勢いも耐え殺し、名の通り、受け止めたのだ。

そう。これぞヒーロの唯一無二の技。その根性は、どのポケモンにも負けない。

「いいねえ……でも、まだあるんだろ？ 見せてみるよヒーロの全てを！」

興奮状態のシヨウ。その顔は喜びつつもゾクツとしており、正にバトルに酔っている。

「うん。見せるよ。奥の奥まで出し切る！ ヒーロ！ 地球投げ！」

高い高い上空に飛び去るヒーロ。そして、地球を描き、急降下する。もう、見慣れたこの光景だが、初めて見た観客も、もう、何度も見た観客も、同じようにその美しい光景に目を奪われる。

だが、シヨウはそんな美しい技を黙って見つめる。今のシヨウの心にはキッコーしかない。

「キッコー。やっぱりお前は最高だ。いいぜ」

シヨウがそう呟くと同時に、ヒーロの地球投げが炸裂した。

会場はフィニッシュの瞬間を見たかのような大盛り上がりを見せる。

だが、シヨウは自信満々な顔をしてタキに語りかけるのだ。

「なあタキ。次の手は考えてるか？ 俺は考えてる」

ショウの質問に驚いたタキが言葉を返そうと口を開いたその時だ。

「えっ……そんな!」

タキがショウの質問以上に驚く光景を目にした。なんと、地球投げを受けたはずのキッコーが立ち、仕掛けたはずのヒーロが沈んでいるのだ。

「そうか。出し切ったんだなヒーロ。いいぜ。お前の意地も俺にガツンと伝わった」

「ヒーロ……」

そう。ヒーロは全てを出し切ったのだ。そして、技を放った時点で力尽きた。

だが、そのヒーロの全てをキッコーが上回った。それが全てである。

そして、この結果を受けて、ジツとヒーロを見つめているタキ。これにショウが話しかける。

「なんだタキ。ヒーロが心配か?」

しかし、タキは、心地良さそうな顔で首を横に振る。そして、ヒーロを見つめながら返事を返す。

「見てよヒーロの顔。とってもいい顔してる。こんな満足した顔のヒーロは初めて見たよ。楽しかったんだね。ヒーロは凄く楽しかったんだ。きつと、キッコーにありがとう。次は倒すからなって言っ

てるんだ。トレーナーとしてこれ程嬉しいことはないよね」

これにはショウの顔も緩み、まだバトル自体は終わっていないというのに、ガバツと肩を組む。

「やつぱりお前はタキだ。そして、俺のライバルだ。任せとけ。また次を作ってやる。次はあれだ。ポケモンマスター決定戦で決着だ。最高の舞台で最高のバトル。いいねえ。完璧だ」

既に今後を見つめているショウ。

それに対しタキは、元気良く首を縦に振った。

「リザードン戦闘不能！」

ヒーロとキッコーのエース対決。次はきつと、ポケモンマスター決定戦で……

第五十一回。エース対決（後書き）

最近、ヒーロの戦い方が同じになっているような気がする。マンネリにならない方がいいのだが（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0006e/>

ポケットモンスター+

2010年10月11日16時00分発行